



第十一 日清戦役鴨綠江の戦鬪に於ける清國軍の情況

一 日清兩國軍編制、裝備の概要

清 國 軍

日清戦役當時に於ける清國軍中最も信頼し居りたるは勇軍、練軍であつた。此勇軍と稱するものは西曆一七九六年に白蓮教匪を討伐するに方り壯兵を募集して古來常置の所謂八旗及綠營兵隊の不足を補ひたるに始まり、其後一八五一年長髮賊の猖獗せる際にも此種壯兵を募集したが、其威名は八旗綠營に比し遙かに優るものがあつた。之が勇軍として殘置せられたものである。而して八旗綠營の不評判な固有軍隊中から、選抜兵のみを以て編成せられたものが所謂練軍である。此勇軍及練軍は或は其屯在の地名を冠し或は創設當時の長官の姓字を冠し或は勇ましき文字を冠して稱號となし、番號をつけない。而して兩軍共に歩、騎兵のみの編成で、砲兵は歩兵の編組内に加へ、工兵、輜重兵も亦歩兵中に別に擔任者が定められてある。而して具體的編制に就ては一様でないが、大體の標準は概ね左の如きものであつた。

歩兵

營（我が大隊に相當す）本部及四哨よりなる（總員五百人）

本部は司令部及六分隊（内二分隊は火砲各二門、三分隊は刀矛、一分隊は小銃で分隊人員は下士官一、兵十）

哨 司令部及八分隊よりなる（内二分隊は擡槍、四分隊は刀矛、二分隊は小銃、分隊人員下士官一、兵十一）

騎兵

營 本部及五哨（總員二百六十三名）

哨 五十二名

一營は戰術單位で、若干營を合して軍となし、之に前、後、左、右、中軍等の名を附し、營長は營官と稱し參將（中佐）を以て當て、軍長には總兵（少將）又は副將（大佐）を、又若干軍を合して提督（中將）を以て指揮官とする。

野戰砲は主としてクルツア野、山砲を用ひ、小銃は主としてモーゼル式を用ひた。然し實際各隊各様で頗る多種多様な武器を携帯し、而かも其戰闘員の如きも通常充實して居らず、一營の人

員も三百を算し得る位が通常であつた。

日 本 軍

我が軍は當時戰時に於ける編制は規定上に於て完備して居つたが、實際に於ては完了して居らなかつたのである。即ち各師團の騎兵の如きは平時に於てすら未だ人馬を完備するに至らなかつた。其他の諸隊でも在郷兵得員少なき爲、完全なる編制となす能はざる有様であつた。然し動員を逐次に實施した爲、此時間の餘裕により概ね必要なる諸機關を整備するを得たのである。

軍隊の編制は概ね左の通りであつた。

野戰師團 歩兵十二大隊（近衛は八大隊）、騎兵三中隊、砲兵六中隊（野砲四中隊、山砲二中隊）（近衛は野砲四

中隊）、工兵二中隊（近衛は一中隊）で之に獨立作戰に任じ得べき諸機關と輜重とを附した。

總員約一萬八千五百、馬五千六百で、戰闘員は約歩兵九千六百、騎兵三百、野砲二十四門、山砲十二門。

野戰師團の歩兵は村田銃、後備隊はスナイドル銃。

村田銃は十三年式と十八年式とで、口径十一耗、初速四百六十米、射距離二千四百米但し明治二十七年に入り村田連發銃制定せられたが、近衛、第四師團のみが使用したに過ぎぬ。

此銃は口径八耗、射距離三千百十二米であつた。
野、山砲は青銅砲で、口径七耗半、野砲は五千米、山砲は三千米の射距離であつた。

二 清國軍鴨綠江畔の占領 (第五圖参照)

牙山、成歡の役に敗北し、更に平壤の役に不利の戦闘を交へたる清國軍は、義州に退却を續行し愈、自國領内に足を入れんとした。敗軍の將提督葉志超は明治二十七年九月二十二日同地に於て國境防備に關する勅語を受け、且つ總理大臣李鴻章の國境防禦令に接した(清國では文官たる李鴻章が戰略上の統帥權を有するの制であつた)。そこで翌二十三日から二十五日に互り主力は鴨綠江右岸に退却したが、其後衝突たりし馬隊二哨は十月三日義州に於て日本騎兵第五大隊の爲に撃退せられ、爾後左岸には清國軍を見ざるに至つた。

當時奉天は清國東方の重鎮であり、清朝創業の地である。然るに清國軍は彼等の豫期に反し、侮蔑せる日本軍の爲朝鮮半島から驅逐せらるゝに至つたので、其最も重視する奉天の防備を完全ならしむるの必要を痛感し、茲に鴨綠江の天嶮を利用して日本軍を一步も領内に侵入せしめざる決意をなし、新たに勇將宋慶を以て主力軍の總指揮に任せしめ、又李鴻章に直屬する黑龍江將軍

依克唐阿をして宋慶と協力して日本軍を撃退せしむべく命令した。依克唐阿は九連城に於て宋慶と會し、協議の結果、鴨綠江右岸に於ける防禦陣地を左の如く定めた。

要 領

九連城を中心とし義州に對し正面を向け、右翼は鴨綠江右岸に沿ひて安東縣に互り左翼は鬩河右岸に沿ひ葦子溝附近に互る間に主陣地を占領す

配 備

- 一 九連城附近(司令官劉盛休)
銘字軍歩隊十營一哨、馬隊一哨(約四千七百五十人)
- 二 九連城北方高地に接續して腰溝、馬溝附近の鬩河右岸(司令官聶士成)
牙山軍歩隊六營一哨及銘字軍馬隊一營(約二千七百五十人)
- 三 榆樹溝附近鬩河右岸(司令官馬玉崑)
毅字軍歩隊五營及親兵(約二千五十人)
- 四 葦子溝附近鬩河右岸(司令官宋得勝)
毅字軍歩隊四營(約二千人)

五 老龍頭高地より安東縣に互る間(司令官衛汝貴)

盛字軍歩隊十二營一哨、馬隊五營二哨(約六千三百人)

六 夾河口、青溝(全陣地の左翼後)(司令官依克唐阿)

鎮邊軍歩隊四營、馬隊九營、黑龍江齊字練軍歩隊四營、馬隊二營(約五千五百人)(總豫備隊)軍司令部は大樓房に置き宋慶は其司令部と親兵約一營と共に同地に在り。依克唐阿の部隊以外の諸兵を指揮す。尙ほ右の外、日本軍が南方海岸より上陸することを顧慮し奉軍歩隊八營、馬隊四營等約三千五百人を大東溝より海岸に沿ひ砂子崗(大東溝西方二十五軒)に互る間を、又盛字練軍歩隊二營、馬隊一營を大孤山地方に派遣し、同地に在りし在來の一營と共に何れも警戒に任せしめた。

(178)

小評論 宋慶と依克唐阿とが指揮權を分立せしめられあること、之は同一戰場に於て統帥上寧ろ誤である。宜しく一時李鴻章の直屬を解き、少くも臨機宋慶の指揮に屬せしめねばならぬ。又、江岸の配備を通觀するに、單に義州を中心とする敵の渡河に對しては大體要を得たものと謂ひ得るが、彼が奉天に對する掩護の意味より觀察せば上流方面よりする日本軍の渡河が直接奉天方面に殺到し得るのみならず、九連城乃至鳳凰城方面の軍主力の側背を脅威し

得べき關係位置に在るが故に、最初より相當の顧慮が拂はれねばならぬ。現に此配備を決定したる直後に於て、上流方面に有力なる依克唐阿の兵團が急遽派遣されたのであつた。但し清國軍の河川防禦の目的が不明確であるが、若し此河の渡過に乗じ日本軍と決戦を交ふる必死の覺悟が定まつて居つたとすれば、必ずしも上流方面に多數の兵力を割くに及ばぬ、單に警戒、搜索の爲めのみに止め、日本軍若し大兵力を以て上流方面に向ふも、清國軍は斷然攻勢に轉じ義州方面の日本軍に對し徹底的打撃を與ふべく處置すればよい。

三 清國軍の配備變更 (第五圖參照)

十月十六日に至り日本軍寬甸方面即ち鴨綠江上流に進みつゝあるの情報に接したる宋慶は、大に憂慮し、直に軍機處(我が參謀本部)に向ひ、自己指揮部隊にては兵力分割の餘裕なきを電報した。そこで翌十七日軍機處より依克唐阿に對し「速に長甸河及蒲石河口に移り該地方面の防禦に任ずべき」勅命電報を授けた。是に於て依克唐阿は即日部下諸隊(鎮邊軍十三營及齊字練軍馬隊、歩隊六營)を率ゐ長甸城に向ひ出發した。

又宋慶は日本軍が義州の上流より渡河するの微ありしにより聶士成に牙山軍及銘字軍馬隊(約

(179)

二千七百五十人)を率ゐる鑿河左岸栗子園に移り以て鴨綠江右岸を守備せしめ、自から司令部及親兵を率ゐる葦子溝に移つた。其後、宋慶は更に虎山を以て日本軍の渡河を扼する鎖鑰地であると判断し、聶士成に之が占領を命令した。聶は二十二日馬金鉞に歩隊三營(五十九耗連射砲二門を附す)を附し之を虎山に派遣した。

上流方面の防禦に任ずることとなつた依克唐阿は、安平河口及蒲石河一帯の地區に齊字練軍歩隊四營、馬隊二營を配置して該方面の守備に當らせ、其他の主力(約四千)を以て長甸河口一帯の守備をなす爲司令部を長甸城に置き警備に就いた。故に清國軍は其二萬餘の兵力を以て長甸河口から安東縣に亘る十數里の正面を兩地區に分ちて防禦に任じた譯である。

依つて其配備を述べれば次の通りである。

右翼軍 總指揮官提督宋慶(右翼軍は前決定のもの
と大體は同様である)

一 九連城堡壘團(司令官劉盛休)

銘字軍歩隊十營、馬隊一哨、野砲十四門、山砲十五門(四千七百五十人)

二 栗子園より虎山に亘る間(司令官聶士成)

牙山軍歩隊六營一哨及銘字軍馬隊一營、山砲十門(約二千七百五十人)

三 榆樹溝附近鑿河右岸(司令官馬玉崑)

毅字軍歩隊五營及親兵山砲六門(約二千五十人)

四 葦子溝附近鑿河右岸(司令官宋得勝)

毅字軍歩隊四營、山砲六門(約二千人)

五 鴨綠江右岸に接し沙河兩岸(司令官呂本元及孫顯寅)

盛字軍歩隊十二營一哨、馬隊五營二哨、野砲二十二門、機關砲四門(約六千三百人)

六 葦子溝附近(總司令部)

親兵約四百人

計人員一萬八千二百五十人、野、山砲七十三門、機關砲四門

左翼軍 總指揮官將軍依克唐阿

一 安平河口、鼓樓子及蒲石河口(司令官倭恒額)

齊字練軍歩隊四營、馬隊二營、野砲四門(約千五百人)

二 東陽河口、蘇甸河口及長甸河口(依克唐阿直屬)

鎮邊軍歩隊四營、馬隊九營、砲四門(約四千人)

計人員五千五百人、野砲八門
總計人員二萬三千七百五十人、野山砲八十一門、機關砲四門

附記

一 日本軍は之に對し第三、第五師團の各主力を以て攻撃し一部は他方面に分遣して戦に參與しなかつた。故に一師團の戦闘員は一萬に満たなかつた。但し砲兵は山砲のみであつたが臨時増加したので略、門數に於ては對等であつた。

二 清國軍中提督葉志超及盛字軍統領衛如貴は十月十八日官を奪はれた。是れ從來に於ける敗戦の責任を問はれたものである。而して葉の軍は聶士成に、盛字軍は呂本元及孫寅顯の兩人に指揮を執らしめた。

小評論 宋慶が、日本軍の上流方面より渡河するの微あるを知つて急に援兵を請求したのは戦略眼に乏しいと謂はれても致し方があるまい。蓋し該方面が奉天方面に對して要點であるからである。軍機處が依克唐阿に命じて該方面に轉進させたことは、宋慶の意見具申を半ば採用したもので、兵力増援の要求は一蹴した形である。

宋慶は義州對岸即ち九連城を中心とする配備から有力なる一部隊を割かれたのであるが、彼

第五圖

清軍總兵力

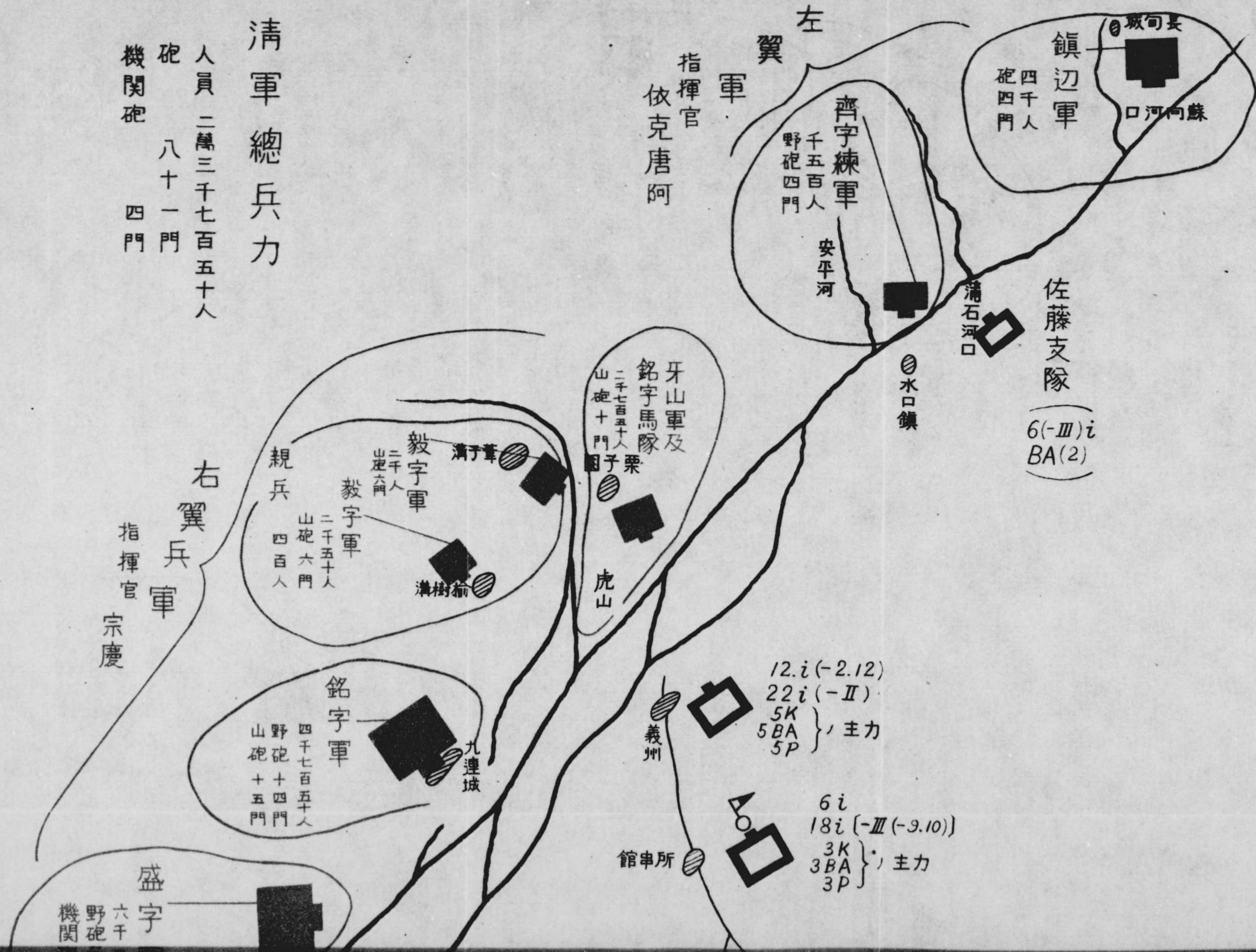
人員 二萬三千七百五十人
砲 八十一門
機關砲 四門

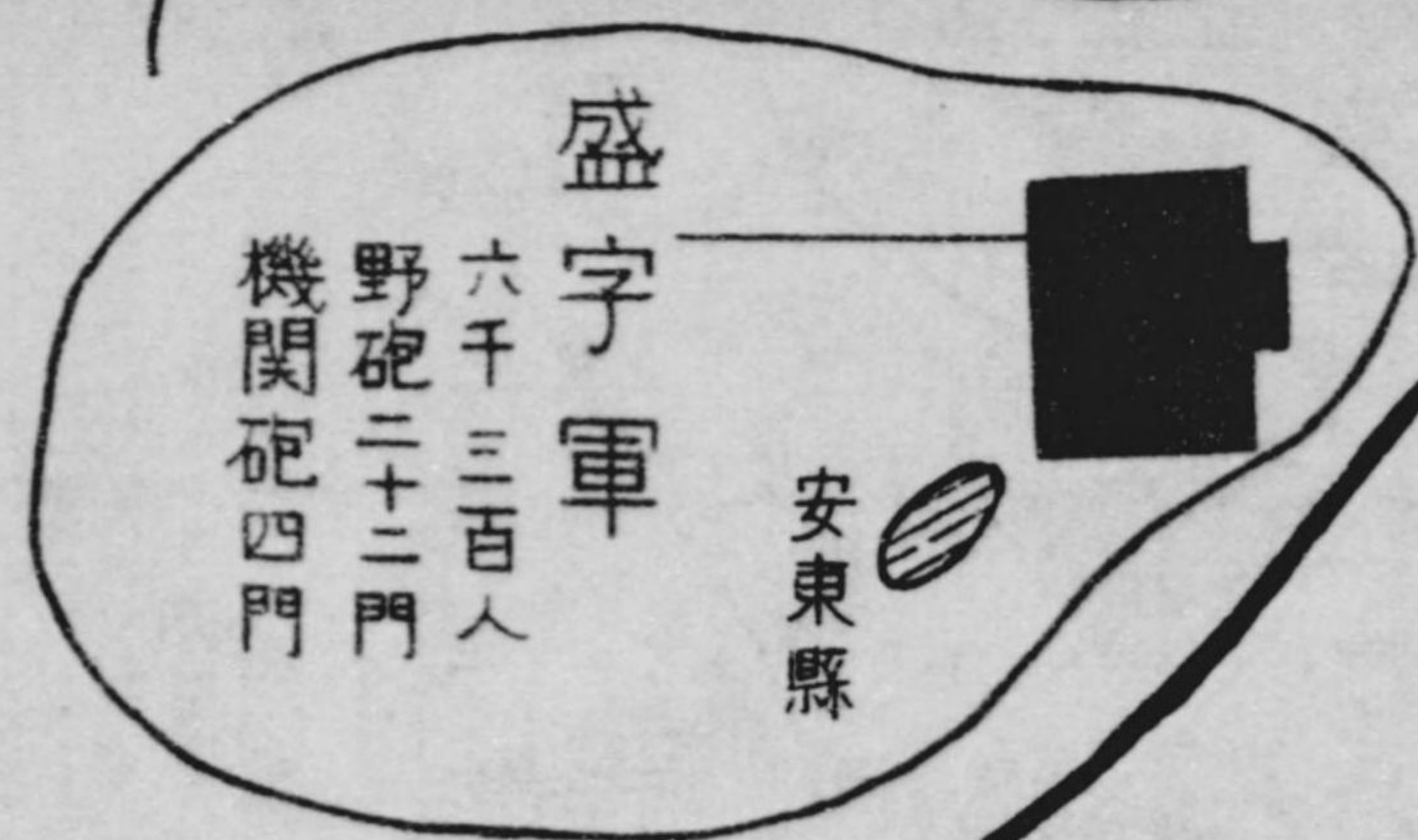


鴨綠江近日常清兩軍位置之要圖

(明治二十七年十月二十二日)

第五圖





盛字軍

六千三百人
野砲二十二門
機關砲四門

安東縣

館串所

3K } 主力
3BA }
3P }

川龍

11i
1.3/12i
5K'一部
II/5.A.

張璠軍位置之要圖

(明二十七年十月二十二日)



張璠軍

の配備は虎山に著目して其一部を饒河左岸に移し虎山を守備せしめた丈で、他の配置は前に定めたと同じである。而して總豫備隊としては別に設けられて居らぬ。總司令部には僅かに自己護身の爲めの親兵のみである。凡そ斯の如き戦闘夫れが決戦であると持久戦であるとに論なく、其目的及情況等に應じて兵力の大小はあるにしても、必ず有力なる一部隊を控置するを要すること議論の餘地はない。

四 戦闘の概況 (第六圖参照)

二十四日水口鎮附近より日本軍の一部隊鴨綠江を徒渉し來るを發見するや、該方面の直接守備に任せし部隊は之が妨害を試みたけれども、眞面目なる抵抗を爲すことなく退却した。之が爲、宋慶の主力軍と依克唐阿の軍とは連絡を遮断せられた。然るに敢て之が恢復を圖らうとしなかつた。依克唐阿は爲めに二十五日九連城方面に起つた本戦も知らず數日間空しく其大兵を徒らに遊ばせて置くの大失態を演じた。

附記

日本軍佐藤支隊(歩兵一大隊半、山砲二門)は「二十四日午前水口鎮附近で鴨綠江を渡り栗子

園に向ひ前進し軍の攻撃を援助すべき」命を受け、午前十一時から同地下流附近の徒渉點(深さ腰に達し流速急)に達し、砲兵小隊の援助の下に敵歩、砲兵の妨害を冒して之を驅逐し日没までに安平河口一帯の高地を占領した。

小評論 兩軍の間に日本の小部隊が進出し遮断されながら之を恢復しようとしないうに至つては、一體彼等が戦術の何物なるかを全然知らないのかと酷評を下したくなる。少なくとも、依克唐阿が宋慶との連絡位はどうしても試みなければならぬ。又、兩軍の情況が不明であつたら心配でたまらなくなるのが心理である。無神經にも程がある。

然し日清戦役後十年、日露戦役鴨綠江戦鬪の際にも通信機關が比較的發達したにも拘らず、上流方面に在つたレチッキー大佐支隊が五月一日の戦鬪を三日まで知らずに徒らに其地に留まつた愚例もあるので、あながち清軍のみを笑ふ譯にもゆかぬ。

要するに決戦乃至本戦に遊兵を生ずることは特に戒しむべきことであるが、又殆んど常に此の惡例を繰り返しつゝあることに注意を要する。

主力指揮官宋慶は、二十四日夜、日本軍の一部が安平河口附近で依克唐阿部隊の右翼を突破して鴨綠江右岸に渡つたことを知つた。そこで彼は「日本軍が虎山北方山地を出づるに乘じ之を逆

襲する」に決し、各軍に命じて夫れ々準備を整へてをつた。但し安東縣方面に在る盛字軍は之を其儘残置し、逆襲には使用を豫定しなかつた。

此夜虎山守備隊長馬金鉸は歩隊一營及砲二門を直接虎山鞍部附近に配備し殘餘の歩隊二營を控置して居つた。然るに此夜に於ける日本軍の架橋作業や、一部隊の漕渡による渡河に就ては偵知し得なかつた。翌二十五日午前七時頃始めて日本軍が既に我が岸に渡つて居ることを知つたが、此時には虎山の陣地に肉迫せられ、一部は其陣地の北方山上にも達して居つた。馬金鉸は大に驚き、防禦するの違もなく陣地を棄て、西方馬溝方向に退却した。是より先栗子園に在る聶士成は安平河口より日本軍が河に沿うて南進したことを聞き、虎山陣地の左側が危険なるを察し、二十五日拂曉一部を虎山東北山上に進めた。此部隊は虎山北方高地にて突然日本軍の一部隊と衝突した。次で聶士成は馬金鉸増援の目的で豫備隊を擧げて虎山に向ひ前進したが、途中日本軍の小部隊を撃退しつゝ虎山西北山上に達し此地に於て日本軍の一部隊と衝突した。そこで此線に停止し宋慶の來援を待つこととなつた。

小評論 聶士成の拂曉以後に於ける前述の處置は大體に於て可なりと思ふ。然るに馬の率ゐる虎山守備隊の行動に就ては全然落第である。最も重要な地點の守備にありながら、直前の

河川すら偵察が出来ず、日本軍の架橋も漕渡も全然知らずとは軍法會議ものである。而かも自分の陣地直前に肉迫せられ、側背に進出せられて狼狽して逃げ出すに至つては、沙汰の限りである。若し日本軍の架橋を妨害し、且つ頑強に陣地を維持して聶士成の増援まで持ちこたへたならば、爾後の戦闘進捗に如何に有利であつたか、日本軍側として之を想像するとき肌粟を生ずる程に危険であつた。

宋慶は葦子溝に在つて虎山方向の銃砲聲を聞き、直に令を馬玉崑及宋得勝に與へて毅字軍十營（約四千名）を擧げて栗子園に向ひ、又劉盛休も銘字軍の一部三營（千百名）を提げて虎山に向はしめた。各隊は意氣旺盛に鬩河を渡り、將に日本軍を其半渡に撃破せんとするの概があつた。

毅字軍は牙山軍と合し其一部は河谷を南進し、日本軍の猛烈なる突撃に對抗して敢て下らず、激戦進行中であつた。然るに虎山に向つた銘字軍は、虎山の守備兵の敗退し來るに會し其巻き添へを喰ひ、右側より日本軍に逼られ、爲に隊伍潰亂、逃走に變じ、腰溝の谷間に遁入した。河谷を南進した毅字軍の一部も十字火を受けて力支へず西北方に潰走した。是に於て日本軍の一隊は鬩河河谷を北進し將に毅字軍の右側を脅かさんとする形勢となつた。意氣揚々として出撃した毅字軍も牙山軍も急に志氣沮喪して戰意を失ひ、退却するに至つた。之で戦闘は簡單に終つたので

ある。宋慶は此夜毅字軍を率ゐて鳳凰城に去り、其他の諸軍は支離滅裂の状態を以て潰走した。依克唐阿は此本戦の惹起すら知らず、翌々日二十七日に至り日本軍佐藤支隊に突破された部分に若干の増援を送り之を補修したに過ぎぬ。三十日頃に至り鳳凰城の宋慶より通報を受けて大に吃驚し、「賽馬集に引揚げ宋部隊と連繫して奉天を掩護」するに決し、先づ寬甸に退却した。

安東縣附近に残留した盛字軍は、馬金銜の部隊及九連城部隊の敗退に巻き込まれて退却を始め大孤山方面の警備諸隊も北方遠く柞木城方面に遁げ去つた。

附記

日本軍の概況を述べれば次の通りである。

義州方面では二十四日午後六時から架橋に著手したが、長途の困難なる行軍の爲に鐵舟は變形して結合意の如くならず、寒氣は夜深くなるに伴ひ凜冽を加へ、暗夜の爲に作業は捗らず、豫定の時刻より遅れること二時間に及んだ。而も材料不足の爲（結合し得ざる鐵舟十箇もあつた）、鐵舟橋の一部を小幅橋に改め、急造木舟五隻をも混用して不完全なる軍橋が一箇午前六時に出来上つた。二師團の大兵を僅かに不完全なる一軍橋に依らしめんとするのである。歩兵第六聯隊（一大隊欠）は虎山の敵を攻撃する目的を以て二十四日夜半渡舟によりて元化洞

北方二千米附近から渡り、午前六時半虎山北方千五百米の高地に向ひ攻撃前進した。軍橋による部隊は午前六時過から、歩兵第六聯隊第三大隊を先頭とし渡河を開始し、虎山に向つた。斯くて第一大隊は虎山守備隊と戦闘を開始し、第二大隊は虎山西北方高地に於て牙山軍の南進中に衝突した。

恰も此秋、宋慶は攻勢移轉の命を下した。故に日本軍は未だ其先頭部隊の渡河せるのみにして三方より攻撃を受くるに至り正に最大危機に臨んだのであつた。第三師團長桂中將が虎山の鞍部に在りて戦況の急なるを察して軍司令官に増援を要求し、又畏くも 閑院騎兵大尉宮殿下が傳令使として立見旅團長に第三師團の左翼に前進せんことを傳へられた程であつた。爾後部隊の渡河に伴ひて猛烈に攻撃突撃を敢行し結果は簡單に勝敗を決したのであつた。

小評論 宋慶が日本軍の半渡に乗せんとする大攻勢移轉の決心や洵に鮮かであつた。而かも其各部隊の之に伴ふ行動は如何にも脆き感を禁じ得ぬ。然し日本軍が架橋一本で軍の敵前渡河を敢行せんとしたことも一考を要する。偶、清國軍の素質劣等で各指揮官其人を得ず、爲に宋慶の壯烈なる決心も蛇尾に終り、我が軍の過度なる冒険も其悲惨なる應報なくして終つたことは幸であつた。

五 戦闘の結果

鳳凰城に退きたる宋慶は同地に於て日本軍を阻止せんと考へたが、二十六日まで同地に集り來つた部隊は僅かに歩隊二十八營餘、馬隊六營餘に過ぎぬ。兵器の喪失も甚だ多く、到底短日間に戦力を恢復し得べからざるを察し、摩天嶺に於て陣地を占領するに決した。

彼我の損害

日本軍主要戦利品

清國軍 死傷約五百
日本軍 約百五十

大砲 七十門 小銃 四千四百挺

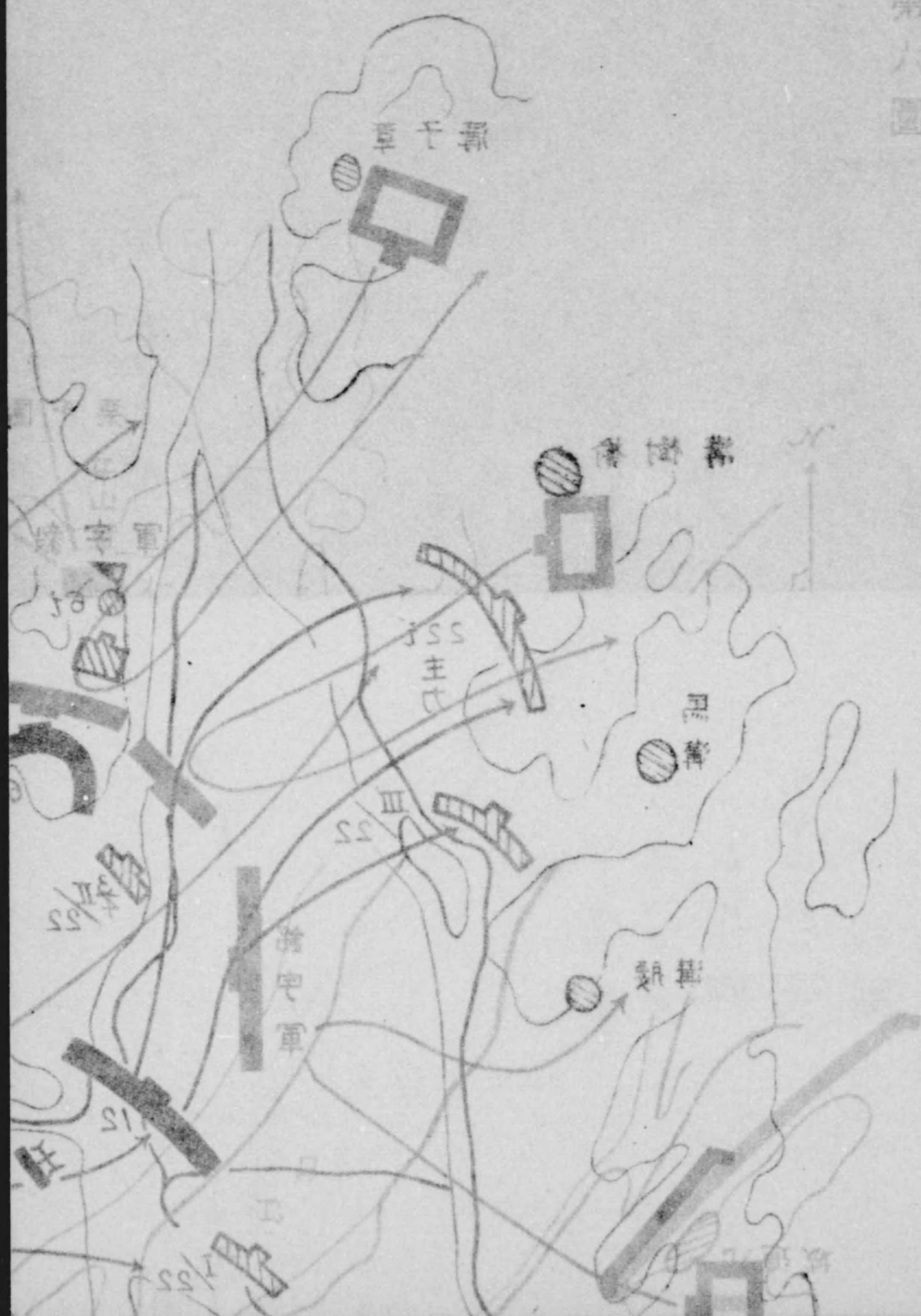
六 評論

イ 河川による決戦防禦 日露戦役に於ける露軍は、持久防禦の目的を以て鴨綠江を利用したが、戦闘の離脱適當ならずして徒らに多大の損害を受け、彼等が上長より注意を受けありしにかゝらず敗退の感を深からしめ、緒戦に於ける不利なる影響を一般に與へた。然るに日清戦役に於ける宋慶の遣り方は結果から見て決戦防禦であつた。其出撃時機も概ね適當であり、各隊の意氣も最初は旺盛であつた。而して日本軍は僅かに危げなる一條の軍橋によ

甲 糸 工 蟬 關 要 圖

日 五 月 二 十 年 十 一

第 八 圖



り僅少部隊のみが對岸に移つた時で、正に大なる危機であつた。圖上戰術乃至演習であつたならば確かに清國軍の大捷を宣告せられたであらう。然るに此鮮かなる決心も、實行上には其指揮官を缺き部隊の訓練、素質が劣等であつた爲め何等の成果を收むることなく、日本軍をして容易に戰場の主たるを得しめた。

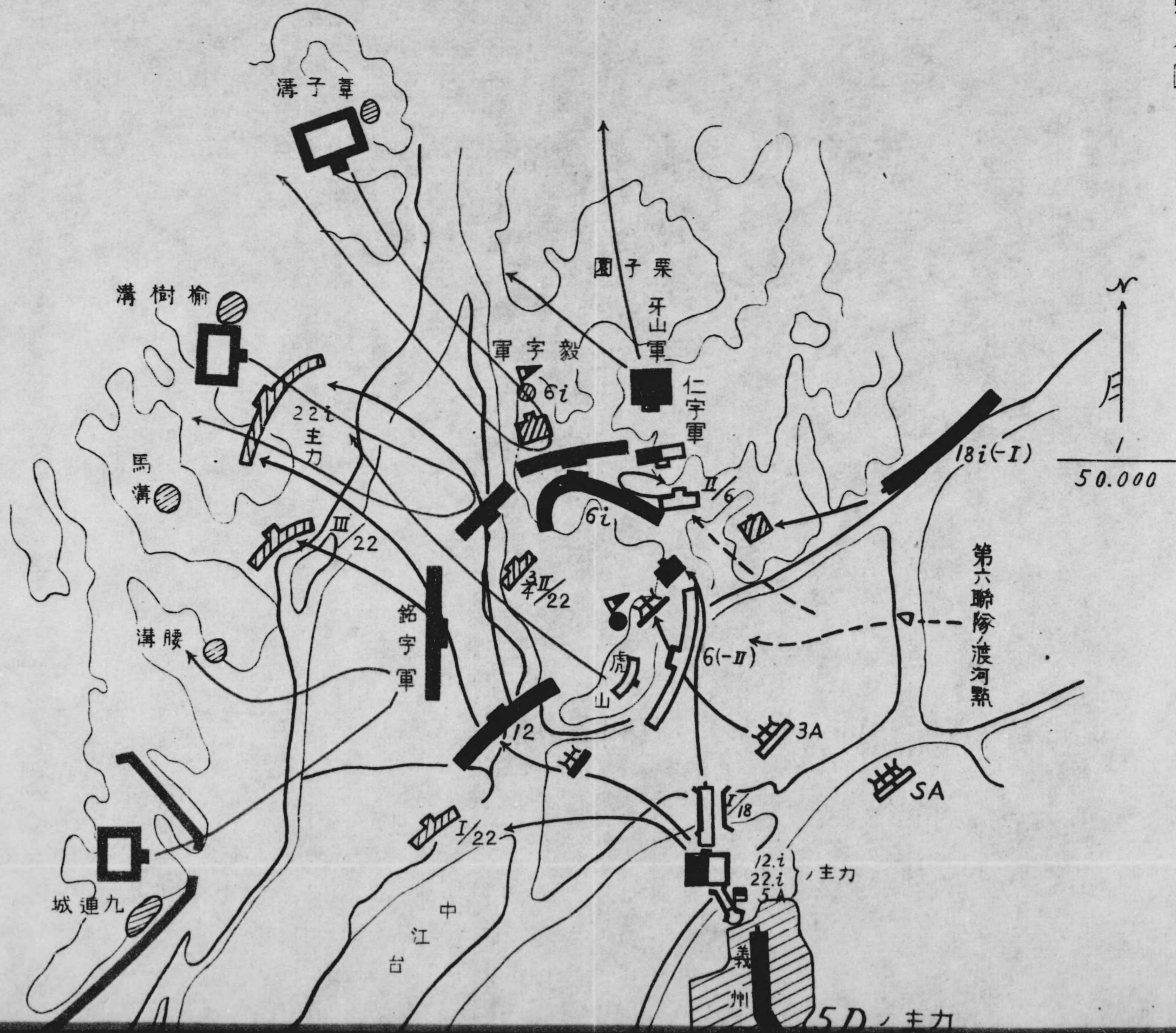
古來河川の決戰防禦は、理論上可なるが如くにして而かも多くは出撃其時機を失し、又は其方向宜しきに叶はず敗戦に終るを通常とする如く唱へられて居る。然るに清國軍の場合に於ては決心及處置に於て適當であり、之が若し日本軍なりしならんには敵に恐らく殲滅的打撃を與へたるべきを信ぜしむるに拘はらず、斯の如き不結果に終りたる所以に想到するとき、部將の戰術能力及獨斷專行力、軍隊の精到なる訓練が如何に重大要素を占むるやを窺ふに足るであらう。

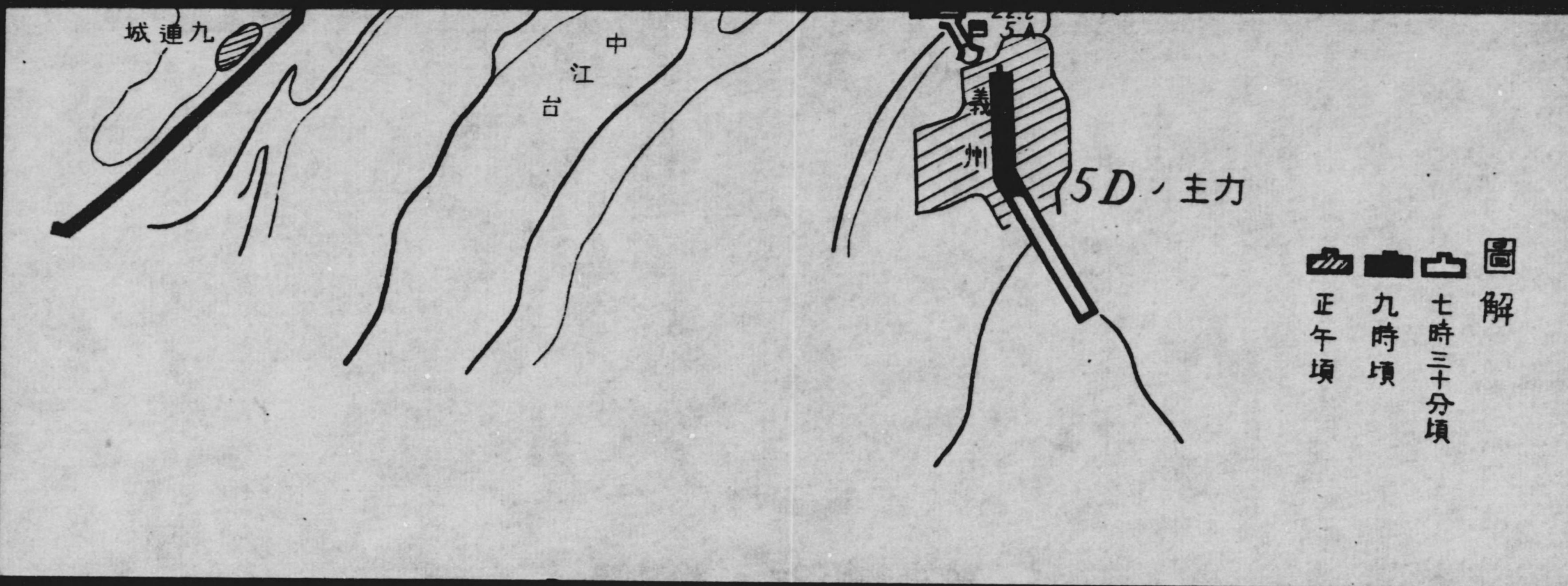
□ 日本の行動に就ては詳述を避けたが、大體推察し得る通り渡河の準備、設備に就て少しく冒險に過ぎ僅かに一本の橋で軍の命脈を繋ぐとする如き、將來に於て戒むべきことである。而して大軍の渡河も小部隊の渡河も大體に於て先づ漕渡に依り、然る後に架橋によるべきものであることは、最近の戰例に鑑みて周知のことに屬するから、茲に之が説明を省略する。

日清戰役於鴨綠江戰鬪經過要圖

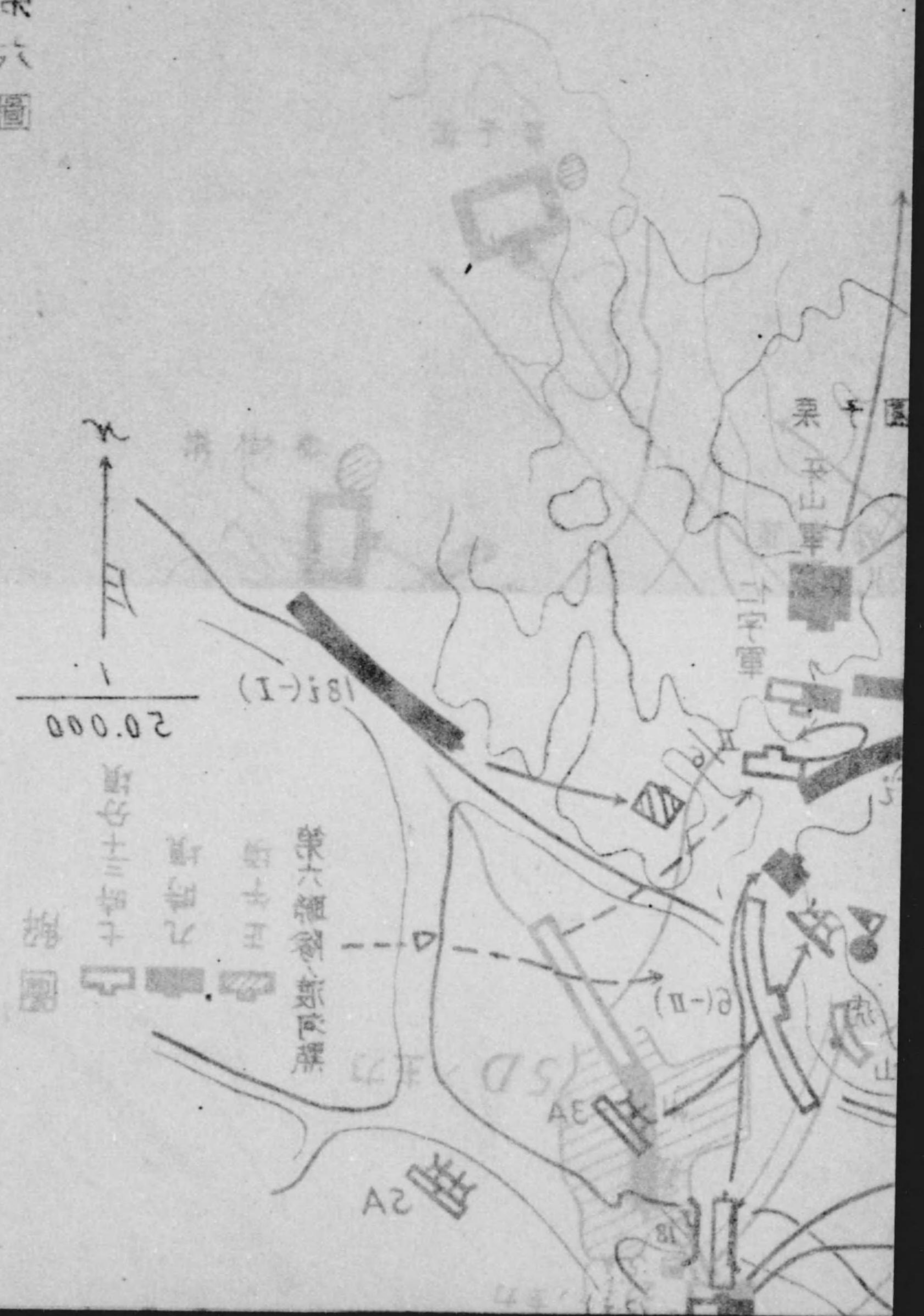
於明治二十七年十月二十五日

第六圖





第六圖



第十二 歐洲戦争に於ける河川戦の二例

日露戦役に於ける露軍の鴨綠江を利用する持久戦と日清戦役に於ける清軍の同河を利用する決戦とに就て研究した序に、河川戦に就て少しく最近の戦例を窺つて見たいと思ふ。

吾人の將來を考察するに、鴨綠江畔の戦闘は二回も試験済で最早や卒業であるが、更に大河の渡河戦に就ては覺悟をせねばならぬ。同時にまた困難なる激戦の展開されるであらうことは、到底鴨綠江のそれとは日を同うして語るべからざるを豫想せられるのである。故に之が爲周到なる準備と訓練とが切要であることも異論なき所である。依て鴨綠江河川戦に續いて最近に行はれたる歐洲に於ける二箇の戦例即ち決戦意志を有する防者に對する攻撃と、持久的目的を以てする防者に對する渡河に就て紹介し、且評論を試みようと思ふ。

其一 一九一四年八月に於ける塹軍の塞國進入

渡河戦の大要(第七圖参照)

歐洲大戰は、周知の如く、一九一四年八月先づ塹、塞兩國が開戦のトツプを切つたものである。

一 西軍の部署

イ 塞軍の防禦配備

塞軍は其全力を第一、第二、第三軍に區分し、其第一軍(約二師團)を以て、大戦の直接導火をなせるサラエボ方面に對し國境を越えて攻勢を取らしめ、主力即ち第二軍(四師團、騎兵一師團)及第三軍(四師團)兵力合計八師團と騎兵一師團及在郷部隊若干を以て國境に沿ふ河川(ドナウ河、サーベ河、ドリナ河)を利用し決戦防禦を爲すに決し、河岸には歩兵一聯隊又は歩兵一旅團を各要點即ち右翼はセメンドリア附近よりベルグラード、オブレノワツツ、サバツツ、ロズニツア等を経てリエボヴィヤ附近に互る線に配置し、主力はアランジェロワツツ、ヴァルエヴォの地域に集結した。

小評論 塞軍の採つた大體の作戰計畫は當を得たものと思ふ。唯大兵力を有する奥國に對し、最初から一部を以て國境を越えて攻勢をとるの案が或は議論の種となるであらう。即ち餘りに冒險であり、一敗地に塗れた場合全般の作戰に大なる影響を及すであらうからである。然し此方面は所謂支作戰を行ふべき地域であつて、如何に大兵を有する老國でも、單に塞國

のみを敵とするのではないから、全作戰を覆へす様な大兵團を指向する如きは判断し得ぬ。加之、若し左様な舉に出でた場合には塞軍の主力方面の作戰が容易となり、却て偶、塞軍の一部に牽制せらるゝ結果となるであらう。依て塞軍としては宿怨の地でもあり國民一般の志氣上からも又モンテネグロと協同の意味に於ても餘りに暴虎馮河的であらざる限り是認せらるべきものであらう。

又第二、第三軍の配置に就ても一應原則に合せる様な形をとつて居ると思ふ。然し更に熟考すれば、奥軍の本渡河は河川の状況上技術的に最も容易なるドリナ河(河幅五十乃至二百米)方面に選べるゝ公算多く、サーベ河は河幅四百乃至六百米で、之も有力なる一部が利用さるゝ顧慮が充分である。併しドナウ河に至つては、千乃至千五百米の河幅を有し技術上困難であるので、公算は最も少いと思はれる。然らば比較的ドリナ河に近く成るべく大なる兵力を備ふべきである。ところが集結地の東端アランジェロワツツからドリナ河畔まで百數十軒もあり、地形は通過困難で、交通機關もない。故に、いざといふ場合目的地まで少くとも三、四日を要するの實情にあることに想到すれば、尙ほ一考を要する事項があると思はれる。即ち戦闘の結果から見ても、更に河岸直接配備の兵力を増加し重要な地點の確保に力あらしめ、

且可及的西方に近く集結地を移して置くの要あるものと信ずる。此間の宿營、給養の不便は、あらゆる手段を盡して之が緩和を圖るべく、軍隊としては其不便を忍ばねばならぬ。

□ 埃軍の部署

埃軍は其國軍の主力をガリシヤ方面即ち對露作戰に使用したことは周知のことであるが、塞國方面に使用した兵力は十四師團と騎兵一師團で、別にモンテネグロの參戰に備へる爲めに四師團を用いた。故に合計十八師團と騎兵一師團が對塞作戰の爲めに使用された譯である。

其兵力使用區分大要左の通りである。

- 第六軍(四師團) モンテネグロ軍に備ふ
- 第五軍(十四師團と騎兵一師團) 直接塞軍に對す
- 第十五軍團(二師團) ドリナ河 ツオルニツク及リュボヴィヤ
- 第十三軍團(三師團) ドリナ河 ロズニツア
- 第八軍團(二師團) ドリナ河 ビエリナ、レスニツア
- 騎兵第十師團 サイベ河 ラツア
- 第九軍團の一師團 サイベ河 シトロウイツア

- 第四軍團(三師團)
- 第七軍團(三師團)

- サイベ河 サバツ
- ドナウ河方面 オブレノワツツ、ベルグラード、バンソヴァ、セメンドリア間

(註 第九軍團、第四軍團、第七軍團は元來の戰闘序列上第二軍に屬するものなるも、臨機第六軍に隸屬せられたるものである。而して第二軍は對露作戰に充てられたる主力軍の一部である。これが對露作戰の進行中齟齬を生ずる大禍因をなした。) 右の區分に依り埃軍の對露作戰方針を判斷し得るであらう。讀者先づ自ら判決して然る後に左の方針を讀まれたならば興味が多いことであらう。

方針

埃軍は主力を以てドリナ河を渡過し敵主力を求めて之を攻撃せんとす之が爲一部を以てサイベ河を渡り主力と協同して攻撃せしめ別に一軍團を以てドナウ河方面より陽動を行はしむ

小評論 埃軍が塞軍に對して積極的に渡河作戰を最初から敢行すべきや否やの問題に就ては、最後の評論に於て述ぶることとし、茲には渡河作戰遂行の爲該兵力を以て如何にすべきやに關し評論を試みる。

渡河方面をドリナ河に選んだのは適當である。三河の内ドリナ河が最も小さく、河幅二百米以下で、技術的には最も容易である。殊に河川が奥國側に彎入して前地も大兵團の行動を許すのみならず、豫想する塞軍主力の位置から、比較的離隔してゐるからである。唯國內深く進入する爲には地形上困難のあることは不利の大なるものとして否み得ぬが、奥軍としては先づ最も危険なる「渡河」を第一に考慮するを要する。

又サーベ河方面から一部を渡河攻撃せしむること及一部をドナウ河方面より陽動を行はしむること何れも河川戦闘の原則に合した部署である。

要するに奥軍が現在の兵力を以て渡河作戦を行ふとしたならば、大體に於て部署は適當であると評し得るであらう。

一一 奥軍の渡河實施

ドリナ河方面主力の渡河 各軍團は師團毎に一箇の渡河點を選定し、八月十一日夜を以て諸準備を整へ、十二日拂曉から河岸の監視部隊の抵抗を排除して渡河を開始した。而して各師團は先頭部隊の漕渡によつて前岸に強行渡河したが、主力は架橋によつて渡つた。十三日、十四日は前

進準備に費し十五日より一齊に前進を開始し、小部隊を追撃しつゝ十六日に至りリュボヴィヤ、東方よりサブツツに互る線に於て塞軍の主力と衝突するに至つた。

サブツツ附近奥第四軍團の渡河 同軍團も主力方面と同じく十二日拂曉から渡河行動を開始した。先づ歩兵一旅團を漕渡によりサブツツ附近で渡河せしめ、對岸の監視部隊と交戦二時間の後之を撃退してサブツツを占領し、此處に掩護陣地を占領した。然るに軍團の主力は翌十三日中渡河を行はず架橋もなさなかつた。實に渡河の爲寸時を争ふべき情況に於て危険至極である。是恐らくガリシャ方面の作戦に關連して第二軍を塞國方面より抽出せんとするコンラード參謀總長の強硬なる主張に對し猛烈なる争論の最中であつたからであらうと想像せられる。が兎に角塞軍主力の到着が遅れた爲事實に於ては左したる危険もなく濟んだのは奥軍の爲には僥倖であつた。斯くて十四日拂曉に至り始めて架橋作業が開始せられ、同時に歩兵一旅團と砲兵の一部が漕渡に依つて前岸に運ばれた。奥軍は之で一師團の兵力に達したので、當面の塞軍一旅團に對して攻勢に轉じ、次で其上流シトロウイツァから渡河した第九軍團の一旅團も協力して該塞軍を撃退した。越えて八月十六日には、サーベ南岸の奥軍兵力は二師團に達したが、塞軍も其集結地ヴァルエツォから二師團の増援隊が到着したので、攻勢に轉じた。之が爲當面の奥軍は其橋頭堡に壓迫せら

れ危殆に瀕した。塙軍側では、尙北岸に残置しある二箇旅團の兵を急遽前岸に進出せしむべく努めたが、恰も軍橋は輜重が通過中で、非常な混雑を生じつゝある際、塞軍の砲弾が軍橋に命中し破壊せられた。依て旅團は漕渡を以て前岸に渡りて戦闘に加入し、一旅團は北方ヤラック附近にある豫備の架橋を利用して渡河し辛うじて塞軍を撃退し、危機から脱出することが出来た。又ドナウ河方面で陽渡河の任を有せる塙第七軍團は、最初渡河作業を行はず單に砲撃を以て牽制を試み、主力軍渡河終了後數日、即ち十八日に至り其一師團がサーベ河オブレノワツツより渡河した。

小評論 サーベ河方面より主力と協力すべき第二軍所屬兵團が、敵前渡河に際し、斯の如き呑氣なる渡河を行つたことは、危険千萬の話で、落第である。勿論他に有力なる理由はあつたであらうが、兎に角渡河戦に決定した以上、計畫通り全力の渡河は手落ちなく敏捷に實行すべきである。十六日塞軍の攻撃によつて一時危殆に瀕したことは當然のことで、塞軍の行動迅速果敢ならざりし爲、幸にして危地から救はれたのであつた。陽動に任せる第七軍の行動は餘りに不活潑である。これでは敵を牽制し大なる注意を拂はしむる能はざるは當然である。宜しく積極的に眞の渡河を尙ほ速に實行すべきである。

三 塞軍の行動

塞軍は飛行機二機を有して居たけれども宣戰二日に於て既に破壊して用を爲さず、折角の塙軍集中の状況は飛行機によりて知る能はざるに至つた。然し八月十二日に至り河岸監視部隊から、塙軍主力がドリナ、サーベ兩河に於て渡河準備をなせること及ドナウ河岸には一部隊が陽動をなしている報に接した。そこで翌十三日に集中地を發し交通不便なる山地を踏破しつゝ急進したが、塙軍の渡河に乗ずるの機を失し、敵の渡河完了に後るゝこと一日、爲にサーベ、ドリナ兩河の右岸に於ける要點は塙軍の占領する所となつた。

小評論 塞軍は一臺の飛行機もなくなつた。偵察には困難であつたらう。然し其大體の主力方面は尙ほ速に判斷のつくだけの手段がなかつたらうか、否、不可能なことではないと思ふ。而して尙ほ少くとも一兩日間早く判定して兵力の移動を急いだならば、塙軍の不利に乘じ得たであらう。

又此事實から觀ても、前に評論した通り、集結地を可及的西方に重點を置くと同時に、河岸の監視部隊の直接豫備として要點占領、確保の爲、豫め兵力を増加した方が實際的であつた

らうと思ふ。

四 塙軍の撤退、塞軍の攻撃

塙軍の渡河は大體に於て成功せるにも拘はらず、又十六日に於ける主力の衝突に於ても有利に進展する見込みを信じ得たるに拘はらず、突如戦闘を中止し十八日夜より退却を始め、二十日右岸に撤退した。此甚だ矛盾せる如き塙軍の行動は、ガリシヤ戰場に於ける塙軍の兵力不足から、元來の豫定計畫たる第二軍所屬兵軍を急に該方面に轉送するの要に迫られ、爲に塞國方面に對しては一時敵を防止し持久することになつたからである。

此意外なる出來事は、塞軍をして累卵の危地より救はれたのみならず、積極的に攻者の位置に換はらしめた。

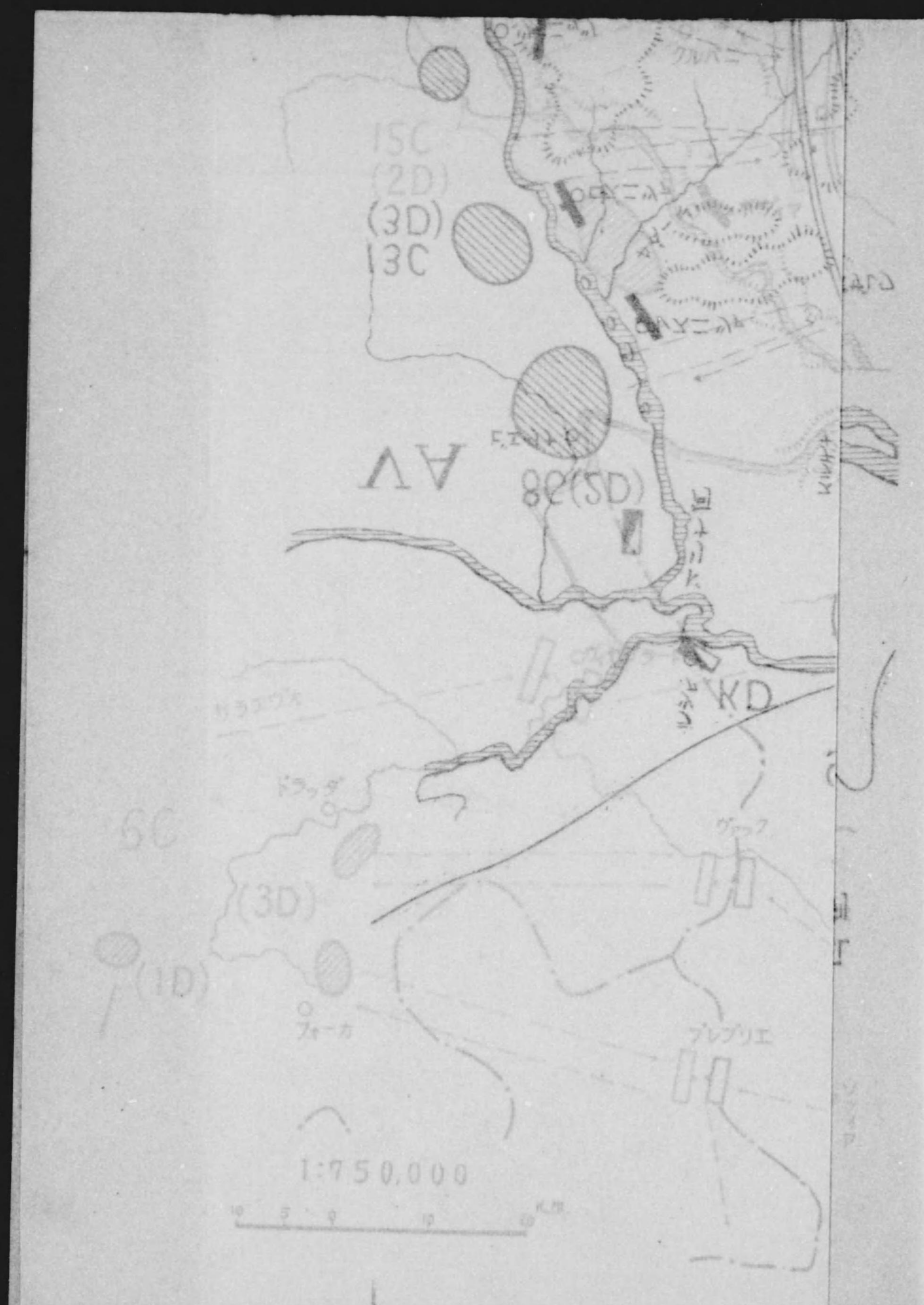
是より先、塞軍騎兵師團は軍主力に先だつこと一日餘、サブツツの西方スラチナに進み、又第二軍の二師團は十六日サブツツ附近に到着した。そこで同地にて渡河せる塙第四軍團の一部を攻撃して之を河岸まで壓迫した。又他の二師團は其西南方に進み、又第三軍は其三師團を以て塙第十三軍團に對し他の一師團を以て塙第十五軍團に對して前進し、十六日以来主力の戦闘が進行中

であつたが、前記の如く塙軍が十八日夜より總退却に移つたので、塞軍は之に追尾し、ドリナ河を渡らんと企圖した。然し塙軍の抵抗により之を果さず、爾後彼我河川を挟んで暫く相對峙することになつた。

然し爾後二週間、塞軍は九月六日を以て塙軍の手薄に乗じてサーベ河の渡河を試みた。即ち二師團を以てオブレノワツツ―サブツツ間より、又一師團を以て其上流シトロウイツア附近で渡つた。後者は直に撃退せられて後岸に移つたが、前者は河岸より二十軒も前進した。然し九月十三日塙軍の反撃を受け全部サーベ南岸に撤退した。

是より先、塙軍最高統帥部では、對塞作戰の不首尾に國內の輿論沸騰せるに動かされ、再び攻勢に轉ずるに決し、九月復たドリナ強行渡河を試み、辛うじて渡河することを得たが、爾後河岸に近く塞軍と對し戦況の發展を見ず、其儘の状態で月餘を経過したのである。

小評論 塙軍が危険なる渡河に成功し之より一舉塞軍を粉碎せんとする刹那に至つて、其戦闘の一段落をも見ず、接戦の渦中に於て急に撤退するに至つたことは、大にしては塙軍最高統帥部の大戦争指導のスタートを根本的に誤りたるものとして、大なる責任を負はなければならぬ。現に第二軍が最初の豫定計畫の如く、ガリシヤ方面に使用されて居たとすれば、實際



の戦闘経過から見て、露第一會戰が、埃軍の勝に歸したであらうとの推斷も可能であり、結局埃軍右翼方面の兵力不足が最も重要な時機を逸したのである。次に其過失を覺つて引き揚げるにしても、埃軍の渡河實行前にすべきであることは誰しも異論のない所である。若しもそれまでに決心がつかぬかつたとしたならば、對塞作戰の一段落即ち尙少くも數日間の猶豫を要したであらう。

更に對塞作戰の見地のみより觀察するに、塞國軍は十師團以上の實力があり、其素質もバルカン戰により勇敢に且つ實戰の經驗者である、其の上地形には通じてゐる、要するに埃軍の敵としては馬鹿にならぬものである。之に對し危険なる渡河を實施して積極行動を採らんが爲めには、優勢なる兵力を以てすべきである。然るに合計十八師團の内四師團を黒山國方面に備へたから、十四師團を以て塞軍に對する譯である。然らば其兵力は塞軍に比し大差なく確實に勝算ありと謂ふを得ぬ。

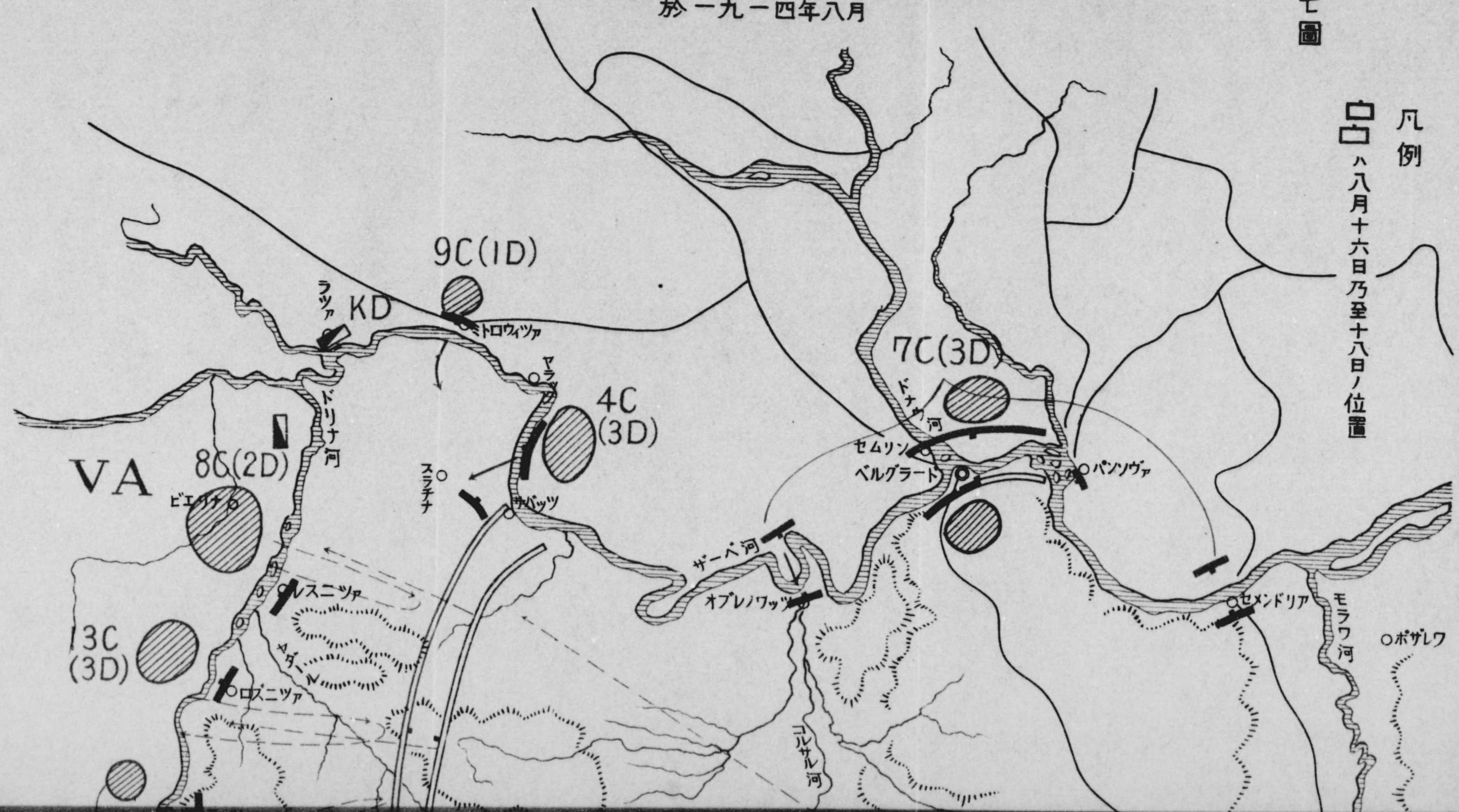
要するに持久の目的ならば尙ほ兵力を極減すべく、攻勢の目的ならば尙兵力を増大すべきである。此見地よりすれば埃軍の部署は中途半端の譏を免れぬ。

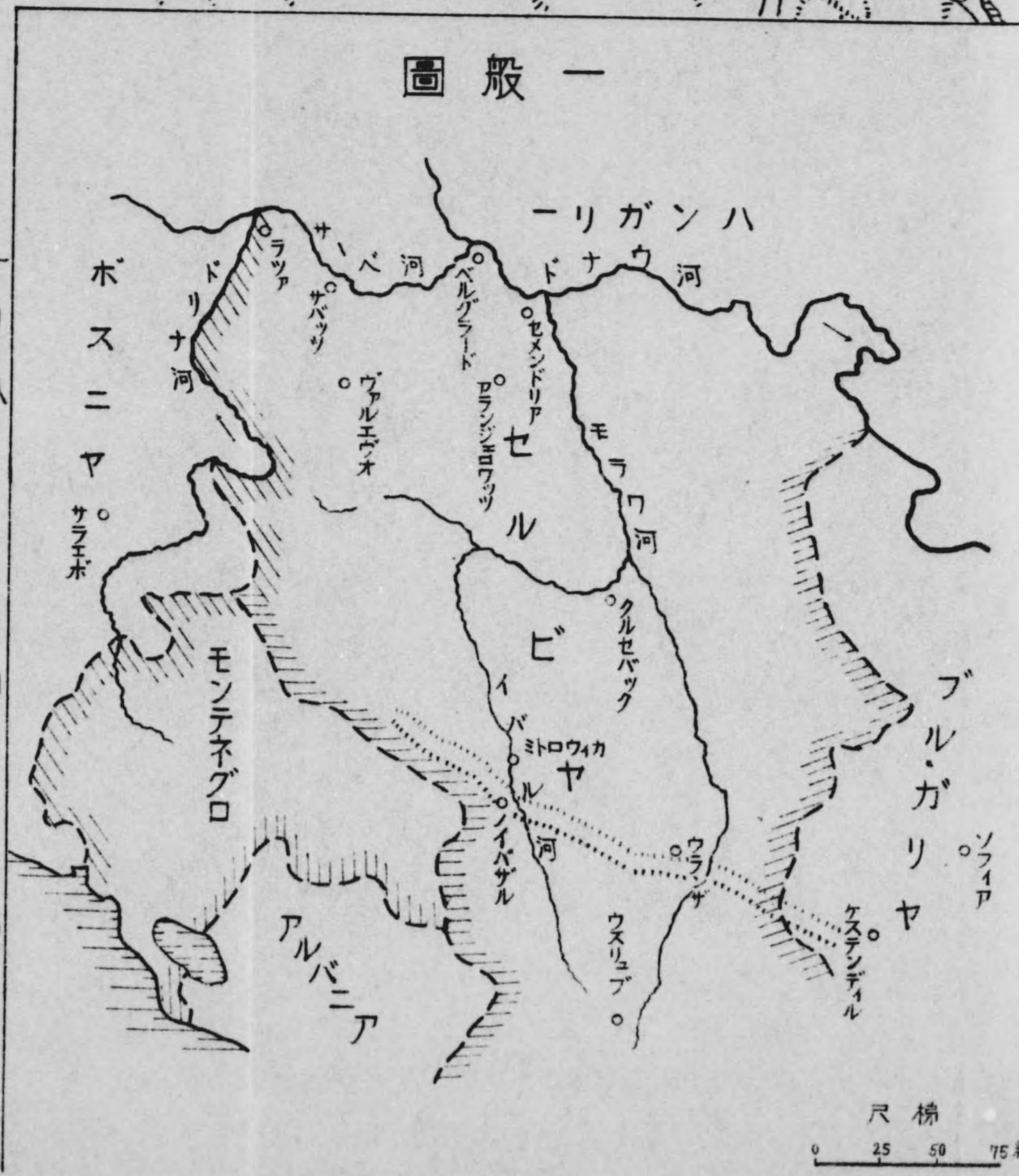
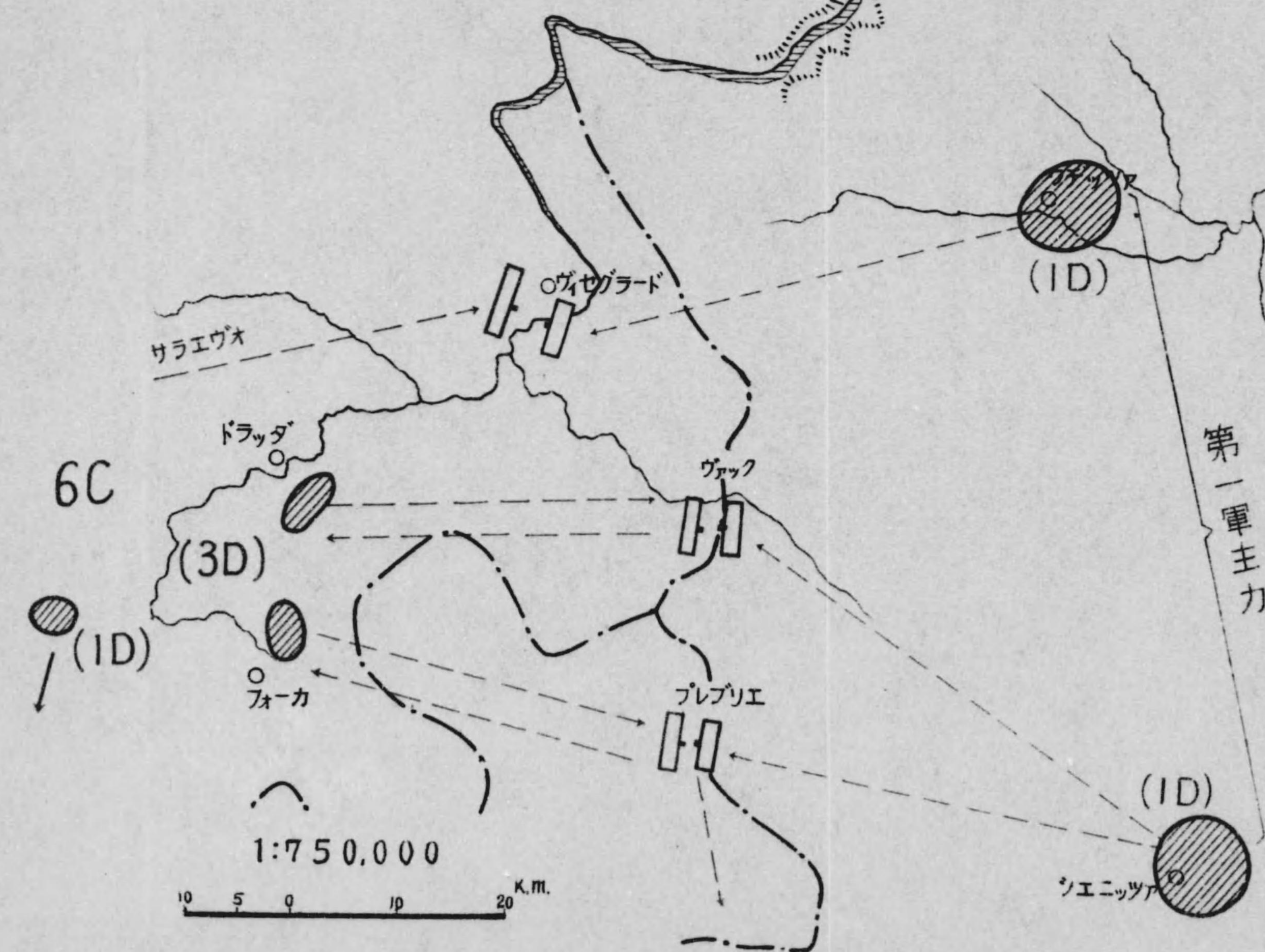
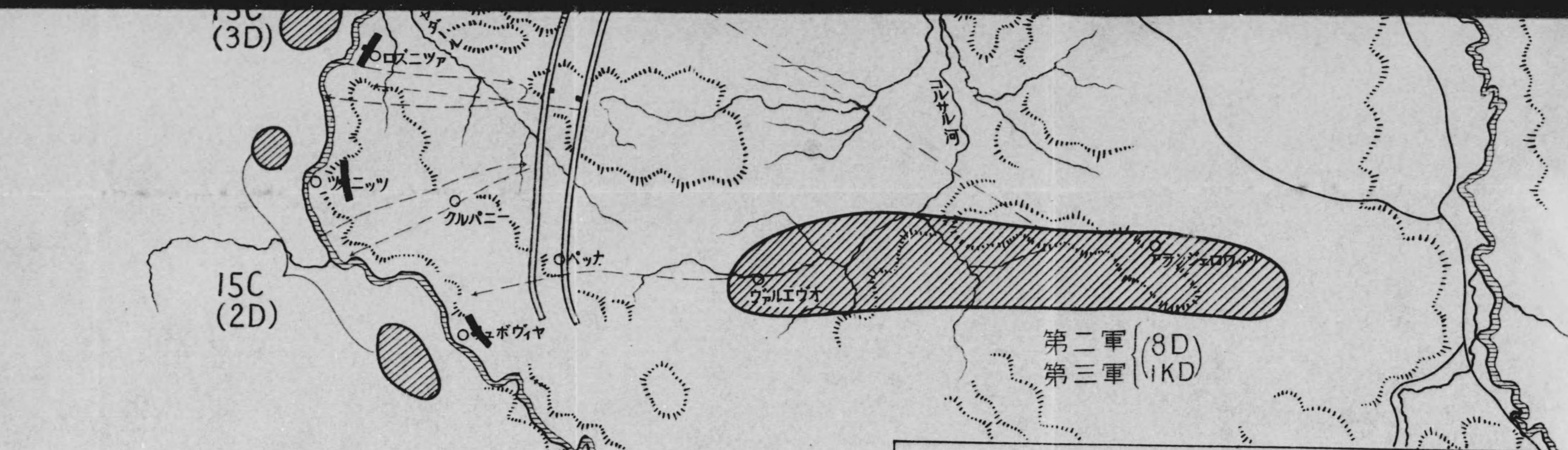
塙塞黒軍戦闘要圖

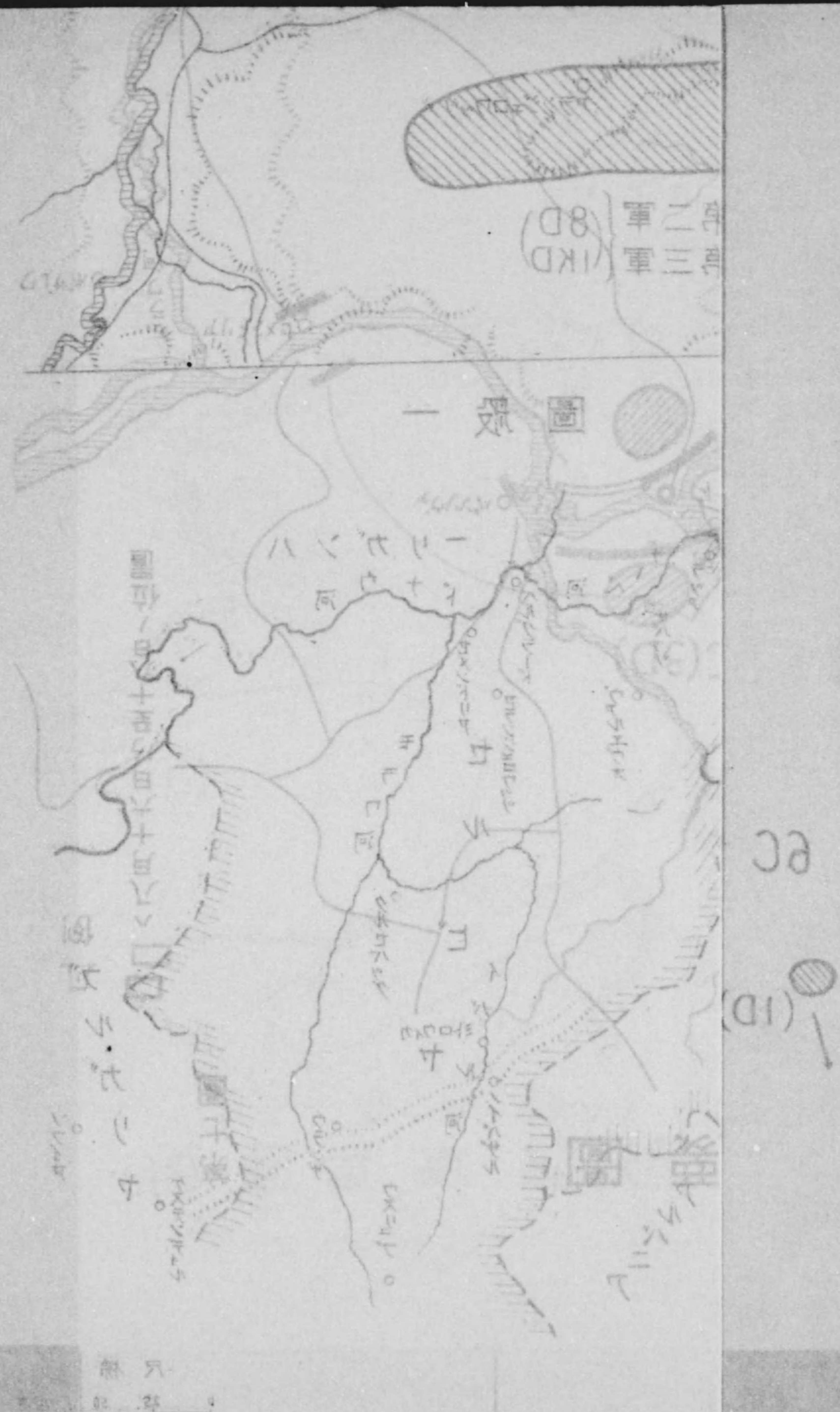
於一九一四年八月

第七圖

凡例
□□ハ八月十六日乃至十八日ノ位置







其二 一九一五年十月マツケンゼン軍のドナウ及
ザーベ河の強行渡河戦の大要(第八圖参照)

一 戦闘前の大勢

塙軍は既述の如く開戦と同時に對塞積極作戦を指導しドリナの渡河に成功したのであるが、戦を決することなく直に退却に就き、危険を冒して左岸に撤退して防勢に立つた。併し國民の輿論に動かされて翌九月に入り再びドリナの強行渡河を試み、月餘に亙りて右岸近く對して居たが、爾後攻撃功を奏して同年末には將にモラワ河谷に進出せんとするまでに進捗した。然るに恰も其の際、塞軍は斷乎として攻勢に轉じ塙軍を到る處に撃退した。脆き塙軍は復もや河川の線に退却するの已むなき醜態を演じた。爾後翌一九一五年九月末に至るまで、塙軍は東方戦場に多忙で又塞國方面を顧みる餘裕なく、寧ろ塞國軍の大舉攻勢に轉ずることなきやを懸念し、或は流言を放ち或はアルバナヤ土人を煽動する等の小策を弄して纔かに事なきを得た。

愈、九月末頃になると、獨軍の東方戦場に於ける露軍に對する作戦が豫期以上の成果を以て段落を告げたので、豫定の計畫に基き塞軍を掃蕩することとなつた。斯くて東方戦場より兵力移動

は九月下旬に入つてから、隱密に行はれた。又、今まで中立の姿勢に在つた勃牙利を誘ひ其舊敵たる塞國に對し參戰を約せしめた。

塞國攻撃軍司令官は有名なるマツケンゼル元帥である。同司令官の作戰方針は、速に先づベルグラード、ソフィヤ、コンスタンチノーブル鐵道の通路であるモラウア河谷を奪取し、以て土耳其と確實に連絡する目的であつた。而して軍の兵力は

獨軍 十師團

埃軍 五師團

計十五師團

である。

勃軍は先づ中立の態度を持し總兵力十一師團中四師團を勃、塞國境に集中し、三師團を南方勃、希國境に、他の三師團を北方羅、勃國境に配置し、獨、埃の作戰進捗を待ちて參戰する豫定であつた。然るに、十月六日に至り希臘は武装中立を宣言し、羅馬尼も亦中立を繼續すること明確となつたので、兩國境の兵力の大部を塞國國境方面に移動するの準備に在つた。

小評論 埃軍の素質は塞軍の夫れに比して大國を誇る程に優秀ではない。裝備に於てこそ優つて居るが、人間は駄目であることが、一年間の實績で證明された譯である。而も、主戰場た

るガリシヤ方面でも失敗を重ね、獨軍の御厄介になつて辛うじて局面を維持しつゝある有様である。是に於て、なさげなくも、塞國を料理するにも獨軍によらなければならなくなつた。腑甲斐なき埃軍である。然し之れは河川戰の研究には直接關係のないことに屬するから、批評は之れ位に止めて置く。

二 兩軍の部署大要

塞軍の防禦

塞軍は獨、埃軍の侵入に對し持久の目的を以て逐次後退し、英、佛軍の作戰進捗を待つべき方針を以つて左の如き配備を爲した。

勃塞國境方面 二師團

ドナウ河畔 ラムよりセメンドリアに互る間 一師團

サーベ及ドナウ河畔 バンソヴァ對岸よりオブレノワツツに互る間 三師團

サーベ及ドリナ河畔 サバツツよりロズニツアに互る間 三師團

オルソヴァ對岸附近 一支隊

ウイセクラード(ドリナ河下流) 一支隊

バランカ 二師團、騎兵一師團(總豫備)

右に依れば七師團餘の兵力を以て河川に直接配備を爲し一部を總豫備に控置したものである。

獨、塙軍渡河の部署

渡河の部署は概要次の通である。

勃第一軍(四師團) ウイデイン西南方勃、塞國境方面より塞軍の脅威

ガルウイツツ軍(七師團) 一師團を以てオルソヴァ附近にて陽渡河に任じ主力はラム、コスト

ラック、セメンドリアの三箇所よりドナウを渡河せしむ

ケイヴエス軍(七師團) 一部を以てオペレノワツツ、セメンドリアよりサーベ河を、又他の一

部を以てビエリナ及ウキクセクラードよりドリナを渡河して何れも陽動に任せしめ主力

(五師團)を以てベルグラード附近の二箇所より渡河せしむ

右に依れば、軍主力を以てドナウの大河を渡り南下せんとするもので、從來塙軍が主力を以てドリナを渡河せると反對の遣り方である。

小評論 蕞爾たる小國塞耳比は、今や強大なる敵より猛襲を受けんとする危機に迫つて居る。

北方よりは恐るべきマッケンゼン軍、東方よりは精銳なる勃軍が側背を窺つて居る。唯頼みとするは英、佛軍の來援である。故に従前の決戰的作戰計畫と異なり河川を利用する持久防禦に決したのは至當である。但し河川に據り敵の渡河を妨害した後、即ち敵が渡河を完了した後、主力を以て逐々抵抗を爲しつゝ退却するの策は一考を要する。寧ろ主力は一舉に後退して塞國中にある高地線(第七圖一般圖參照)即ちケステンデイル、ウランザ、ノイバザルの線に據りて英、佛軍の來著を待つを可なりとしたであらう。蓋し獨、塙軍が渡河を完了した後は勃軍の參戰を豫想し得るが故に、北方地區でまごまごして居ると、却て脱出し得べからざる窮地に陥るであらうからである。故に該高地線には兩方面の敵に對する爲、時日のあらん限り堅固なる工事を施して置くの著意が必要であつたであらう。

又河川の防禦配備は持久の目的としては大體同意であるが、唯四百軒に上る廣正面に對し過度に兵力を散在せしむるときは、爾後團隊の行動支離滅裂に陥る虞が多分にある。故に此危險に陥らざる如く様、地區毎に河岸近くの要所に成るべく集結し、指揮統制に便なる如くし、且つ通信、交通設備に就て最大の努力を致さねばならぬ。論者の内には右の害に陥る顧慮からして、總豫備の位置に主力を集結しドナウ方面の渡河に對しては決戰的攻撃を加ふべきを

主張する者もある様である。之も一案である。日本軍ならばさうする方がよいと思ふ。然し此場合塞軍の實情を以て一六勝負をなすは考へものである。殊に結局塞軍に勝算なしと判断し得るに於て然りである。

獨、埃軍の主力の渡河方面をドナウ河方面に選定したのは、獨軍の優秀なると、兵力も優勢なるとにより、「渡河後の作戦行動容易」を第一條件として大膽なる渡河作戦を決行したものである。蓋しドリナ河方面は、渡河そのものは容易であるが、爾後の行動は比較的困難で、迅速なる作戦の進捗に適しない。之に反しドナウは千米以上千五百米にも上る大河であり、之が強行渡河は極めて危険であるが、作戦目的たるモラワ河谷への進入は比較的容易であり、勃軍の協力にも便利である。故にマッケンゼン司令官が彼我の力を判断して此の冒険に十分の自信を以て決行したのであるから、至當と認めざるを得ぬ。

三 作戦經過の大要

先づガルウイツツ、ケーヴェス兩戦の渡河に就て述べる。

イ ガルウイツツ軍の渡河

獨第百三師團 ドナウ下流オルソヴァ附近より渡河せるも其詳細は之を省略する。

獨第百一師團 ドナウ河ラム附近で河渡したのであるが、同地は埃國側に彎入し且高地を成形し塞國側から北方を瞰制する地形にある。塞軍は此處に三線の防禦陣地を設備し、砲兵をも配置して嚴重なる警戒を以て敵を迎へた。之に對し獨軍は十月六日から、其砲兵を以て數時間猛撃を塞軍砲兵に加へて全然之を制壓した後、歩兵戦に目標を轉じ、之を其陣地から撤退せしめた。そこで同日夜半を期して歩兵が先づ漕渡を以て對岸に渡り、ラムに掩護陣地を占領し、師團主力は翌七日拂曉から漕渡を以て渡河し午後八時全く完了し、確實にドナウ南岸を占領した。

獨第二十六師團及豫備第九軍團 コストラツツ附近でドナウを渡河した。同地は河幅千乃至二千米に及ぶが、其中間に長さ二十料にも及ぶテメス島と云ふ中洲がある。而して此附近の塞軍配備は微弱であつたので、獨軍は十月六日砲撃を以て威壓しつゝ、小なる抵抗を排除して渡河し八日を以て之を完了した。

獨第三軍團 獨軍砲兵は十月六日砲撃を開始し、セメンドリヤ舊要塞を破壊し且塞軍を撃退した後、八日以後渡河を開始し、十一日を以て確實に南岸を占領した。

ロ ケーヴェス軍の渡河

塊第八軍團 塞國首都ベルグラード附近で比較的困難なる經過を以て渡河したのである。塊軍砲兵は九月六日砲撃を行ひ更に同日夜半も砲撃を行った後、七日午前四時ベルグラード北岸に上陸を開始し、拂曉までに十四中隊計りを渡河せしめ得たるに過ぎなかつた。晝間には塞軍砲兵の妨ぐる所となり、損害を可及的少くする目的で一時渡河を中止し其日没を待つて渡河を再興し一旅團の渡河を了つた。次で第二日の日没後に更に渡河を續行して一師團の渡河を了り、續いて第二の師團は汽艇を以てする渡河を行ひ、第三日夕までに二師團の渡河を終了した。此第三日の朝即ち十月九日に先頭師團は攻勢に轉じ、塞軍を撃退してベルグラードの南端に進出し、兩師團の渡河終了後一時攻撃前進を中止し十一日を以て攻撃を再興することに決した。

獨豫備第二十二軍團 大チゴイネル島附近でサーベを渡河したのであるが、他の兵團と同じく、十月六日砲撃を開始して對岸の塞軍砲兵の制壓を試みたが、同日は其目的を達するに至らず、生殺しの状態で推移した。然るに翌七日早朝獨第一渡河部隊は塞軍が尙ほ堅守する大チゴイネル島に向ひ渡河を決行すべく漕渡を始めたところ、多大の損害を受け、戦況は思はしく進捗を見ず、日出時までに辛うじて六中隊の兵力を渡らせ終つたに過ぎぬ。爾後は砲火の爲實行不可能となり、此島の中で、彼我近く相對して日没を待つた。七日夜渡河を再興したが、之は良好なる状態に進

捗し、八日朝全島は獨軍の手に歸し、次で、南岸に通ずる二箇の橋梁をも自己の手に收め得たのは獨軍の爲幸であつた。獨軍砲兵は八日午前中に對岸塞軍砲兵を沈黙せしめ得たので、爾後獨軍の渡河は容易に進み、同日夕刻に至り確實に南岸を攻略した。斯くて十月九日午前中に軍團の主力が前岸に渡り終るや、第八軍團と協力して塞軍陣地を攻略し、東南方に之を壓迫することが出来たのである。

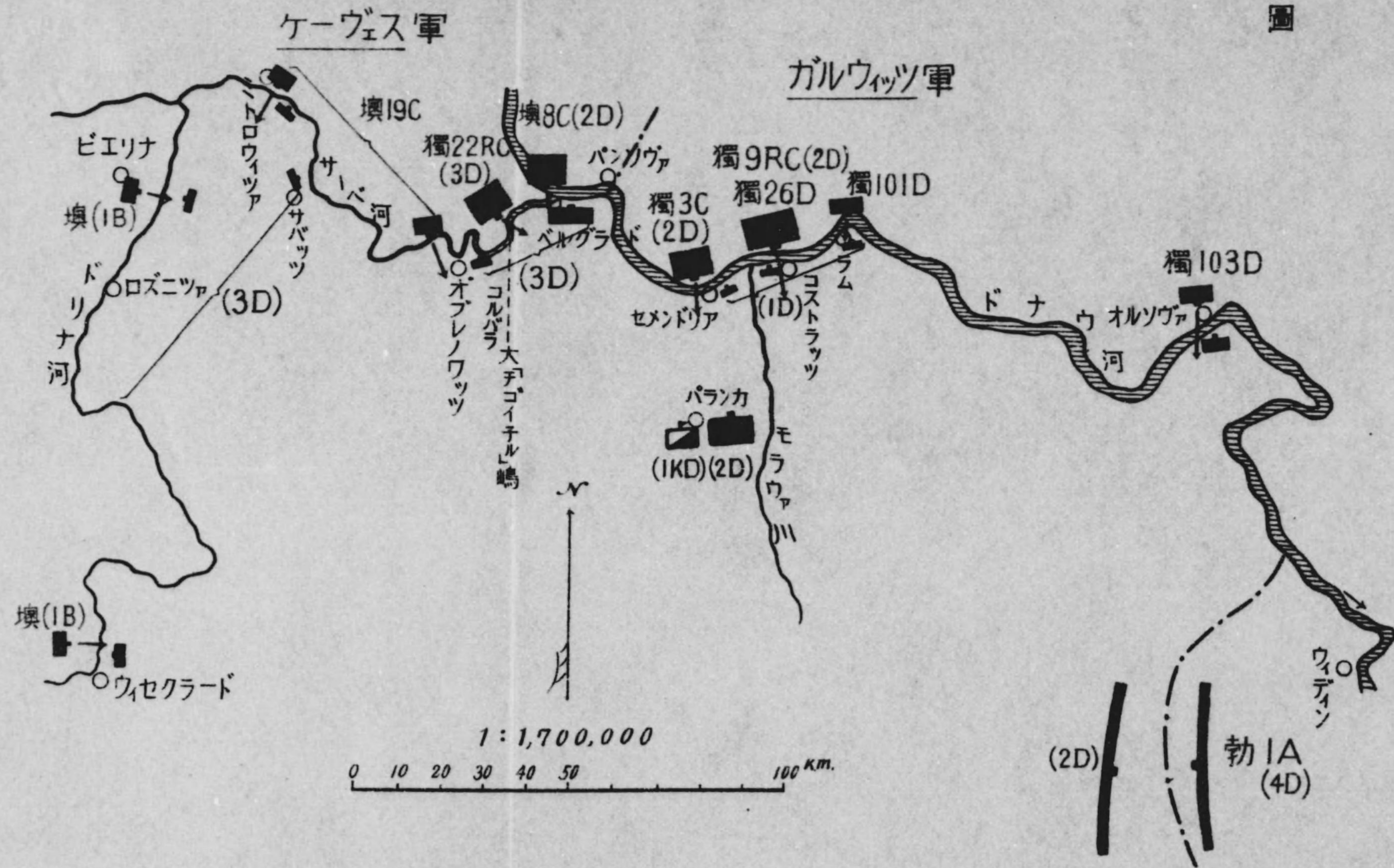
ハ 爾後の戦況大略

前述の如く獨、塊軍は十月六日から一齊に渡河行動を始め十月十一日までに全軍の渡河を完了し、塞軍の抵抗を排除しつゝ協同前進を起した。勃軍も今や孤立の危険がなくなつたので十月十一日より攻勢に轉じ、獨、塊軍と策應して當面の塞軍を撃退し、十一月末頃劣勢なる無援の塞軍は憐むべき状態を以て西方國境に壓迫され、間もなく、自國領土を舉げて敵に委するの已むなきに至つた。

此間、英、佛軍は希臘のサロニカに上陸しつゝあつたが、遅々として牛歩も雷ならず、塞軍の覆滅せらるゝまでには遂に直接救援の目的を達し得なかつた。故意か自然の結果かは追究するも無用である。然し英、佛軍が其悲惨なる禍中に飛込み巻き添へを喰はず、希臘を勢力下に壓する

千九百十五年十月マッケンゼン軍渡河作戰要圖

第八圖



開戦と同時に、塙國統帥部は仇怨塞國に對し積極作戰を實施せしめた。之は國內輿論を考察す

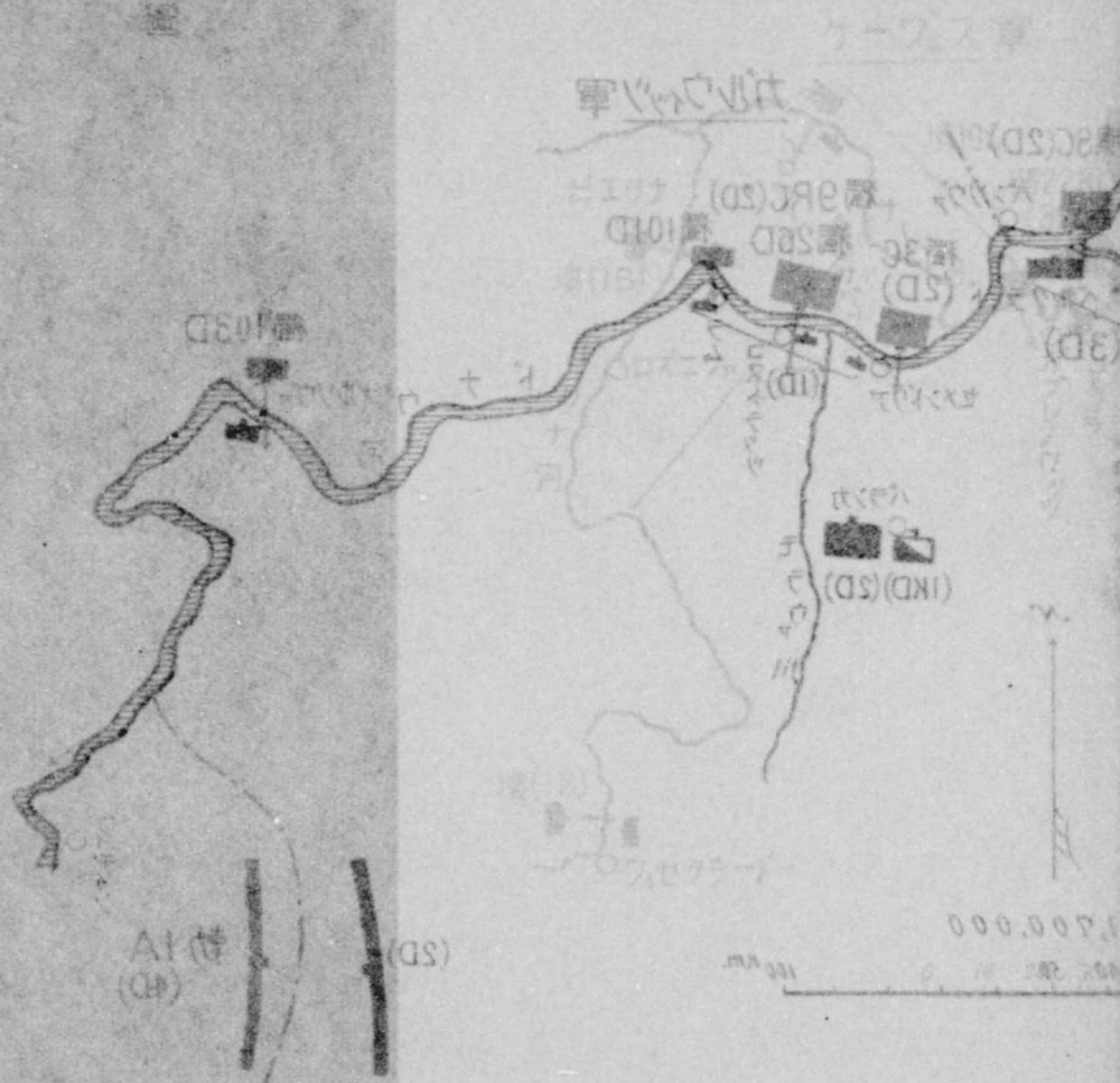
に甘んじたのは、彼等利己主義の觀點からしたならば良策であつたかも知れぬ。

小評論 叙述が簡單であるから細部の評は省略する。然しドナウの大河を敵前で渡河するのは決して容易でない、寧ろ大なる冒險と謂はざるを得ぬ。塞軍にして若し精銳であり、志氣旺盛であり、且つ率ゐるに良將を以てしたならば、持久の目的であつたにせよ、局部的に相當纏つた兵力を遊動的に活用し部分的に敵の半渡に乘じ其弱點を衝いたならば、結局は獨、塙の渡河を成就せしめるとしても、多大の損害と、多くの時日とを費さしめたであらう。然し獨、塙軍としては各方面共用意周到に、而も果敢に渡河を實行し得たことは、流石に統帥宜しきを得、部隊の訓練も相當に行はれてあつたものと推斷し得る次第である。

其三 評論

一 塙軍は最初より塞軍に對して渡河作戰を遂行すべきや

第五十卷 河川防禦要圖



れば自國の面目上、感情上から無理からぬことである。要は政略上よりは至當と謂へるであらう。然し積極作戦をなす爲には、小評論に於て述べた通り、塙、塞兩國軍の素質を公平に較量すれば殆んど甲、乙はない、否戦闘の結果から觀れば寧ろ塞軍が一目上かも知れぬ、故に更に優勢なる兵力を以てするのでなければ渡河積極作戦の成果を確實に豫想するを得ぬ。然るに對露作戦は塙國生死の岐るゝ所で、塞國との勝敗の如きは、前者に比すれば遙に輕視し得べきものである。即ち戰略上絶對に露國には勝たねばならぬ。然らば主力は多々益、辨ずるのであつて、全部出しても尙ほ且十分でない位である。然るに平時の作戦計畫に於て對露に豫定せる第二軍の半部をも對塞作戦に分割するに至つては、之を統帥部の過誤と謂はざるを得ぬ。詳細に之を論ずるは目的に反するから之を省くが、對露第一會戦に塙軍が不利の戦闘を交へたのも、此過誤が主なる原因をなして居ることは、戦況が雄辯に之を證明して居るのである。

要するに、戦争が始まつた以上、戰略上の見地から凡てが割出されなければならぬのであつて、政略に左右されては戦争の勝敗に大關係を及ぼす所以の一例となし得るであらう。

二 古今河川戰の概觀

日清戰爭當時と日露戰爭當時とを比較して見ると、そこに武器の進歩、技術の進歩、兵力の増大等の關係から、形の上に於て趣を異にするものがあることを看破し得るであらう。更に之を歐洲戰の二例に比較して見ると、之亦進化の概要を窺ふことが出来る。故に吾人は將來戰に於ける河川戰に就ては、大體の原則に就ては變化なしとするも、日進月歩の今日に於て少くも次の諸事項に就て往時と今日とを比較考量し、推究判斷の資とするを要するであらう。

- イ 渡河材料、架橋材料の進歩
- ロ 空中搜索、空中爆撃乃至攻撃の發達
- ハ 火器の異常なる發達
- ニ 通信機關の進歩、向上
- ホ 攻、防兵力の増大
- ヘ 河川防備法の發達
- ト 照明材料及手段の進歩

右の各項目に就ては一々之を説明するの必要を認めぬと思ふが、攻者の爲に有利なものもあり、不利なものもあり、防者の爲にも同様である。蓋し河川戰に限らず、攻者に有利なる手段、材料

が發明されると、之に對抗する防者の進歩となり、防者が有效なるものを發見すると之を打ち破るべき攻者の研究となる。斯くして軍事界も、一般世界の進歩と共に變つて行くものである。故に河川戰も單に從來の經驗のみに固著して居つては失敗である。此の尊き經驗を基礎とし右に列舉せる如き項目を織り込んで新時代のものとせなければならぬ。

三 訓練の向上

攻防材料、資材の進歩、複雑性の増大によつて、一兵の特種技術訓練を向上、習熟せしむるの要益、切なるものと同時に、各部隊の協同連繫の演練等が大局の觀察から徹に入り細を穿つまで周到、綿密なる著眼の下に教育を積むの要あるは勿論、更に吾人の將來豫想する河川の實狀を究め、對岸の設備等に鑑み、之に適應する如く實際的の演練と研究とが特に必要であり、又少くも幹部たる者は機會を求めて實際の狀況を實見して置くべきである。

右は平凡なる事柄に屬するが、之が實行に就ては相當に努力を要することに留意しなければならぬ。

第十三 南山附近の戦闘

(地形の詳細は日露戦史第一卷附圖第九乃至第十三を参照せられたし)

南山附近の戦闘は、野戦陣地に據れる少數の露軍に對し絶對優勢なる第二軍主力が艦隊の協力を得たる攻撃戦闘であり、而かも其攻撃たるや頗る困難を嘗め、極めて大なる犠牲を拂つて獲得せる勝利であつた。そこに吾人は貴重なる教訓を見出さねばならぬ。

一 第二軍の編成、上陸、十三里臺子附近の

戦闘梗概

イ 第二軍編成及其任務

第一軍諸團隊に次で第二軍所屬のものも明治三十七年三月六日動員を令せられ、三月十五日を以て第二軍戦闘序列が發令せられた。其の團隊の大意は左の通りである。

軍司令官 大將 男爵 奥 保 章
第一師團 (長 中將 貞 愛 親 王)

第三師團 (長 中將 男爵 大 島 義 昌)
第四師團 (長 中將 男爵 小 川 又 次)
野戦砲兵第一旅團 (長 少將 内 山 小 二 郎)

備考

一 師團は左の諸件を除く外、概ね現制と大差がない
各隊には自動火器を有せぬ

騎兵聯隊及工兵大隊は三中隊

野戦砲兵聯隊は野砲のみ

二 野戦砲兵旅團は第十三、第十四、第十五の三聯隊より成る

三 第一、第三師團には臨時に機關砲隊(現制の機關銃隊に相當す)を附す、砲隊は二十四門を有す

四 第四師團の歩兵一大隊は韓國に派遣してある

第二軍の任務は、旅順要塞を大陸より遮斷し且大連灣に根據地を成形し、爾後第一軍と策應し敵を求めて之を攻撃するに在つた。

□ 軍の上陸

第二軍主力は五月五日から、候兒石及孫家咀子附近に上陸を開始したが、海岸の地形、遠淺の關係、不良なる天候等に妨げられ、非常なる困難と危険とに遭遇して痛く統帥部を心配させたが、敵の直接妨害を受くることなく、九日間を費して約二師團半の戦闘部隊を揚陸せしめ得たのは、幸であつた。

我が揚陸をして斯の如き困難に陥らしめたことに就ては、評論を省くが、要するに平時の調査が粗漏であり、又敵が察知するを恐れて直前に於ける偵察をも殆んど實施しなかつたことが有力なる素因であることに注意を要する。

斯くて軍は揚陸の進捗に伴ひ其最前線を擴張し北方及西方に對し警戒しつゝあつたが、五月十三日までに接受せる情報によつて、軍司令官は次の如く敵情を判断した。

金州附近には混成約一旅團の敵が散在して居る。而して其主力は南山を、一部は十三里臺子附近を占領し、普蘭店、南瓦房店附近には少數の敵が停止して居るのみである。然るに遼陽、海城、蓋平附近の有力なる敵は我が第一軍方面に移動するの徴がある。

敵情判断右の如くならば、第二軍としては速に北進を開始して第一軍と策應する必要がある。

そこで軍司令官は北進の準備を爲すに決し、十三日夜の軍命令を以て第三師團主力、第四師團を以て北方に面せしめ、第一師團をして金州北方高地線を占領せしめ、別に歩兵五大隊、砲兵旅團（一大隊欠）を軍直轄として控置した。

ハ 十三里臺子附近戦闘の大略（第九圖参照）

軍司令官は前記の如き部署を爲したが、若し金州方面の敵の兵力が強大なる場合には、北方に面せる第四師團の主力をして直に第一師團方面に轉向せしめ、以て協力して敵を攻撃するの意圖であつた。然るときは五月十六日に準備を整へ、翌十七日に攻撃を實施することとなるであらうと判断し、第一師團長には此の旨通報して置いたのである。

ところが、十四日夜までに得たる諸情報に依ると、北方の敵は少いが、金州方面は旅順方面から増加しつゝあつて約一師團に上つたものの如く思はれる。故に其の腹案の如く、第四師團主力に野戦砲兵第十三聯隊を附して金州方面に轉進を命じた。

五月十五日第一師團は三縱隊となりて西進し、途中少敵を驅逐しつゝ右側支隊（歩兵二大隊、機關砲六門）を以て高麗城附近に、本隊の前衛を以て劉家店附近に、左側支隊（歩兵二大隊、機關砲六門）を以て牟家店附近に達し各宿營に就いた。又獨立騎兵（歩兵一中隊の支援を附す）は普蘭

店—金州街道方面搜索の任務を帯びて北方大嶺底附近に宿營した。

師團長は此の夜十三里臺子附近の敵情に就ては確實に知り得なかつた。依つて翌十六日を以て威力搜索を行ふに決し、本隊たる歩兵三大隊半、野戰砲兵聯隊等を現在地たる衣家屯附近に控置し、其他を以て敵陣地前に近接せしむべく部署を定め、天明を待つた。

第四師團は所命の如く普蘭店—金州街道方面から南下し、此日五十里堡附近に達した。然し此日の行軍は地形嶮難、道路極めて不良の爲、頗る行進に困難を嘗めたのみならず、野砲の如きは歩、工兵の援助を受けつゝも尙ほ宿營地に到着し得ず、徹夜の作業を以てしても、全部の到着を豫期し得ざる有様であつた。そこで師團は翌十二日現在地に停止して前方の搜索（師團は全部騎兵を有せず、歩兵によりて近距離の搜索を爲さしめた）を爲しつゝ、砲兵の到着を待つに決したのである。

五月十六日第一師團は既定の如く行動し、午前十一時過ぎ、野砲一大隊をして陣地を占領せしめ砲撃を開始せしむるや、忽ち敵砲兵の目標となり、大隊長以下相踵いで死傷者を生じ、苦戦の状態であつたが、午後一時過ぎ敵砲兵の退却するまで能く射撃を續けた。

第一線諸隊も一部は激戦を交ゆるに至り、結局砲兵を更に一大隊増加し午後三時頃には金州東

北方一帯の高地を奪取し、諸隊は同夜同高地線に宿營した。

此の戦闘により第一師團の受けたる損害は死傷百六十九名であつた。其偵察の結果により知り得たる敵情は「東狙兵第五聯隊の二大隊及同第十三、第十四聯隊の各一大隊、砲八門で、其外乗馬歩兵と東狙兵第十六聯隊所屬のもの若干が加はつて居た。」といふことが判つた。

第四師團は前日の位置に留まつて敵情搜索中、午前九時頃軍參謀の來著に依り第一師團の行動計畫及第四師團が十三里臺子附近の敵を第一師團と協同して攻撃すべき軍司令官の意圖を知り、先づ三十里堡に向つて前進するに決し、逐次行動を開始した。途中第一師團方面の砲聲を聞き又戦闘開始の通報を受けつゝ前進を繼續したが、午後二時三十分頃三十里堡附近に師團主力の到着せる頃には、敵兵退却を開始せるの報に接したので、此夜主力を以て十三里臺子及二十里堡附近に宿營した。

小評論

一 威力搜索は通常視察に依つて目的を達し得ざる場合に用ふべき手段である、而して其實行手段に於ても其目的に應じ自から其方法を異にするものである。一例を述べれば、

イ 攻撃の目的を以て行ふとき、即ち自己の知らんとする敵情を力を以て暴露せしめ之

に依つて重點の指向を定め或は攻撃の時機を即時になすべきか、或は拂曉を待つべきか等を定むるの資に供する如きとき

□ 攻撃すべきや、或は現状を持続すべきやを定むる爲に行ふとき、即ち敵の兵力劣勢なるとき、或は退却の徴あるとき等にて攻撃を以て敵を撃破するか或は抑留せんとする如き場合

前者の場合には所謂總攻撃の端緒を開く威力搜索なるが故に、原則の示す如く、強大なる兵力を以て行ふも差支ない。要すれば直に本戦を惹起せしむべきものであるからである。然るに後者の場合に於ては、其目的とする條件を知るに必要な最少限の兵力殊に近接戦を交ゆる兵種を少くし遠戦兵種を主として使用し、以て不慮の本戦を惹起せざる様に注意しなければならぬ。

戦史は此威力搜索に依つて指揮官の豫期せざる本戦を惹起したる例證の多數を教へて居る、彼の一八七〇年普佛戦役に於けるウエルト附近の會戦の如き其適例である。

二 然らば第一師團の實施したる威力搜索は其何れの目的なりしか。當時第一師團長は五月十七日に第四師團と協同して金州東方高地を占領すべき軍司令官の意圖は承知して居る。

然らば十六日は先づ敵陣地前の要點を占領して極力搜索を續行し、要すれば本戦を惹起せざる程度の小部隊の威力搜索に留め、以て翌十七日第四師團と共に絶對優勢を以て一舉に敵を撃滅し直に之に尾して金州、南山をも奪取するの決意を適當とするにあらざるか。

三 第一師團の獨斷攻撃的行動は、軍司令官をして痛く心配さす結果を招いた。即ち軍司令官は十七日兩師團をして攻撃せしむることを内示して置いたから、まさか、師團が獨力で真面目の戦鬪を交ゆるが如きことはなからうと信じて居た。然るに前方の砲聲は漸次激烈となり、事態容易ならざるものあるを感ずる至つた。即ち我が第四師團が後れて居ること殊に其砲兵の行進至難なるを敵が諜知して攻勢に轉じたのではないかと疑つたのも無理はない。有爲なる敵が、若し一師團位の兵力を擁して居たとすれば出撃の好機であつたであらう。斯くて軍司令官は第一師團の戦況が萬一不利なる場合には、新銳の兵力を増加するの必要ありとして、第三師團長に其歩兵一聯隊(二中隊欠)と砲兵旅團の一聯隊とを野戦砲兵旅團長をして指揮せしめ第一師團方面に急行すべく命令を與ふる至つた程、軍司令部では大心配をなしたのである。通信機關の不完全なる當時に於ては、さもあるべしと推察せられる次第である。



ニ 露フオーケ支隊行動の大略

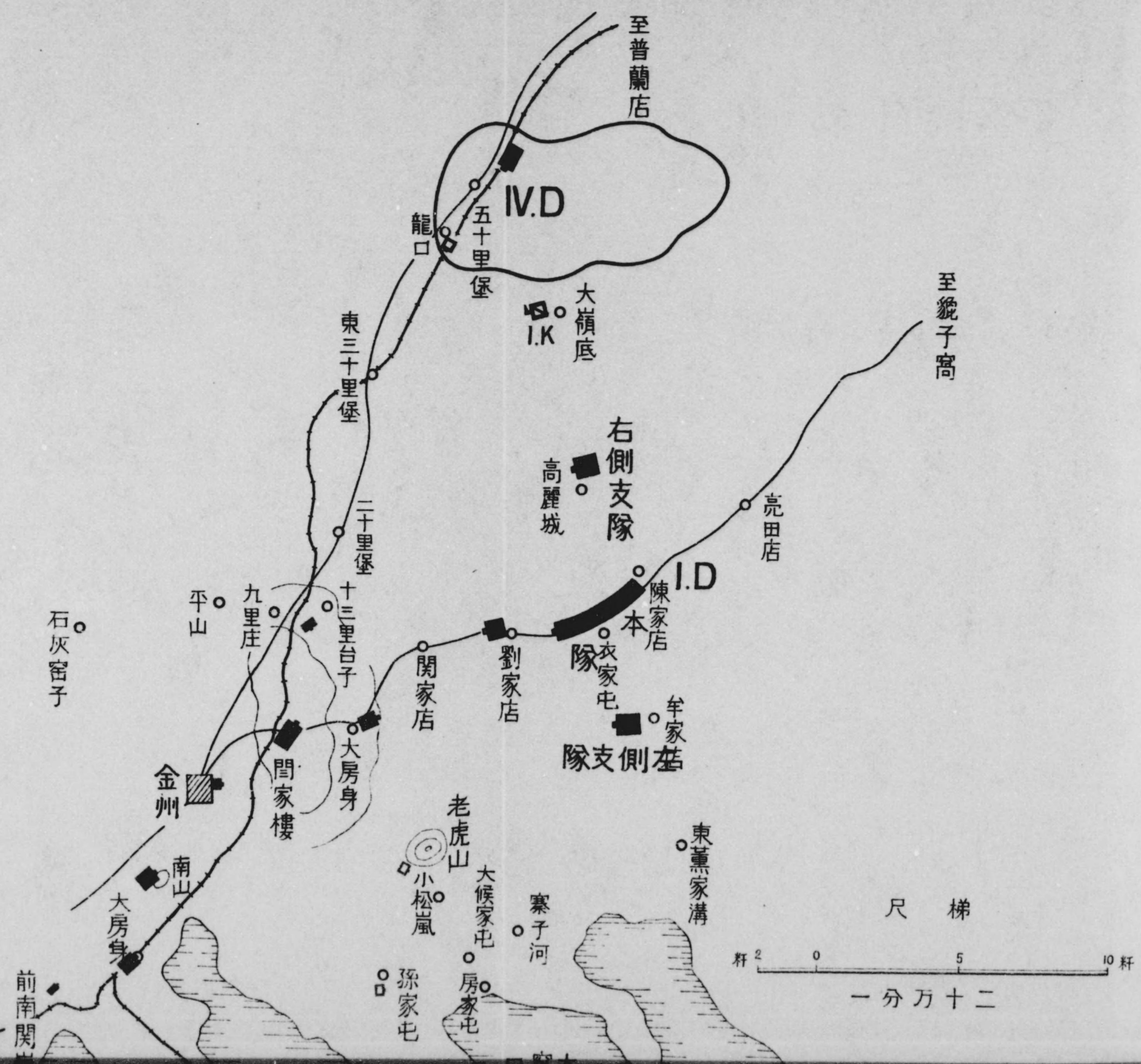
日本軍の上陸及其前進に對する爲に、關東兵團（二師團、砲兵二旅團及其他若干部隊を基幹とす）中の東獵兵第四師團長フオーク少將は、其師團の主力を指揮し金州附近を中心として大連、柳樹屯、南山、南關嶺、十三里臺子等の各所に一部隊を分置し、以て日本軍の企圖に對應するの準備に在つた。爾後日本軍の上陸に伴ひ配置に變更が行はれたが、日本第一師團の十三里臺子一帯の高地攻撃の際は歩兵約八大隊及砲十門を基幹とする部隊を以て配備せられた。然るに 配備の大體を見ると、第一師團の前進方向に對して兵力少なく且つ砲兵の配備なきに反し、北方十三里臺子方面は配備の重點を成形せる觀がある。

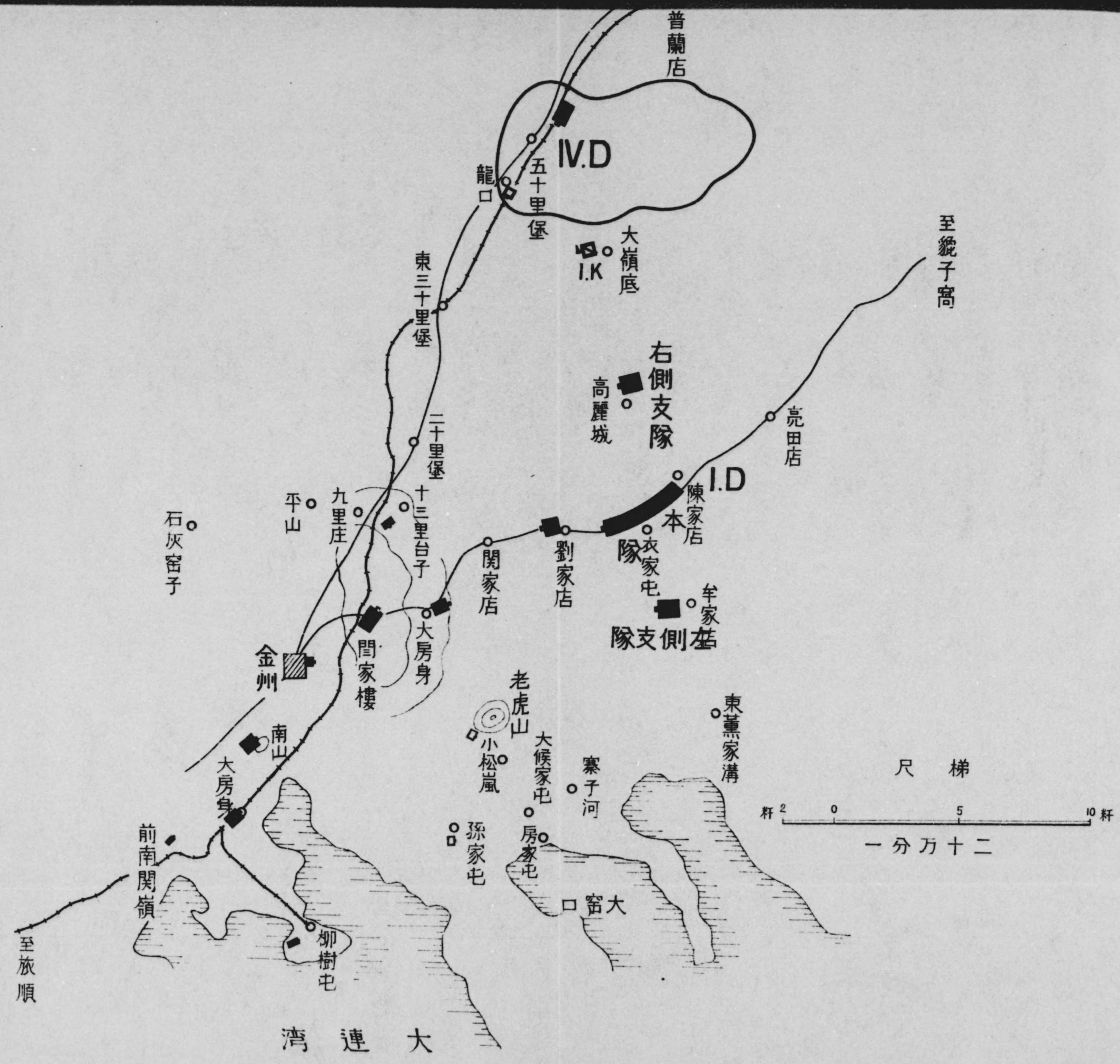
小評論 右の如き露軍の配備は解し難い。元來フオーク少將の任務は、成るべく日本軍に大損害を蒙らしめたる後要塞地帯内に退避するに在る。然らば自分は優勢なる敵より逼迫せられ又は捕捉せられざる様に、地形の利用は勿論、主として砲兵を巧みに利用して遠距離に之を支へ且つ損害を與ふることに著意せねばならぬ。此の觀點よりせば、金州東北方高地の占領は適當であるが、配備の點に就ては落第である。爲に此戦闘に於て百八十八名の損害を蒙り、日本軍に比し多數に上つたことは過度の犠牲を拂つたものと謂はざるを得ぬ。

第一師第四團位置要圖

於五月十五日

第九圖





第一・第四兩團立圖置

五月十五日



第六圖

二 南山攻撃の準備

イ 五月十七日乃至五月二十一日の概況(第九圖参照)

軍司令官の判断に依れば、露軍は夙に南山附近を堅固に占領して居るから、輕舉に之を攻撃するは慎まねばならぬとなし、第一、第四兩師團をして概ね現在地を占領して敵情を搜索せしめ、恰も十七日我が艦隊が金州灣より金州を砲撃する筈であつたから、其成果を待たしめた。然るに當日濃霧の爲金州灣内に我が艦隊を認め得ざるのみならず、正午過ぎるも砲撃の様相がない。依つて軍司令官は、決心を變更し主力を以て北方に轉進するに決した。之は軍が今直に金州南山を攻略せんとしたならば、多大の損害を蒙るであらう、故に重砲の配屬を請ひ、其來著を待ち攻撃に著手するを可なりとしたからである。そこで第一師團全部及第四師團の一部のみを以て金州東北方高地線を占領せしめ、第四師團の主力及野戰砲兵第一旅團に屬する砲兵聯隊を北正面に轉進せしめた。然るに、此等の部隊の轉進せる五月十八日に大本營から次の要旨の命令に接した。

第二軍は艦隊協同援助の有無に關せず速に前面の敵を驅逐し陸上より大連灣を制し掃海の時機を得せしむべし

之は軍司令官の決心に反したる命令である。そこで再び部署が變更せられ、北方面に在る兵團の兵力を金州方面に招致し、北方に對しては新に第二軍の戦闘序列に加へられたる第五、第十一師團、騎兵第一旅團の内第五師團の上陸に伴ひ同師團を基幹として北方面面に配置し、軍の背後を安全ならしめたる後、攻撃實行を爲すに決した。

第五師團は五月十九日より上陸を開始し、獨立第十師團も亦大孤山附近に上陸を始めた。依つて軍司令官は車家屯に於て五月二十日金州及南山の攻撃計畫を定め、二十三日十三里臺子附近から大窰口西北岸の線に兵力を集結し二十四日拂曉より運動を始め、二十五日諸準備を爲し、二十六日攻撃を敢行することに定めた。

五月二十三日の概況(第九圖参照)

此の日までに軍司令官の知り得たる敵情の概要は次の如くである。

金州附近には依然少數の歩砲兵があり、靳家屯附近にも若干の歩兵が居る。和尚島(柳樹屯東南方高地金州南方十軒)に約八門の重砲が海に面して配備せられてある。其の若干門は東北方即ち第三師團の前進地域方面をも射撃することが可能である。南山には砲臺約十座、堡壘三の外、散兵壕がある。頂上には探照燈が据ゑ附けられ、又南山東側閻家屯附近より北麓及西方を経て

轟家屯の東北約一千米に亘つて鐵條網が設備せられ、それより左翼には防禦工事が無い、尙ほ敵砲彈の破片によれば二十種、十五種、十種半、八種六、七種六の各加農及九種曲射砲を有するであらう。

第四師團は第一線を以て石灰窰子、平山、九里庄の線を占領し、主力を二十里堡附近に位置し、野戰砲兵第十三聯隊は十三里臺子附近に在つて第四師團長の令下に入つた。

第一師團は第四師團の到着に伴ひ金州―普蘭店街道以西の地域を之に譲り、又左側に出せる寨子河支隊は第三師團の到着するや原隊に復歸した。

第三師團は第一線を以て小松嵐、大候家屯を経て房家屯に亘る線を占領し、主力は寨子河及城子河附近に位置した。

野戰砲兵第一旅團(第十三聯隊を欠き、歩兵第十八聯隊第一大隊、工兵第五大隊(一中隊欠)を附す)は東董家溝附近に宿營した。

此の日までに北方面に於ては大なる變化はなかつた。但し歩兵第一旅團は是より先五月二十二日より上陸を開始した。

小評論 軍司令官が、上陸當初露軍の眞價値も不明なるに際し、慎重の態度を以て、南山攻撃

を差控へ重砲の配屬を請うたことは、戰場心理として敢て非難する譯ではないが、史的觀察を以てしたならば、餘りに戒慎に過ぎたことが判るであらう。吾人は此の間の消息に鑑み、輕舉を戒むると同時に、慎重に過ぎ戰機を逸する如きことがあつてはならぬ。敵に比して遙に優勢なる兵力、特に多數の野砲を有するを信じ得るに於ては、必ずしも重砲の配屬を持つことなく、須らく戰闘實施の手段を慎重にして速に攻撃を遂行するの決意がなければならぬと思ふ。

ハ 五月二十四日の概況(第九圖、第十圖参照)

第二軍の金州、南山攻略部隊は、二十三日を以て前記の如く金州北方より東北方を経て東方に互り開進を終つたが、第四師團は通路不良の爲、連日困難なる行軍を續け、大に疲勞して居る。然るに第二軍としては大部最初の戰闘であり、又堅固なる野戰陣地の攻撃であるから、十分に英氣を養うて堂々と全力を揮はしむるの必要上、軍司令官は二十四日拂曉から攻撃運動を起すべき豫定を延ばし、同夜暗を利用して前線を推進し攻撃を準備し、二十五日拂曉から南山の攻撃を開始するに決した。

恰も此の日午前十時聯合艦隊司令長官より第二軍の大連灣攻撃に策應して二十五日、二十六日

の兩日一艦隊を金州灣に派遣し南山の敵を砲撃し、陸軍に協力する、但し二十四日以後、霧又は荒天なれば中止するとの通報に接した。是に於て軍司令官は同日午後一時南山攻撃の爲にする軍命令を下した。其の攻撃計畫の要旨は次の通りである。

南山攻撃計畫要領(大要)

第一期

- 一 各師團は各一小部隊を以て二十五日午前三時三十分を期し左の線を占領し、其主力は南山の砲火を蒙らざる地に位置して前進の準備に在り
 - 第一師團(歩兵一聯隊欠)は金州東北約五百米附近より肖金山を経て後尾(肖金山東南一軒)東方高地に互る間
 - 第四師團(野戰砲兵第十三聯隊を附す)は第一師團の右翼に連り李家屯附近に互る間
 - 第三師團(歩兵二中隊欠)は王家甸子附近を占領す
- 第一、第四師團砲兵の一部は同時までに南山の砲火を蒙らざる地に於て金州城に對し放列を布置す

- 二 野戰砲兵第一旅團(第十三聯隊を欠き第三師團の歩兵二中隊、工兵第五大隊(一中隊欠)を附す)は寨子河附近に位置し前進の準備に在り

三 第一師團の歩兵一聯隊は二十五日午前三時三十分大房身附近に於て軍の總豫備となる

第二期

四 陣地に就きし第一、第四師團の一部の砲兵は艦隊の砲撃開始と共に金州城を射撃し他の各砲兵隊は陣地を構成す

第三期

五 第一師團は金州城東側と南山東北端との線以東、八里庄、閻家屯中央の線以西の地區より南山に向ひ攻撃す

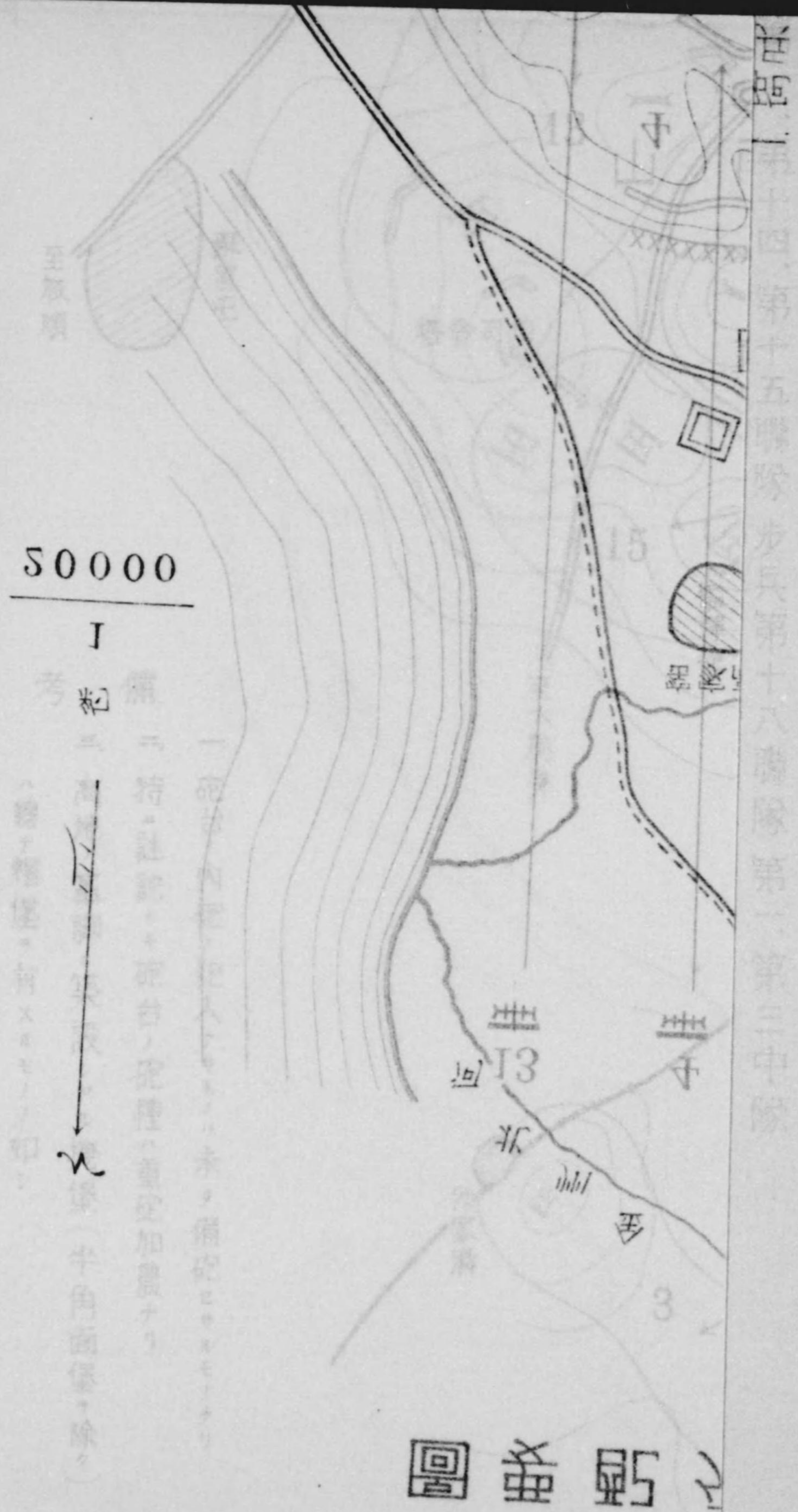
六 第三、第四師團は第一師團に連繫し南山を包圍する如く攻撃す

同時第四師團の一部を以て金州城を攻略す但し此攻撃は第二期に於て行ふことあり

七 全砲兵は陣地に就き射撃を開始し軍總豫備隊は肖金山麓に移る

八 第三期の運動開始は別命す

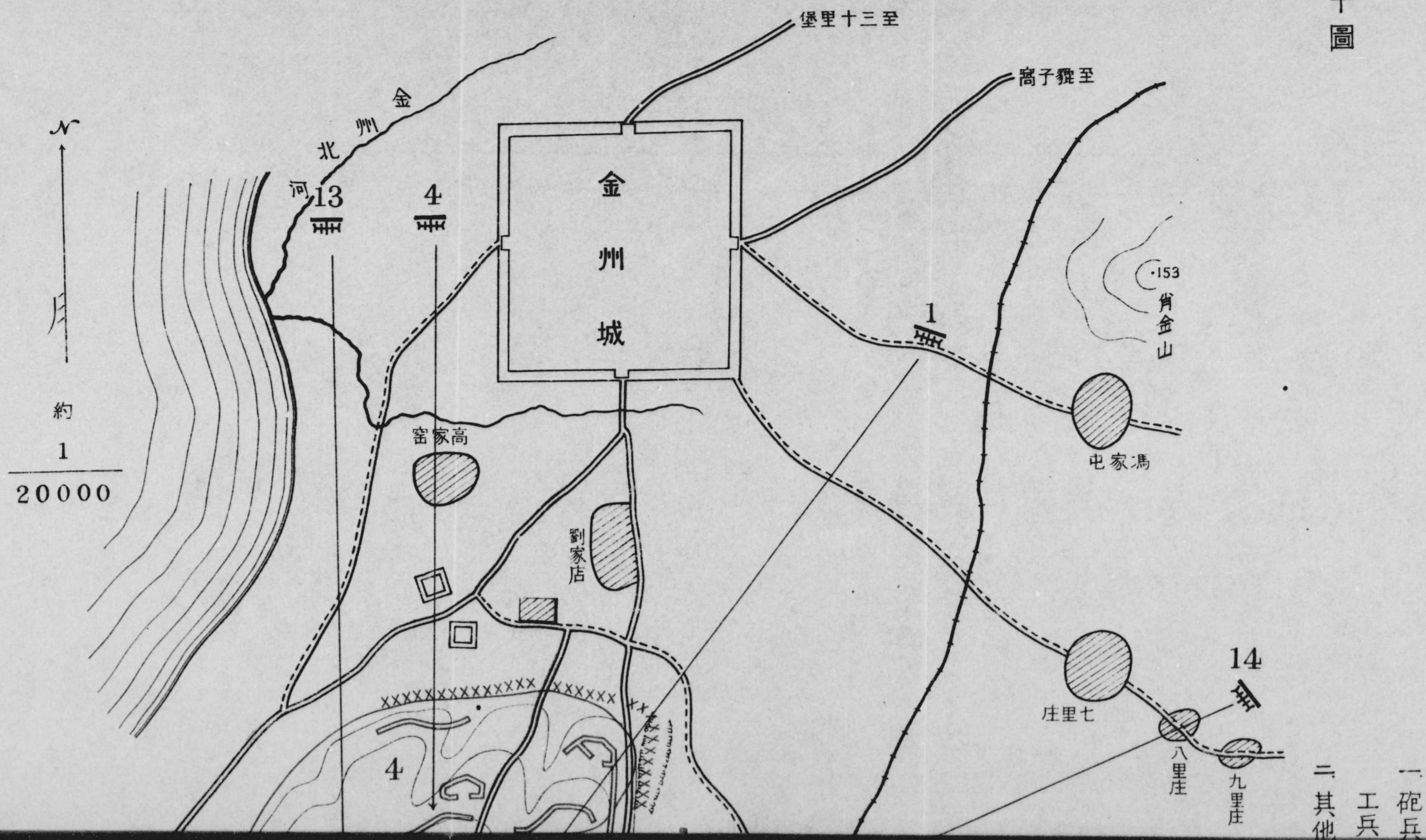
尙ほ軍司令官は砲兵の戦闘に關し具體的に統一的計畫を作製するを必要なりとし、軍砲兵部長税所少將をして砲兵旅團長内山少將と會し、各砲兵隊の陣地、射撃目標、進入時機、射撃開始時期等に就て決定せしめた。其要領は第十圖に示す通りである。



砲兵指揮關係圖

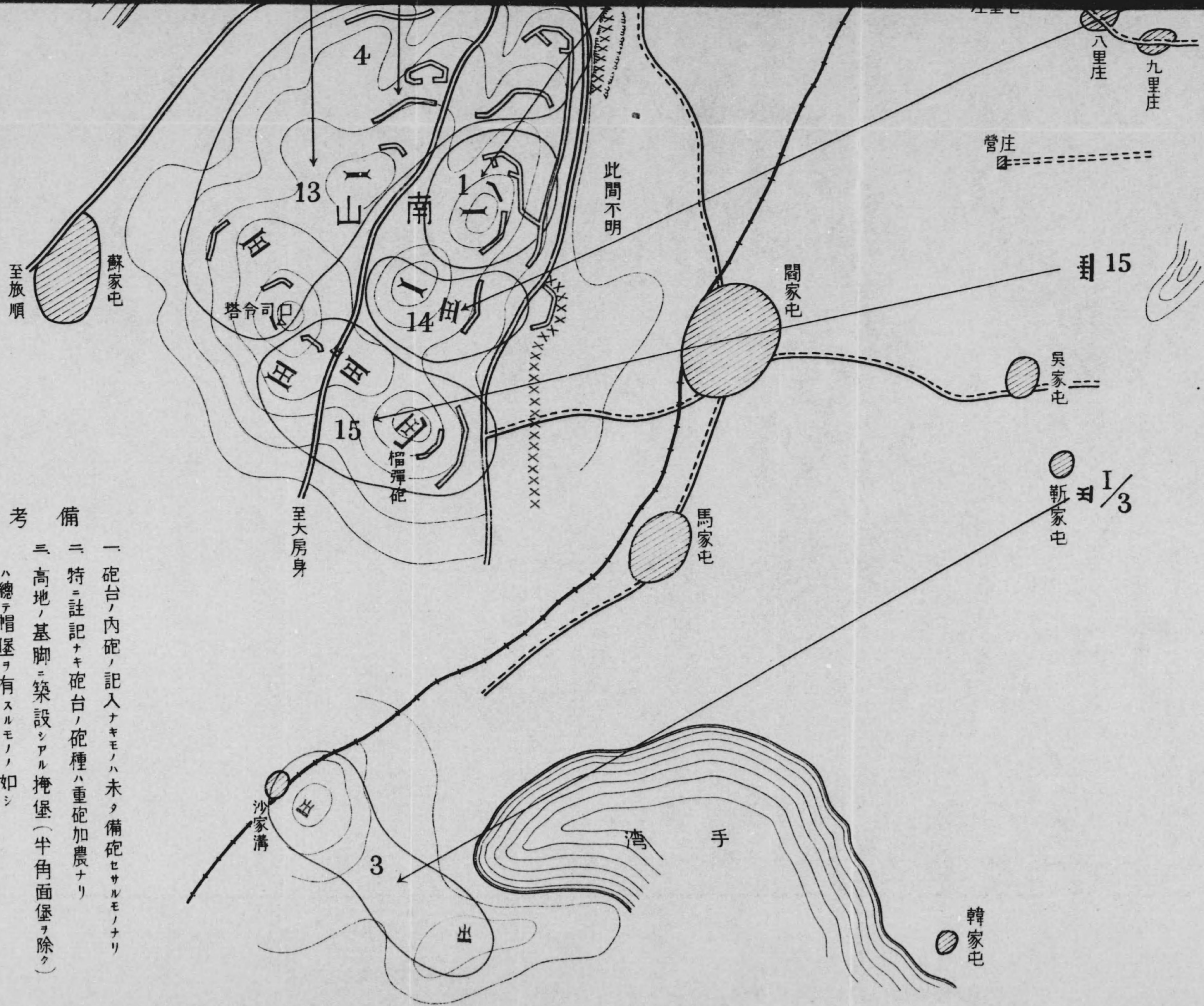
圖要配分標目兵砲及地陣敵近附山南

第十圖



砲兵指揮關係

- 一 砲兵第三、第十四、第十五聯隊步兵第十八聯隊第一、第三中隊
工兵第五大隊(第三中隊欠)は砲兵第十四聯隊長藏田大佐の指揮に屬す
- 二 其他は砲兵旅團長の直轄とす



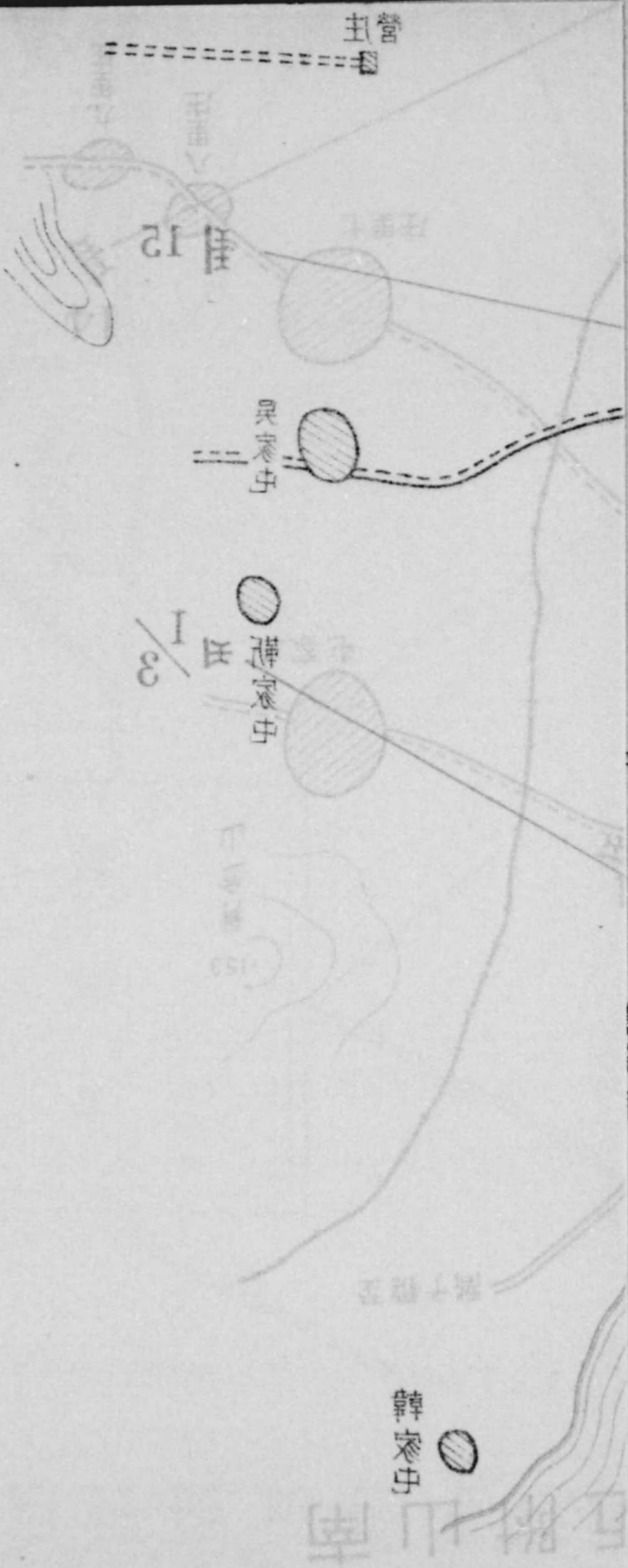
- 考 備
- 一 砲台ノ内砲ノ記入ナキモノハ未タ備砲セサルモノナリ
 - 二 特ニ註記ナキ砲台ノ砲種ハ重砲加農ナリ
 - 三 高地ノ基脚ニ築設シアル掩堡(半角面堡ヲ除ク)
ハ總テ帽堡ヲ有スルモノノ如シ

四 XXXXXXXXXX 鐵條網

五 本圖ハ戦闘詳報ノ附圖ヲ基礎トセルモノ故實際
トハ相違セルモノアリ

ハハ琳對サハチマレ

本圖ハ輝關詳解ノ地圖ヲ基點イヨルチ、姑實烈



ハ輝兵對團員ノ直諫ヲモ

第五大尉(第三中隊)ハ輝兵第十四編隊員藤田大尉ノ諫ヲモ

第三、第十四、第十五編隊ハ輝兵第十八編隊第一、第三中隊

ハ輝兵對戰關係

二 五月二十五日の概況(第十圖、第十一圖参照)

各師團は前記の計畫要領の通りに二十四日夜半から行動を起し、二十五日午前三時三十分所命の位置に就き、滿を持して夜の明くるを待ちつゝ艦隊の砲撃を期待したが、朝來風波強く、薄霧が金州の陸海面を蔽ひ爲に艦隊の行動に障礙を興へ、遂に砲撃の實行を見ない。

軍司令官は午前六時劉家店の宿營地を出發するに方り軍參謀山梨半造少佐を第三師團に派遣し注意を興へしめて曰く、

軍は明二十六日朝から本攻撃を實施する豫定である、敵は或は我が左翼方面より逆襲を企圖するやも測り難いから、師團は第一師團の接近に伴ひて前進し、獨力突出せざる様注意し成るべく多くの兵力を左翼方面に使用すべし。

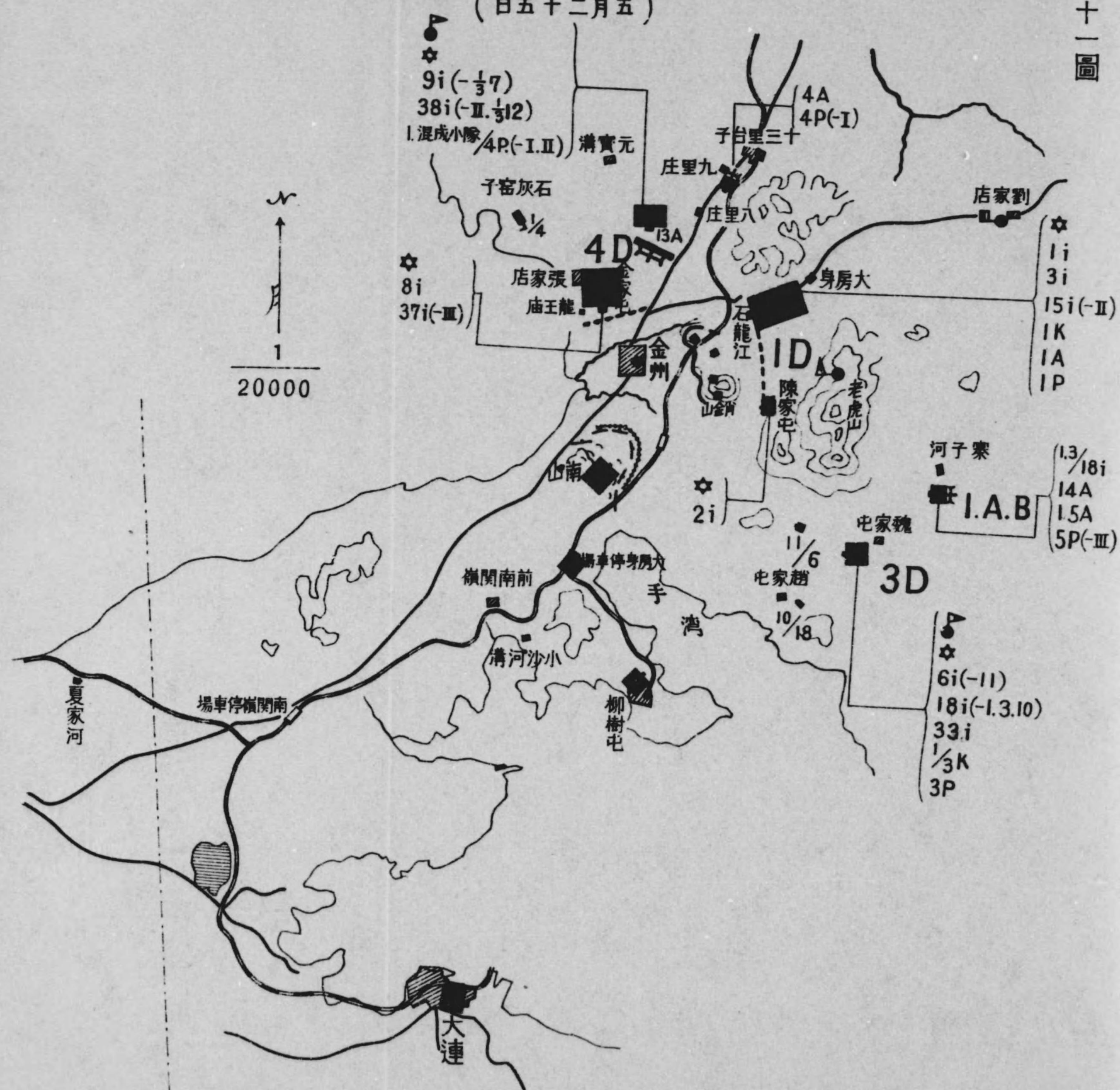
此日砲兵の一部は豫定の如く金州及南山に向つて緩徐なる射撃を開始するや、金州城より二門の速射砲と南山の重砲とを以て應射し、我が砲兵は間もなく射撃を中止したが、敵は夕刻に至るまで射撃を斷續し我は多少の損害を受けた。此日支那人數名、露軍砲兵の爲射彈觀測の信號をなしつゝあるを發見し之を捕へた。爾後其方面の射撃は中止さるゝに至つた。

軍司令官は艦隊の砲撃を豫期する能はざるべきを考へたが、然し其如何に拘はらず、斷然本二

圖要置位力主軍二第近附州金

(日五十二月五)

第十一圖



十五日夜より第二期の行動に入り、明二十六日拂曉南山の敵を攻撃するに決し、午後三時三十分左の要旨の命令を下した。

軍攻撃命令の要旨(第十圖参照)

- 一 各師團は現在の陣地を固守し明二十六日午前四時三十分を期し左の線に展開し爾後各攻撃計畫要領第三期に示す如く攻撃すべし
 - 第一師團 金州東南角より七里庄南方約五百米に互る線
 - 第四師團 第一師團の右翼に連繫し金州北河河口附近に互る線
 - 第三師團 第一師團の左翼に連繫し吳家屯を経て韓家屯に互る線
 - 但し金州城は本夜半までに第四師團之を攻略すべし
 - 二 全砲兵は午前四時三十分より射撃を開始し歩兵の前進を援助すべし
 - 三 軍總豫備隊は今夜大房身に位置し明日午前三時三十分背金山北麓に到るべし
- 斯くて各部隊は第十一圖の如く二十五日の位置に於て愈、同夜より攻撃行動を開始することとなつた。

小評論

金陵圍城第二軍進攻

(五月二十五日)



イ 軍の攻撃計畫要領に就いては大體に於て適當であると思はれるが、敵の兵力は、地形から觀ても情報から推斷しても左程大なるものではない。故に敵の出撃に對しては大なる心配はない、寧ろ工事なき地に於て戦ふは我の欲する所である。唯工事が相當堅固であるのと比較的重砲を多く配備して居るらしいから、之に對する注意を周到にし、砲兵の使用、歩兵の前進法、障礙物の破壊、超越法等に就き慎重なる考慮を廻らし、歩、砲の協同に注意して攻撃を實行することが必要である。此見地から最初より多數の歩兵を狭小なる戦線に濃密に投入する如きは慎まねばならぬ。又軍司令官としては、戦闘開始後の不意の變化に處する爲、比較的尙ほ大なる豫備隊を控置するを可なりと信ずる。此豫備隊は之を集結して決戦方面に使用する如きは此場合敵情、地形の觀察上公算が少ない。故に各師團より一部隊を軍司令官の直轄即ち總豫備隊として分割するを適當と考へる。

ロ 二十五日の砲戦中清國人が露軍砲兵の爲、二箇所にて觀測信號をなしつゝ、あつた事實は、他にも其例が少くない。將來も此種の件に就ては敵の利用を監視すると共に、我としては巧みに之を利用するの著意も無用ではあるまい。

三 南山陣地攻撃實施

イ 五月二十五日夜襲の概況(第十二圖参照)

夜襲の部署 第四師團は、軍命令によつて、二十五日夜半までに金州城を攻略して翌二十六日に於ける軍總攻撃の爲にする展開線に就かねばならぬ。そこで師團長は午後六時三十分次に次の部署を爲した。

- 一 歩兵第十九旅團(第九聯隊第二大隊及第三十八聯隊第二大隊欠)は本夜半までに金州城を攻略し爾後一部隊を該城内に止め主力を以て明二十六日午前四時三十分を期し第一師團の右翼に連繫し金州城西南端に互る地區より南山北面の敵に向ひ攻撃を開始せしむ
混成工兵一小隊を附す
- 二 歩兵第十九旅團金州城夜襲の際第一線に在る歩兵第三十八聯隊は北方より敵を牽制せしむ
其他の歩兵の大部を以て明日午前四時三十分歩兵第十九旅團に連繫する如く金州城西南端附近より其以西に展開し攻撃を開始せしむ
- 三 砲兵第四聯隊及第十三聯隊は明日午前四時三十分より射撃を開始せしむ

又、城壁の攀登に便ならしむる爲、木梯、繩梯等を準備し、工兵各中隊から選抜して混成一小隊を編成し多くの爆薬を携へしめ之を夜襲部隊に附したのである。

却説夜襲の命を受けたる歩兵第十九旅團長は、午後八時三十分之が部署を定めた。即ち歩兵第三十八聯隊第一大隊をして午後九時三十分現在地を發し金州城南方小川の線を占領して南山の敵に對し金州城攻略部隊の掩護に任せしめ、又同聯隊第三大隊に工兵小隊を附屬して之に續行せしめ、金州城の南門に到り、工兵の爆破を待ちて城内に進ませしむることとし、又歩兵第九聯隊(第一、第二大隊欠)をして歩兵第三十八聯隊第一大隊に連繫して海岸に至る間を占領せしめ、殘餘の歩兵第九聯隊第一大隊を豫備として金州城西北森林中に位置せしめた。

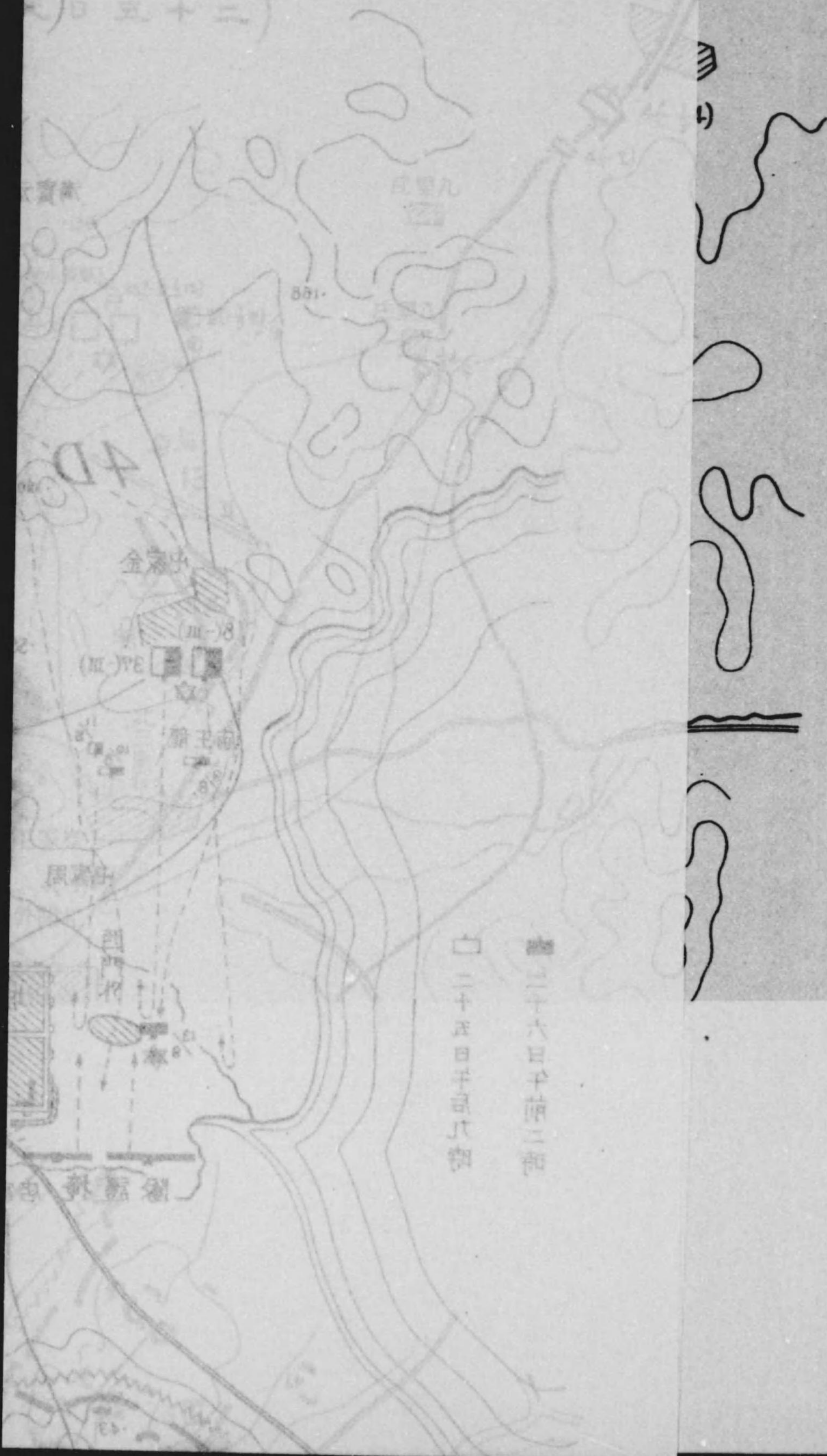
夜襲の實施 歩兵第三十八聯隊第一大隊は、豫定の如く午後九時三十分八里莊西方の集合地を發し、第三、第四、第一、第二中隊の順序に縱隊を以て前進し、午後十一時少しく前金州城北方高地に達した。然るに敵の發見する所となり、城壁から射撃を受けた。然し大隊は流石に之に應射することなく、二十六日午前一時所命の地點に達し、直に防禦工事に著手した。然るに此前進途中に於て第四中隊は暗黒の爲に西方に分離し連絡を失つた。夜間行動に有り勝ちのことであるが、訓練と注意とを要する。此夜は、陰雲暗澹として眞の暗で咫尺を辨ぜざる有様であつた。

攻略隊たる第三大隊は第一大隊に續行し第十一中隊の一小隊を先頭として工兵小隊、第十一中隊主力、第九、第十、第十二中隊の順序で前進した。金州城西門外で其南方二百米の地點で分進し金州城の西南角に近接するや第一大隊方面に激しい銃聲が起ると共に間もなく城内の敵から十米の近距離で城壁上より烈しい射撃を受け、爲に數名の死傷者を生ずるや、一部は直に之に應射した。此應射は果して適當なりや否や斷定の資に乏しいが、原則としては應射することなく他の部隊即ち第十一中隊、工兵小隊及第九中隊の一小隊が實行した如く駈歩を以て城壁の南側に沿うて急進した方がよい。大隊長は最後尾の第十二中隊を率ゐて南門に向ひ前進し工兵小隊長に南門破壊の爲偵察を爲さしめた。之と同時に西南角附近に在る第九、第十中隊を招致した。時は已に夜半となり攻略すべき所命の時刻が遠慮なく経過しつゝある。然るに此頃天候は益々險惡を加へ遂に大雷雨に暴風を加ふるに至り、加之南山の敵壘からは頻りに火箭を揚げつゝ我に向つて砲撃を加へた。城壁上よりの小銃火も益々猛烈となつた。従つて我が死傷續出し、爲に一時隊伍も混亂の狀を呈した。併し幹部の努力によつて再び兵力を集結し勇を鼓して南門の城壁下に迫つた。旅團の豫備から第四中隊が第一線に送られ、一意工兵の爆破を待ち焦れつゝあつた。

爆破の失敗と夜襲の不成功 此時工兵小隊長は、頭部に負傷して居たに拘はらず、爆破を敢行

すべく、城門に近接するや、再び腕部に負傷した。工兵下士官之に代つて實施せんとするや、又敵弾に斃れた。是に於て第九、第十中隊は南門の敵に向ひ猛烈に射撃を加へて之を牽制し、其瞬間に乗じて他の工兵下士官が爆破することになつた。然るに此下士官も負傷した。剩へ大雨の爲導火索及全部の爆薬が悉く濡れて用を爲さなくなつた。嗟乎天なるか將た注意の不足か。大事空しく去らんとす。已むを得ず用意して携行した梯子を以て攀登を試みんとした。圖らざりき梯子短くして壁上に及ばずとは。所命の時刻は早く過ぎて午前二時三十分に至り、策の施すべきなしといふ悲況に陥つた。

嗟乎退却 旅團長は是より先午後十一時頃豫備隊と共に金州城西北森林に於て攻略隊の成功を期待しつゝあつたが、該方面に當つて激烈なる銃聲を聞くのみで何等成否の報告がない。斥候の派遣によつて攻略隊が活動中であることを知つたが、銃聲は益々烈しくなり、砲聲をも耳にするに至つたので、豫備隊を率ゐる金州城西方地區に前進した頃攻略隊の苦戦中であることを知つた。依つて豫備隊から更に第二中隊を増援せしめたが、一般の状況は不利であり奏功の見込がない、損害は益々増大するのみであると做して攻撃を中止するに決し、各隊は金州城西北森林に向ひ退却すべきを命じた。依つて攻略隊たる第三大隊は新に到着せる歩兵第九聯隊第二中隊の收容する所



となり退却に就いた。此退却途中、暗黒の爲に、歩兵第七旅團の前進中なるものと遭遇し隊伍の混雜を生じたが、午前四時三十分所命の地點に集合した。

小評論

此夜襲をなさしめた可否に就ては後に論ずることとし、實施部隊として研究して見る。

イ「偵察や計畫は注意周到なるを要する」と言ふ平凡なる言葉が威張り出されても致し方があるまい。爆薬が駄目、導火索が無効、梯子が短い、之では折角の勇敢なる動作も犠牲に終り、無駄となる。注意すべき教訓である。

ロ 南門爆破が不成功となり、梯子も短くして用を爲さずとも、何とか任務達成の他の應用臨機的手段はなかつたであらうか。方面を變へて人梯を應用するか、木梯と繩梯をつなぎ合はすとか、他に何等か施すべき手段を講ずることが可能ではなかつたかを想ふのである。

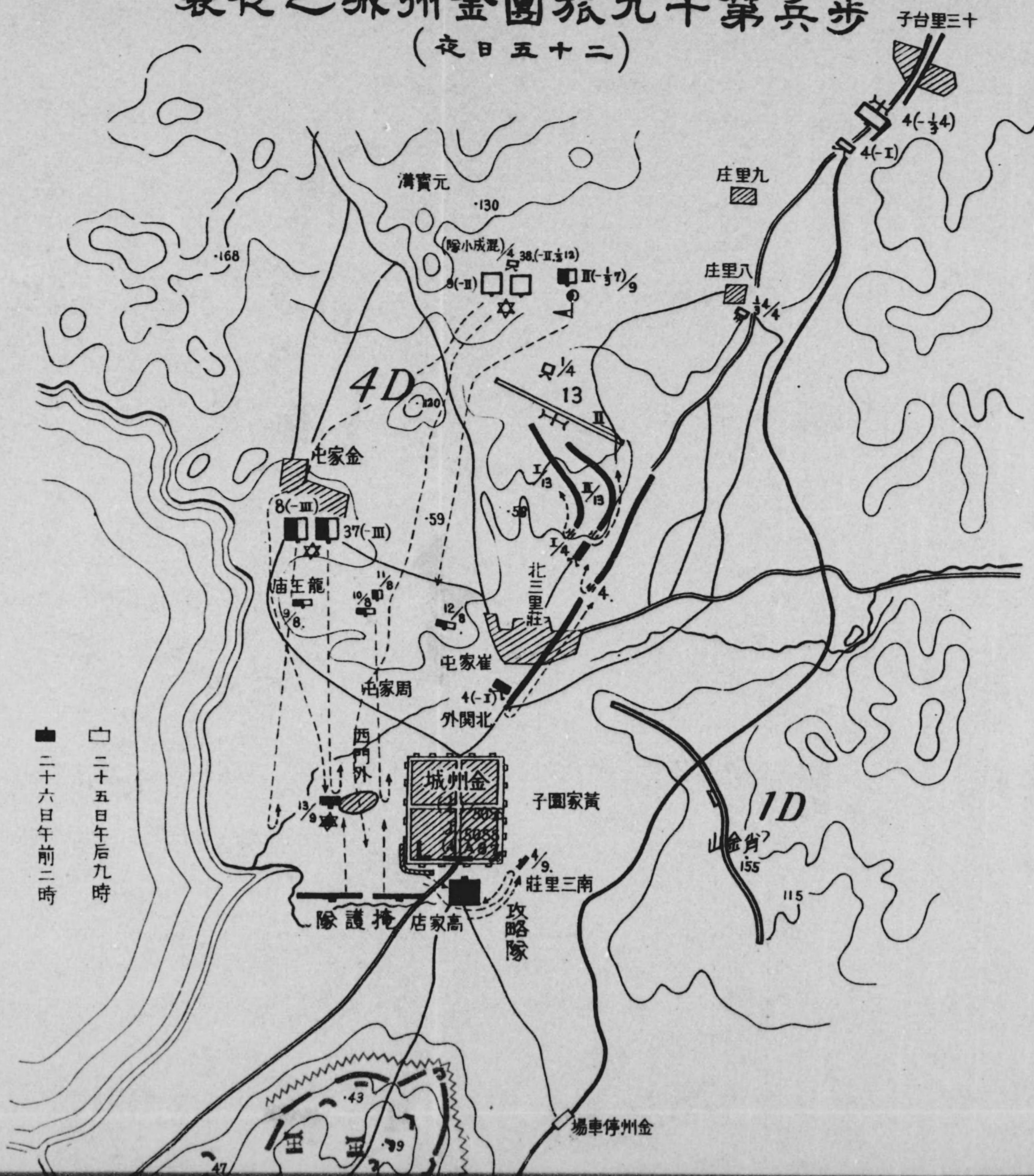
ハ 夜襲に於ては、既に攻者が激烈なる小銃戦を暗黒中に於て交へざるべからざるに至つたとき、多くは其不成功を意味するものである。何となれば可及的否を殆んど絶對的應射をなさざるを原則とするからである。

第一師團の一部金州城攻略 師團右翼隊たる松村少將の指揮する部隊は、二十五日午後十時よ

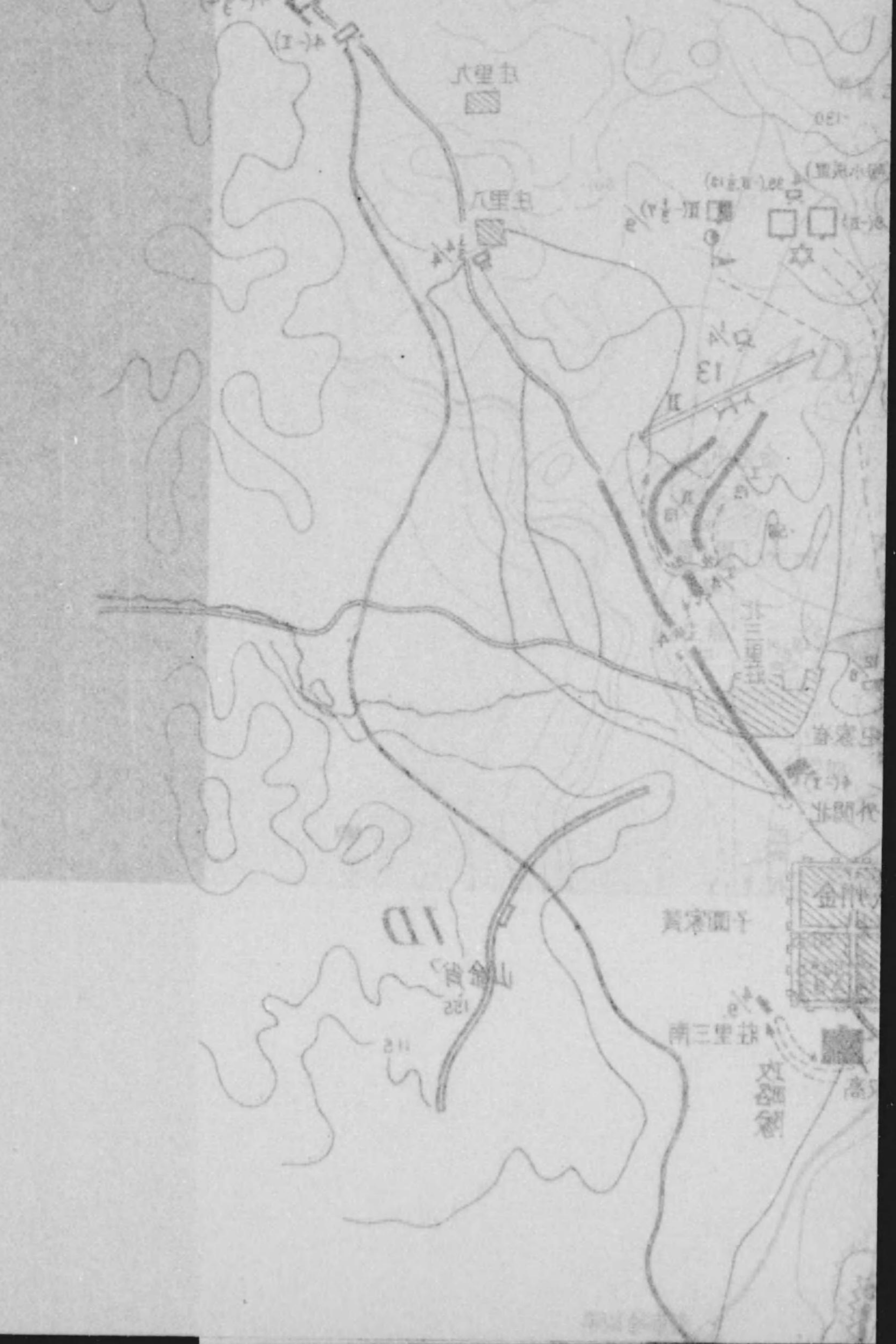
步兵第九旅團金州城之夜襲

(夜日五十二)

第十二圖



金州城東北高地より背金山南麓に互る線を占領して第四師團の金州城攻略を待ち
つゝあつたが、二十六日午前一時に至るも情況が不明である。依つて更に前進し金州城東門に通
ずる道路を進み午前三時四十分先頭を以て東崔家屯附近に達するや、城壁上から約一中隊の敵の
射撃を受けた。是に於て松村少將は歩兵第一聯隊(第二大隊、第十一、第十二中隊欠)、機關砲六
門及工兵第一中隊を以て之を攻撃せしめた。工兵中隊は敵弾を冒して東門を爆破するに成功する
や、更に續いて其内門をも破壊し、午前五時二十分第一線歩兵は直に東門に向ひ突入した。是に
於て城内に在つた約三百の敵兵も南山に向ひ潰走した。斯くて金州城は第四師團で失敗したが第
一師團で成功したので、軍全般の計畫には別段の支障なく経過せしむることが出来たのである。



り運動を起し、金州城東北高地より背金山南麓に互る線を占領して第四師團の金州城攻略を待ちつゝあつたが、二十六日午前一時に至るも情況が不明である。依つて更に前進し金州城東門に通ずる道路を進み午前三時四十分先頭を以て東崔家屯附近に達するや、城壁上から約一中隊の敵の射撃を受けた。是に於て松村少將は歩兵第一聯隊(第二大隊、第十一、第十二中隊欠)、機關砲六門及工兵第一中隊を以て之を攻撃せしめた。工兵中隊は敵弾を冒して東門を爆破するに成功するや、更に續いて其内門をも破壊し、午前五時二十分第一線歩兵は直に東門に向ひ突入した。是に於て城内に在つた約三百の敵兵も南山に向ひ潰走した。斯くて金州城は第四師團で失敗したが第一師團で成功したので、軍全般の計畫には別段の支障なく経過せしむることが出来たのである。

小評論

計畫的に實施したる第四師團の夜襲は不成功に終つた。之が爲、第四師團は勿論、第一師團の豫定の展開に大なる支障を生ずるであらうことは、必然である。若しさうなれば軍の攻撃は豫定を變更せねばなるまい。然るに、第一師團の右翼隊では、情況が不明の爲、獨斷前進を起し、偶發的情況に應じ、豫め深く準備して居らなかつたに拘はらず、而も大暴風雨にも屈せず、工兵は立派に城門を敵弾下に爆破し、恰も行き懸けの駄賃と云ふ工合に軽く金州を

乗り取り第四師團方面の下手際を償ひ得たことは、感謝せずばなるまい。戦闘中には種々豫期せざる災難もあり又幸福もある。而して之が不可抗力のものもあり、可抗力のものもある。金州城攻略に關する限り兩者の對照に於て其何れに屬するかを一應顧みたらば思ひ半ばに過ぐるものがあらう。

□ 攻撃實行(第十三圖参照)

自午前五時 至午前九時

午前五時過ぎ辛うじて目標を認め得るに至るや、野戰砲兵第一聯隊第五中隊は歩兵第一聯隊の金州城攻撃に協力した。此協力は榴彈僅かに三發を射撃したのみであつたが、之が砲撃のトツプとなり、次で砲兵第十五聯隊が射撃を始め、更に全砲兵百九十八門は各其配當せられたる目標に對し射撃を開始した。敵砲兵も亦應戰に努め、爲に砲聲殷々として天地を震撼せしむるの感があつた。彼我共に其射撃は概ね正確で、殊に敵の速射野砲の如きは其發射速度迅速であり、射程は遠大であり、我が野砲の及ばざる所であつた。敵の砲数は大小五十餘門を算するが中には有煙火薬を使用する爆發力の弱い舊式砲も交はつて居た。然し敵は天險に加ふるに人工の防禦設備をして居るし、我が砲兵を瞰制する有利なる位置に在つたので、我が砲火の効力は隔靴搔痒の感を懷

かしめ遺憾であつた。

金州城攻略に失敗したる第四師團も午前六時に至り砲兵の援助によりて其退却せる集合地から前進を起した。第一、第三師團は豫定の展開線に在つて命令一下直に前進の準備に在つた。

恰も此の時、我が艦隊(砲艦筑紫、平遠、赤城、烏海及第一水雷艇隊)は金州灣に現はれ南山砲臺に向つて砲撃を加へた。此海陸兩方面よりする我が猛射の爲午前八時頃に至り敵砲火は大に衰へた。

軍司令官は此時分には第四師團夜襲の失敗を知らなかつたが(實際知り得たのは午後十一時頃であつた)、歩兵攻撃前進の好機なりとして、基軍團隊たる第一師團に對し午前八時二十分前進の命を下した。師團は其第一線歩兵を以て驀然前進を開始した。兩隣接師團も亦之に連なり一進一止躍進する有様は恰も練兵場に於ける運動を観る如く整然として堂々たるものであつた。

自午前九時 至午後一時

軍司令官は朝陽寺の高地上に在つて一般の情況を視察しつゝあつた。午前九時頃第四師團の第一線は西南窪南方附近、第一師團の第一線は趙家樓附近から閻家屯附近に互り、又第三師團の第一線は麥家屯及柳家溝の線を越えて前進中である。又砲兵は歩兵の攻撃前進に伴つて逐次陣地を

前方に變換中である。爆煙は蕞爾たる南山の敵陣を覆ひ山形改まらんとする光景である。此時、基準師團たる第一師團は最も敵に近接し敵陣の最も堅固なる部分に向ふの苦戦なるべきを察し、軍司令官は午前九時十分軍豫備たる歩兵第三聯隊中第二大隊を残し其他を第四、第一師團の中間の空隙に増加して第一師團長の隷下に復した。

斯くて午前十時三十分軍司令官は肖金山に位置を進めた。戰場一帶眼下に在り各團隊の奮戦の狀態悲慘の光景手に取る如くに眼裡に映ずる。時恰も第三師團は南山と大房身南方高地の敵歩、砲兵から側射を受けて苦戦の狀況に在るを知り、午前十一時に残置しありたる歩兵第三聯隊第二大隊(第六中隊欠)をも同師團長に與へた。故に同時以後軍司令官の手裡には歩兵一中隊の豫備を有するのみであるから、爾後は兵力を以て攻撃の進捗を促すことは出来ない譯である。

斯くて午後一時頃まで各師團共攻撃進捗に努力したが、損害を加へるのみで、大なる發展の様もなく、大體に於て敵の鐵條網前二百米以内には入れぬ。其の上、第三師團方面では敵の砲艦一隻龍瓜山西方に現はれ師團の側背を射撃した。加之、正午頃になるや敵の砲艦から師團の側背に上陸を開始し徐家屯附近の彈藥縦列及王家甸子附近の野戦病院が襲撃を受けたとい報告を受けた。當時師團長は手裡に騎兵一中隊と工兵一中隊が残存するのみであつた。師團長は此兩部隊を

直に該方面に派遣したが、敵襲は誤報であり、僅かに斥候らしきものが上陸したに過ぎざることが判つた。要するに各師團共狀況發展せず苦戦中であつた。

自午後一時 至戰鬪終局(午後八時頃)

軍司令官は肖金山に在りて午後一時に至るも尙ほ 師團の攻撃が進捗せざるに焦心し、斷乎として攻撃を續行するに決し、午後一時三十分左の意味の悲壯なる嚴命を下した。

第一師團は如何なる困難あるも攻撃に前進すべし

第三、第四師團は之に連繫して攻撃すべし

此嚴命が下つたに拘はらず、各師團が勇敢に突撃を繰り返したに關せず、其都度慘澹たる不成功に終るを見たる軍司令官は、漸く憂色が加はつた。幕僚の内には攻撃を中止して後圖を策するなどの意見も出たと云ふことである。軍司令官も此日中に或は攻撃の奏功必ずしも期し難く狀況の變化亦知るべからざるを顧慮し、午後三時過に至り第十一師團長に命ずるに上陸するに従ひ逐次金州に向ひ急行すべきを以てした。當時第十一師團は五月二十四日から上陸を開始し二十六日夕刻までに歩兵三大隊半を揚陸した。軍司令官の智囊も其心事や察するに餘りある。然るに午後五時頃に及ぶや敵兵我が第三師團の左側に迫らんとする狀況が加はつた。砲彈は將に盡きんとす

る、日没も眼前に迫つて来た、指揮官の心中果して如何。進むべきか、將た退くべきか、軍司令官は最早一部隊の前線に與ふべき餘裕もない。併し決心に曰く「斷然歩兵を以て強襲せんとす」。乃ち令を各師團長に傳へ決然突撃を敢行せしめた。

第一師團

師團長、は午後一時四十分軍司令官よりの嚴命を受くるや、兩翼隊に命じ損害の如何を顧みず攻撃を斷行せしめ、騎兵第一聯隊をして金州城東南面に在りて戰鬪參與の準備に在らしめ、師團豫備たる歩兵第一聯隊第二大隊を七里莊西方七百米の凹地に前進せしめた。

壯烈なる突撃の反復 兩翼隊は突撃準備を整へた。右翼隊は突撃隊を區分し金州城―大房身街道上の鐵條網なき部分から四列側面縱隊で突撃するに決し、午後三時三十分右翼隊長は突撃の喇叭を吹奏せしめた。歩兵第一聯隊第一突撃隊たる約一小隊の決死隊は干家屯南端から躍進を起した。然るに五、六十米も進まざる内に皆倒れた。先頭に在つた最も勇敢な二、三の兵が鐵條網の近くにて斃れた。いざ第二突撃隊(約一中隊)である。勇躍突進を始めた。然し後尾がまだ干家屯南端を離れざる間に皆倒れてしまつた。聯隊長は續いて軍旗を翻しつゝ、第三突撃隊(約一中隊)の先頭に立ちて勇進した。忽ち副官が斃れ、旗手も傷き、代りたる旗手も亦傷き、軍旗は轉々代

りて捧持せられ遂に一下士官によりて護らるゝに至り、續いて聯隊長も負傷した。斯くて三回に互る突撃は不成功に終つた。然し此間師團の第一線は一步、半歩と前進を續け、敵前五、六十米にまで近接した。右翼隊長松村少將は此悲壯なる突撃實行間、勵聲疾呼

天皇陛下の御爲めである、前へ前へ

と激勵したが、右の如き不成功に終つたとき將兵の心中や察するに餘りありである。是に於て右翼隊長は一時突撃を中止し更に砲兵射撃の成果を待つに決し、七里莊西方高地に在る砲兵第一聯隊第一大隊に要求するに榴彈を以て敵の第一線を射撃すべきを以てした。

歩兵第三聯隊(第二大隊欠)も右翼隊長の命に基き前記歩兵第一聯隊と共に突撃を実施する爲第三、第十二中隊を突撃隊となし、其他の部隊は全力を擧げて射撃を以て突撃を援助することとなつた。午後三時援助射撃は猛烈に行はれ、之に推進せられつゝ、兩突撃中隊は突進を始めた。然るに其鐵條網に達せざる前、兩中隊長以下將校は全部斃れ、下士官以下も過半死傷し、僅かに四、五名の者が最も勇敢に進み或は早駈にて或は匍匐して辛うじて鐵條網に潜入し、將に散兵壕に迫らんとするまでに至つたが、可惜終に斃れた。斯くして此聯隊の突撃も不成功に終り、更に時機を待つこととなつた。

右翼隊の左に連繋せる歩兵第十五聯隊（第三大隊欠）も、兩大隊全部を展開して突進を試みたが、忽ち多大の損害を蒙り敵鐵條網前近距離の地隙に停止した。

左翼隊の諸隊も大體同様な状態で、敵に近く停止するの已むなき有様であつた。

第一師團諸隊は斯くして一般に多大の損害を蒙り而かも突撃は何れも不成功に終つたが、爾後砲兵の近距離よりする榴彈射撃により鐵條網、機關銃等の破壊は相當の効果を奏した様であつた。時刻は漸次に移り、彼我尙ほ對峙して動かざること數時間、恰も午後七時頃になり、第四師團の右翼方面が敵の左側に迫るや、敵は一般に動搖の色が見え、其一部は退却を始めた。此狀況を知るや砲兵及機關砲は益々射撃を盛にし、兩翼隊は一齊に敵陣に突入した。併し敵は抵抗したのではなく、已に空巢であつた。斯くて午後七時二十分南山を占領し萬歳の聲天地を震撼しつゝ、日章旗は高く樹立せられた。師團の豫備隊たりし歩兵一大隊、騎兵聯隊は南山南麓まで敵を追撃し、砲兵四箇中隊も亦南山に進出して退却する敵を射撃し、午後八時敵を目視し得ざるに至り各隊は其占領地附近に於て隊伍の整頓をなした。

第四師團

此師團の突撃も多くの死傷者を生じて目的を達し得なかつたので、午後三時頃以後、敵陣二、三

百米前方に於て停止し、砲兵も彈藥缺乏の爲射撃を中止した。然るに午後五時十五分攻撃前進に關する軍司令官の嚴命が到着した。そこで全滅を賭して突進し午後六時三十分敵の第一線前方百五十米にまで接近した。此時頃我が砲火特に艦砲射撃の威力に依つて敵兵動搖の色あるを看取し第一線は鐵條網を破壊して突入し、午後八時敵陣地を占領した。

第三師團

此師團も苦戦の後、午後三時頃に至るや歩兵は全部第一線に増加せられ、推進すべき餘力もなき有様となつた。依つて師團長は軍司令官に報告して曰く、

今や師團は一步も前進すべからざる苦境に立つ、爾後の動作は他師團の奏功を待ちて之に伴ふか或は夜暗を待ちて強襲するかの二途あるのみ

軍司令官も之に對し奈何んともする能はず、乃ち答へて曰く、

戦鬪を持續し當面の敵を牽制すべし

次で、夕刻に至り當面の敵の退却するや敵陣に突入し、午後八時三十分敵陣地を占領した。

ハ 敵陣地占領後

各師團が南山陣地に突入した時は既に夜暗に入らんとする頃であつた。依つて其夜は現在地附

近に停止するに決し、午後八時之に關する命令を下し、軍司令部は肖金山に宿營した。
 此戰鬪に参加した我が軍の兵力及死傷は次の如くであつた。

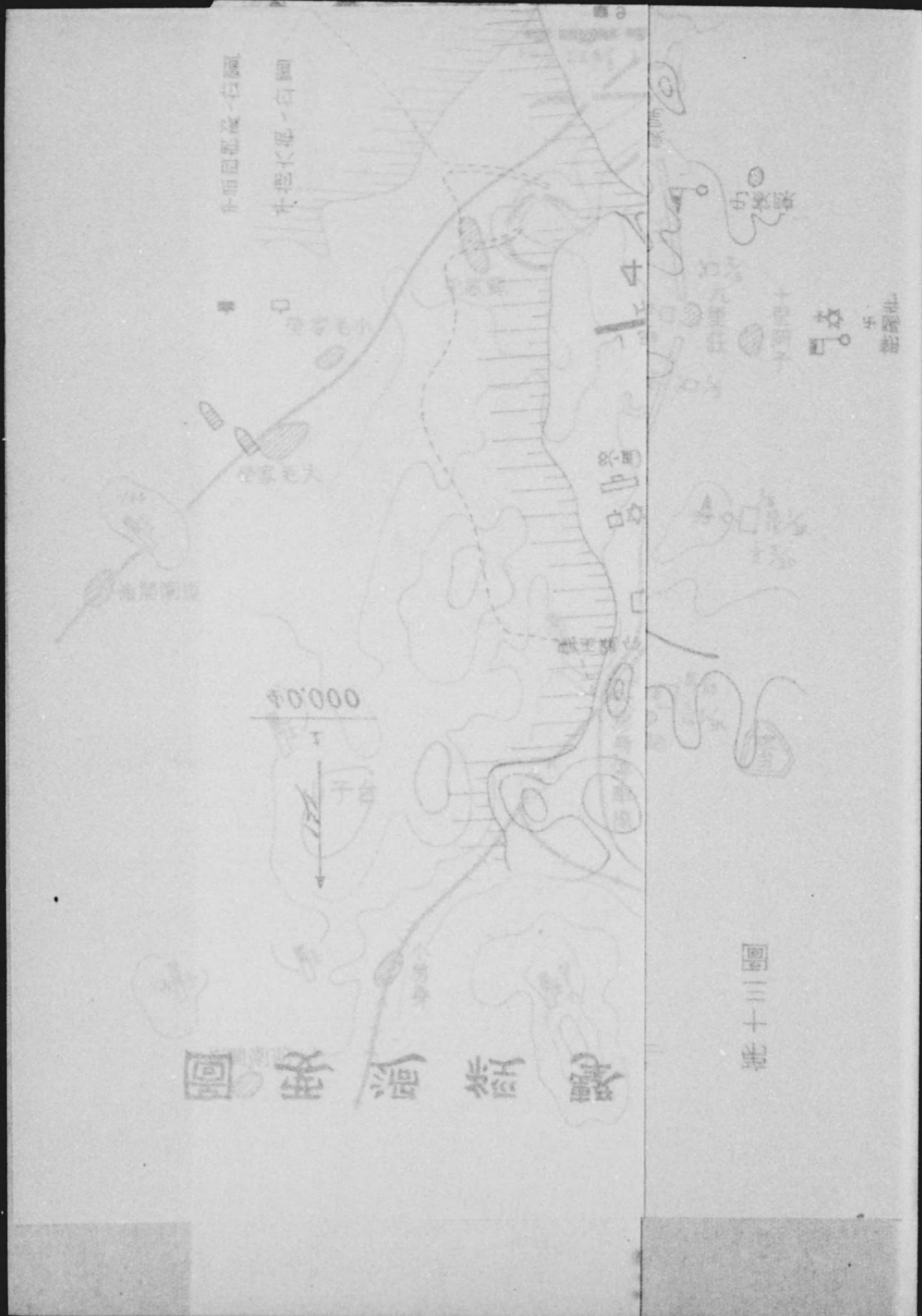
歩兵	三十一大隊	戰鬪總員	三萬六千四百
騎兵	五中隊	死傷 將校以下	四千三百八十七
野砲	百九十八門	第一師團	一一八六
機關砲	四十八門	第三師團	一三五九
工兵	十二中隊	第四師團	一六七〇
		砲兵旅團	六二

二 露軍行動の大略

南山附近一帶の露軍はフォーク少將の指揮する一支隊で、其兵力歩兵約十六大隊、野砲五十四門、要塞砲七十七門を有したが、南山陣地に配備して我に對戦したものは

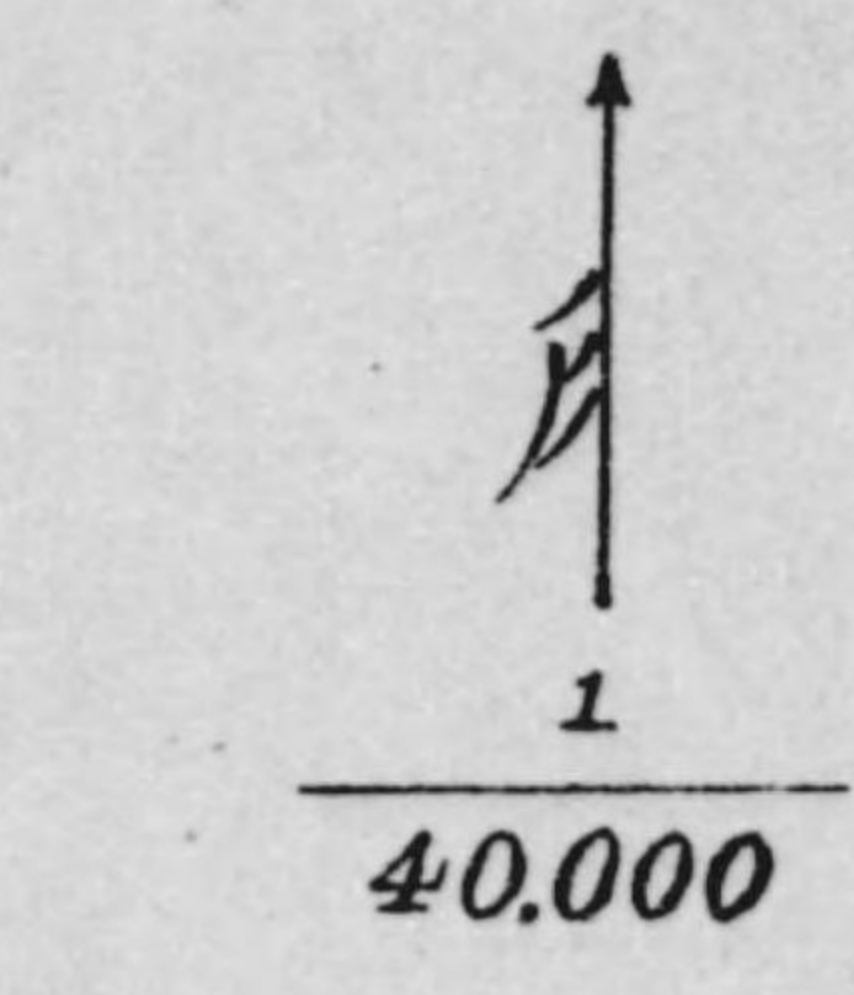
歩兵	約二十中隊
砲	約六十門
機關銃	十挺

に過ぎぬ。其他は南關嶺附近に控置して戰鬪には參加して居らぬ。但し陣地は五十日間位かけて

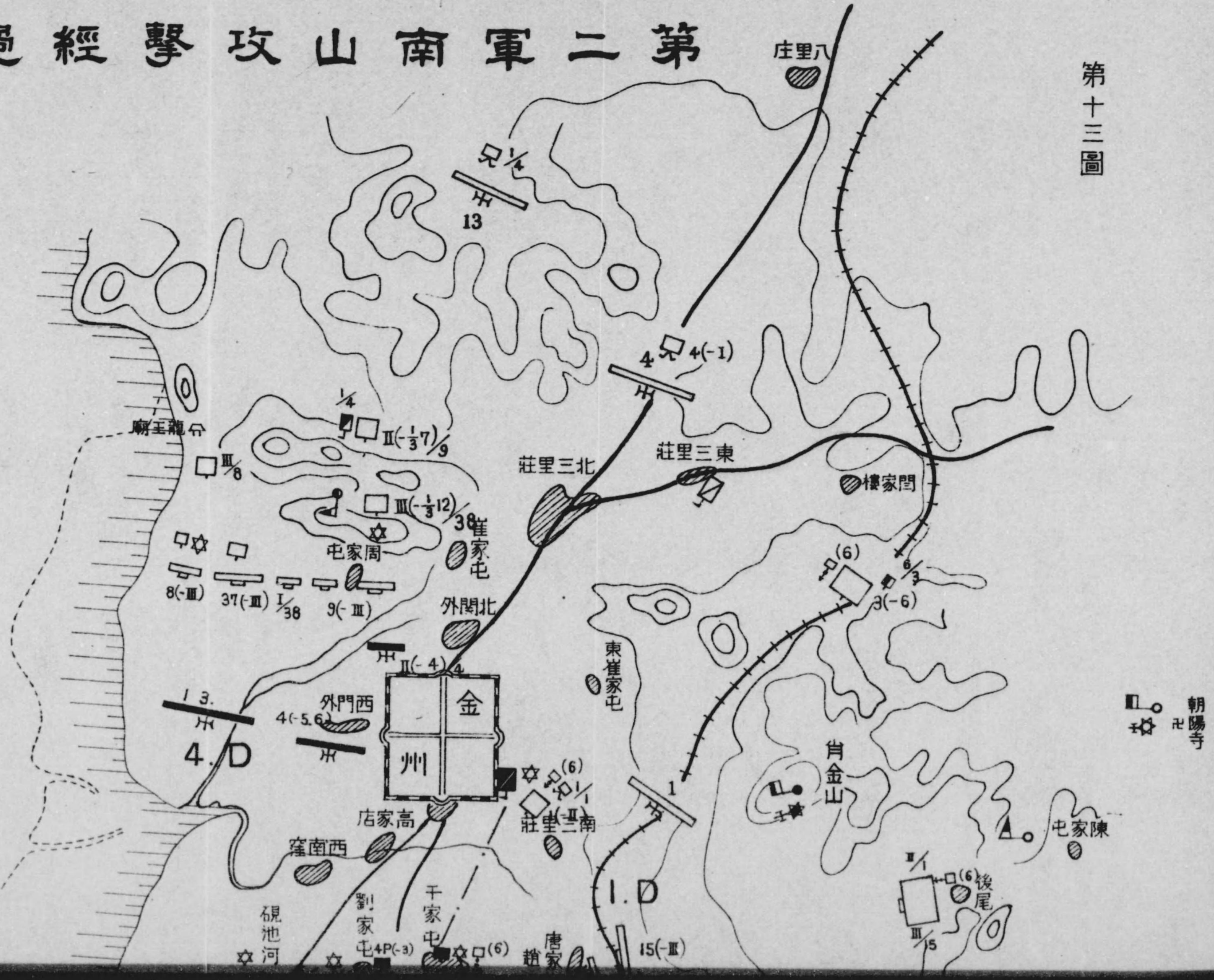


第二軍南攻山經要圖

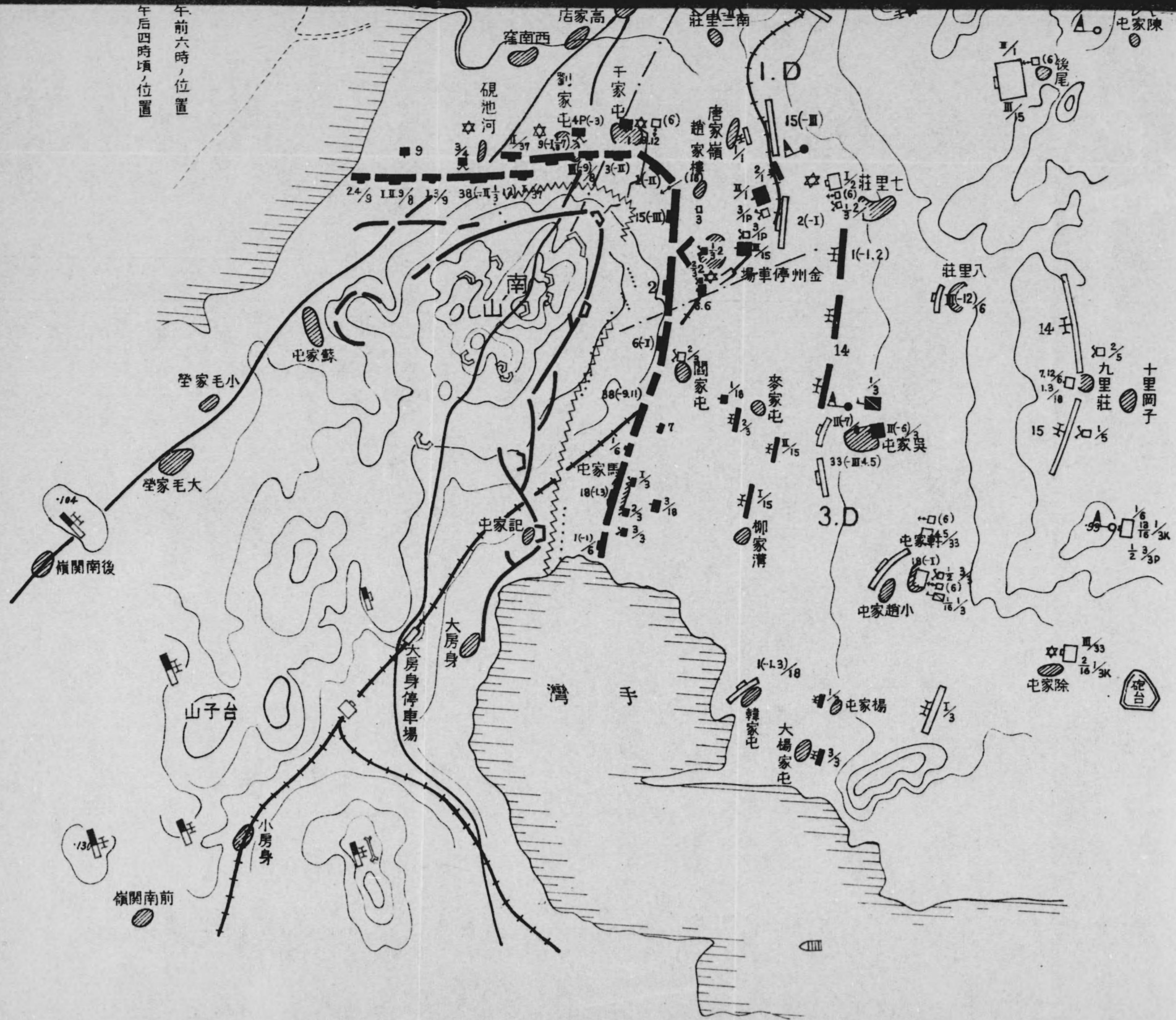
第十三圖



午前六時ノ位置
 午后四時頃ノ位置



午前六時ノ位置
午後四時頃ノ位置

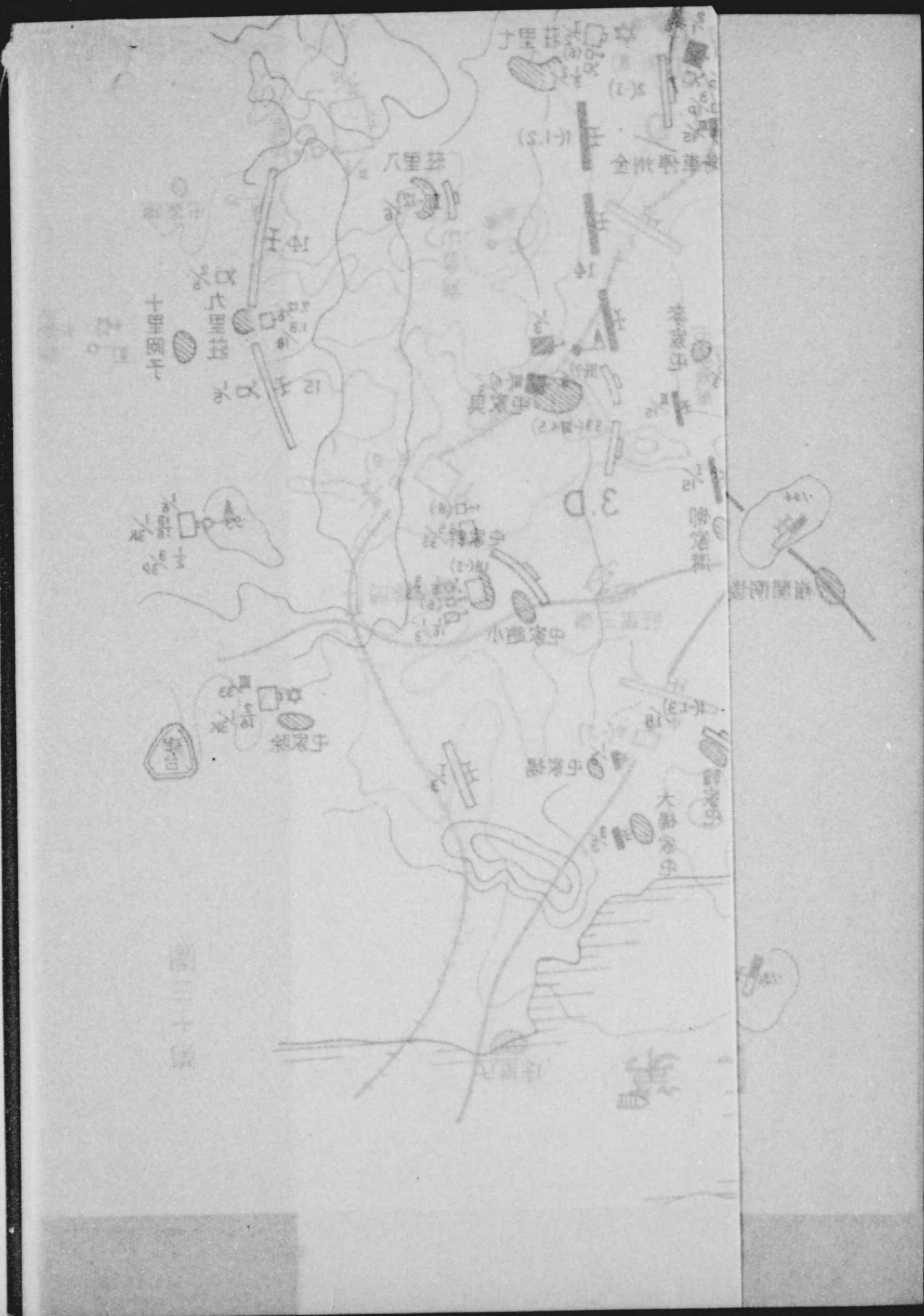


構築したもので、相當堅固であり、自から稱して難攻不落と謂つて居つた程である。而してフォルク少將の任務は成るべく敵に大なる損害を與へた後に要塞地帯に退却するに在つた。然らば彼は全體に於て其目的を達したものであらう。

五月二十五日夜より二十六日の戦闘に於て日本軍殊に艦砲の射撃に依り午前中露軍砲兵は沈黙せるも、午後に入り日本砲兵は彈藥盡き砲火衰へ突撃は悉く撃退せるを以て、露軍の爲には有利なる状況を呈した。然るに午後四時頃より日本砲兵は彈藥の供給を受けたるもの如く、砲火を熾にし突撃を再興した。午後六時頃には露軍最左翼方面は敵の逼迫を受け此方面の守兵の退却は一般陣地の瓦解を見るに至つた。

露兵は全く潰亂して敗走し大部は旅順街道を取り日没より夜半に至るまで南關嶺附近の通過に非常なる混雜を生じ、日本兵の現出を恐れ非常なる恐慌を生じ友軍互に相撃つの混亂をも起した。實際は日本兵の追撃なかりしも其砲兵が大房身停車場方向及南山陣地の背後を射撃せるにより多大の損害を蒙つた。爲に第一線に於ける損害以上に犠牲を供するに至つた。斯くてフォルク支隊の全損害は一千三百餘に達した。

小評論



一 露軍は其任務上、早晚退却するものである。故に之が爲の準備はしてある筈であるにも拘はらず、其退却には非常に混雜を極め友軍相撃つの醜態すら惹起したのである。由來退却には巧妙なりと稱せらるゝ露軍でも斯の如く困難を來すことに想到すれば、大軍の退却の如き實に名狀すべからざる危険を包藏するものなることを忘れてはならぬ。

二 退却の困難以上の如しとすれば、勝者としては必ず萬難を排して追撃を強行するの效果大なるを想はなければならぬ。此際若し一部隊丈けでも夜間の追撃を敢行したならば露軍の混亂や損害が更に如何に増大したであらうかを考ふるとき、實に惜しいことであると痛感する次第である。然し激戦苦闘斯の如き状態の下に豫備隊も盡きたる際猛烈なる追撃を實行することは、事實に於て至難である。之は精神上の影響が主宰するからである。敗者は夜間でも激戦後でも逃げるに早しとすれば、勝者が追ひかけ得ざる理由は體力即ち有形上の問題でなく、無形上の關係に外ならぬ。即ち吾人は之に打ち克つの修養が必要である。

ホ 自五月二十七日至五月三十一日概況

激戦終了の翌日(二十七日)軍司令官は早朝南山の戦場に到りて視察した。然るに各隊は整頓に熱中して追撃が全然等閑に附せられあるを知り、其直屬たる騎兵小隊をして直に敵を追躡せしめ、

午前八時第一師團歩兵第二旅團長中村少將をして各師團の歩兵一聯隊、騎兵の主力、砲兵一大隊、工兵一中隊を指揮して後南關嶺の北方海岸より後南關嶺の高地脈を経て丁官寨附近に互る線を占領し西方に對し警戒すると共に、遠く旅順、大連方向を搜索し、且一部隊を以て柳樹屯附近一帯の半島を占領せしめ各師團をして其後方に集結せしめた。

二十八日以後諸隊は續いて前進を起し、又新に上陸せる第十一師團も金州方面に到着した。そこで三十一日には第一、第十一師團を以て軍の豫備線たる安子山、磨盤山の線に進め、其他は金州附近に互る間に位置せしめた。然るに三十一日夜に入るや第一師團、第十一師團は第三軍に編入せられたる通報に接した。依つて軍司令官は旅順方面の顧慮を捨て全力を擧げて北進の準備を爲すこととなつた。

四 評 論

一 堅固なる野戦陣地の攻撃

此攻撃に就ては情況と堅固なる程度とに應じて其手段方法を異にすべく、奇襲、強襲、攻撃作業によりて逐次突撃陣地を構成する方法等種々あることは戦術書に教へられある所である。現

今では、所謂「トチカ」の如き敵陣の攻略を要することも周知の事實である。南山攻撃の如きは今より考ふれば、準備に缺け、方法に缺け、唯勇氣をのみ資本として突撃した観がある。鐵條網の破壊も不完全であり、敵機關銃の破壊も出來ず、白晝唯強襲的に敢行したのであつて、「敵が戦闘意思を有する以上到底之を突破することは出來ぬ」と言ふに異論はあるまい。故に之を今日に照らし吾人は貴重なる教訓を味はねばならぬ。蓋し南山戦後幾十年、工事も進歩し火器も進歩し敵線は殆んど機關銃、大小火砲等で充満されて居る、一挺の機關銃でも生存して居る以上其射撃有效地域内の自由通過を許さぬことに想を致すとき、準備と工夫とを積まずして輕舉に無理押しをやつたならば南山の苦き經驗以上の苦杯を嘗めねばならぬことを覺るであらう。

二 豫備隊の使用

僅かに歩兵二十中隊の敵に對し我が百二十有餘中隊を以て攻撃したのである。然るに軍司令官は、戦闘開始後數時間にして豫備の殆んど全部を戦線に投入せしめた、其手裡に實力を掌握せざる軍司令官が爾後各師團の苦戦に對し如何に戦闘を指導し得たかを史的に觀察したならば、其過早の使用であつたことが分明するであらう。

各師團に於ても豫備隊の使用が過早なる觀がある。大體日露戦争の全經過に就て考察しても日

本軍は豫備隊を過早に使用し盡し、露軍は最後まで握り潰して退却の際の役に立つた場合が多い。露軍の使用法に比し日本軍は精神に於て優ること萬々であるが、戰場統帥上再考の餘地あるものと思はれる。

三 金州城攻略

イ 南山陣地を攻撃する爲めに先づ金州城を攻略するを必要とするは勿論である。而して夜襲を以てすることも適當である。然し之に關する命令は尙ほ早く下し以て當該部隊をして可及的準備の時間を得しむることが必要である。然るに軍命令は午後三時三十分以下達せられ師團命令は午後六時三十分、夜襲實施部隊長の下せる命令は午後八時三十分である。而して集合地から金州城南門迄約八軒である。通過路は山地で行進には容易ではない。而かも夜暗の行進であり敵前の行動である。部隊の出發は午後九時三十分であつた。然らば攻略時限たる夜半まで僅かに二時三十分間を有するのみであり、最初から時間的に攻略の至難であり殆んど不可能なるを示して居る。

ロ 金州城攻略の方法としては單に南門とのみ限らず各門を同時に攻撃するを通常とする。而して單に金州城を奪取するのが目的であるから、之が爲めに大なる損害を受けるのは特に避けなければならぬ。故に敵に退路を與へ窮鼠的反撃を爲さしめざることも一法であらう。

第十四　ゴルリッツ突破戦に於ける豫備第四十一軍團の陣地攻撃

南山陣地攻撃の研究に續いて歐洲大戰に於ける陣地攻撃の一例を紹介して近時の陣地攻撃の狀態が如何なるものなるかの一端を窺ふの資に供する。

一　概　説　（第十四圖參照）

イ　ゴルリッツ突破戦の動機

ゴルリッツ突破戦は、大戰第二年即ち一九一五年五月獨第十一軍司令官マッケンゼン大將の指揮下に、獨、塙軍連合で行はれたる、堅固なる露軍野戦陣地の突破攻撃である。開戦以來東方戦場に於ては、獨軍がタンネンベルヒ會戦に於て露軍に殲滅的打撃を與へた如き赫々たる戦績もあるが、塙軍正面では大體に於て不振の状態を續け、大戰第二年の三月下旬頃に至るやガリシヤ方面に於ける戰略要點ブルゼミヌル要塞すらも陥落せしめられ、志氣は阻喪し、

將來如何なる苦境に陥るや測り難きものある實情となつた。そこで塙軍參謀總長コンラード將軍は獨軍の増援を哀求すること頻りであつた。

之に對し獨軍統帥部では、當時西方戦場では戰場膠著して動かす之が發展は當分見込がないと判断したのと、塙軍が解體する様なことがあつては戦局に大なる影響を及ぼすからとの二つの意味で、一時其主作戦方面を東方に轉ずるに決した。依つて主として西方戦場から大なる兵力を抽出して新に第十一軍を編成し、之を東方正面に移し該方面に在る塙第四軍を併せ指揮してゴルリッツ附近の突破作戦を遂行することとなつた次第である。

小評論

獨軍の精銳なることに於て異論を挿む餘地はない。然し塙軍は其國情からしても、軍の素質は宜しくない、露軍に比しても稍劣れるを感ずる。斯の如き素質の國軍と連合する獨軍の苦衷や察するに餘りある次第である。然し、塙軍側の辯護に立つとすれば言ひ分はある。即ち獨軍統帥部では西方戦場に於て一箇月餘の後に英、佛軍を片附けて直に東方に向つて轉向する積りである、故に其期間即ち開戦後二箇月位戦線を確認して居ればよいと謂ふ約束であつた、然るに事志と違ひマルヌの敗戦により半年たつても約束通りに増援兵團が來らぬ有様

である。故に東方戦場の不振は獨軍側にも大なる責任があると言ふ譯である。之は突破戦の直接研究範囲外の事柄であるが、参考の爲一言して置く。

□ 第十一軍の編組、軍隊區分等

一 第十一軍の編組

近衛軍團

豫備第四十一軍團

第十軍團

歩兵第百十九師團

バイエルン歩兵第十一師團

二 第四軍は第十一軍司令官の隷下に入る

但し第十一軍司令官は埃國最高統帥の隷下に入らしめられ、其與へらるゝ重要な作戦命令は獨國最高統帥の同意を経るを要するものとす

斯くてマッケンゼン軍司令官は、ゴルリッツ方面より東方に向ひ露軍陣地を突破すべき指示を受け、次で埃國最高統帥より受けたる命令により、

イ 獨第十一軍(歩兵八師團を基幹とす)に埃國第六軍團(歩兵二師團、騎兵一師團)及所定の重砲を配屬す

ロ 又、獨第十一軍及埃第四軍の統一せる作戦指導は第十一軍司令官マッケンゼン大將の任とす

ハ 軍はゴルリッツ、グロムニツクの戦線を越えて東方に突進しカルバーテン正面の露軍をしてルブコウ峠西方に停止し得ざらしむ

ニ 其他省略

等の諸項が示された。之に基きマッケンゼン大將の採りたる軍隊區分の要旨は次の通りである。

軍司令官マッケンゼン大將

軍參謀長 ゼクト大佐

集成軍團(指揮官バイエルン歩兵第十一師團長クノイスル中將)

バイエルン歩兵第十一師團

歩兵第百十九師團

豫備第四十一軍團(軍團長フランソア中將)

	豫備徒步重榴彈砲	三中隊
塊第六軍團	同一〇種加農	三中隊
	塊三〇・五種臼砲	一中隊

右の外、各軍團は迫撃砲四隊づゝを配屬せられた。

小評論

イ 獨第十一軍と塊第四軍とが第十一軍司令官の指揮下に突破作戦に任ずることとなつたことを觀察するに、連合軍が直接一目的に向つてする作業力は同一國軍が行ふ作業力に比し遙かに薄弱なるを免れざるは古今の通則である。此點から見れば成るべく之を避くべきである。然るにゴルリツツ方面は元來塊軍の受持範圍であり、其正面内に獨軍を交代挿入したのであるから、兩軍が一目的に向つて仕事することも亦已むを得ざる事情にあることも首肯せらるゝ次第である。而して茲に注意すべきは、此突破作戦の主體は獨軍であり之が計畫も實施も獨軍で擔任し、マッケンゼン將軍が直接突破攻撃の指揮を執つたことは、統制上然るべきである。

然るに同地方一帯が塊國の領土であり又作戦地域内であるから、戰略上の指揮權を塊軍最

高統帥に握らしめ、其發令に際しては獨軍最高統帥の同意を経ることとしたのも、適當な實際的處置であると思ふ。理想から言へば、獨軍に於て一切の指揮權を掌握するにあるは勿論であるが、之を獨立國殊に大國の立場として他國軍に全然委するを至難とする事情もある。故に獨軍の採りたる方法は名を塊國に與へて實を自己に握つたのであり、此種の遣り口は大に參考となることと思ふ。

然し茲に注意すべきは第十一軍の中間に塊軍團を混入したことである。之は原則として可及的避けたいものである。事情が許す場合には寧ろ之を塊第四軍の編組内に入れ、第十一軍は獨軍のみとした方がよいのである。但し獨軍が塊の一軍團を混入した事實は他に已むを得ざる事情があつたに違ひないと察せらるゝにより、直に之を非難することは出来ぬ。又兩軍の素質は異なるが、國語を同じくする關係は其害を少くし得たであらう。けれども吾人が若し他國軍と連合する場合には、何れ素質を異にするばかりでなく、言葉、習俗を異にするものであらうから、成るべく方面を異にして作戦せしむる様考慮せねばならぬ。

ロ 又第十一軍の編成に於て看逃すべからざることは、マッケンゼン司令官が突破作戦の成功者として名聲赫々たるものがあつたのは周知のことで、尙ほ塊軍側にも大に評判のよい

將軍である。其他參謀長ゼークト大佐や、エムミヒ將軍、フランソワ將軍等皆此種作戰に試験済の優秀者であり、其以下の指揮官の多數も經驗者であることが、本作戦の成果に大なる影響を與へたことを想はしむることである。

ハ 軍攻撃部署の概要

四月二十九日第十一軍司令官マッケンゼン大將はノイサンデック(ゴルリッツ西方三十軒)に於て攻撃の爲、軍命令を下達した。其部署の概要の通りである。

- 一 軍はロビカルスカ(ゴルリッツ東南八軒)、ゴルリッツ、スタスツコウカ(ゴルリッツ西北十五軒)、ルツエビエンニツク(スタスツコウカ北方五軒)の線に互る露軍陣地を突破しツミグロット、ズ、ズ(ゴルリッツ東南二十五軒)、コラチケ(ゴルリッツ東北二十五軒)方向に攻撃す
- 二 第四軍は右翼第十一軍に連繫しリグリツケ(ルツエビエンニツク東北十軒)、コルスキー山(四〇三高地)(リグリツケ西北十三軒)の線を奪取したる後第十一軍の左翼を掩護す
- 三 敵正面の突破は各軍團及各師團に於て協同して行ふ、之が爲、砲兵は五月一日午後試射を開始し一日夜確實に時刻を定め間斷射撃をなし此間歩、工兵は準備作業を開始し砲兵は翌二日朝より效力射を開始し次で歩兵は突撃するものとす、其時刻は追つて確定せらるべく、又

砲兵準備の詳細に就ては別に砲兵特別命令に據る

四 突破に次で直に各所定の作戰地境内に於て攻撃を續行す

攻撃を迅速に決行することと隣接部隊前進間絶えず協同することは成果を獲る所以であり、砲兵射撃を適時推進すること及砲兵中隊の随伴は敵後方陣地の攻撃を容易に遂行せしむるのである

五 作戰地境(第十四圖参照)

豫備第四十一軍團

右は歩兵第百十九師團に接す

左は第四第六軍團と併びウォラルツァンカ、ポドレジ、四四〇、ピーツ(之を含まず)の線、但線上は豫備第四十一軍團に屬す

其他は省略す

六 本來の突破地區の前方に與へられる到着すべき境界の細部は戦闘の経過が軍司令官の干渉を要せざる限り各部隊毎に協調すべきものとす

然れども東方に向ふ連繫緊要なる旋回の爲警戒を必要とする間は絶対に所定の作戰地域を確

守すべきものとす

七 次に示す線は協同動作の要求上先づ成るべく同時に到着するを要す

六九三、五九八、四六一、二八八、ウルウイスコ、三二九、モスツクツェンカ小流の線、
フォルウクロウスキ西北三〇九、三九六、三六三、三四〇、三六六、三七七、三七〇、三九二

(最後の三點は塊第四軍の範圍に屬す)

八 匈騎兵第十一師團は五月二日ツアクリクチン(塊第四軍右翼後にてグロムニツク西方十料
附近の宿營地に在りて出發準備を整ふ

九 第十軍團は五月二日朝迄に其先頭を以てドウナエツク河畔に到着す

十 軍司令官は先づノイサンデツクに位置す

ニ 第十一軍前面に於ける露軍の概況

マッケンゼン軍に對する露軍はラドコ・デイミトルエフ大將の指揮する第三軍(歩兵十八師團、
騎兵四師團)中の歩兵約七師團で、其第九軍團は塊第四軍正面に、又第二十一軍團は獨近衛軍團
主力正面に、第十一軍團(三師團)は獨近衛軍團の一部、塊第六軍團、豫備第四十一軍團及獨集成
軍團の前面に位置して居つた。従つて、獨軍に比し兵力は劣勢であつたが、陣地は五箇月を費し

て構築したもので野戰陣地としては堅固なるものであつた。而して第一防禦線の後方五料内外に
第二防禦線があり、更に其後方十料内外に第三防禦線が構築されてある。尙ほ第一防禦線中數箇
所は特に堅固に設備せられてあつた。即ち

バイエルン師團の正面前に　ゼコウア東方ツアムクチスコ山

豫備第四十一軍團正面前に　三五七高地、ボドレジト東方カミューク森林

塊第六軍團正面前に　プストキ山

近衛軍團の正面前に　スタスツコウカ南方高地

露軍第三軍司令官は、四月中旬頃より獨塊軍の兵力がノイサンデツク附近に集中しつゝある徴
候を認め、方面軍司令官イワノフ大將に對し二師團半の増援を請求したが、獨軍の攻撃開始前
は之を得るに至らなかつた。

ホ 第十一軍突破攻撃開始

獨軍は攻撃企圖を秘する爲周到なる注意を以て隱密に諸準備をなしたのみならず、故らに西方
戦場に決戦を求むる如き流言を放ち、又西方戦場に輸送すべき補充兵を白晝白耳義内を通過せし
めて大増兵の狀を現はし、或は四月下旬西方戦場イーブル方面に於て陽に攻勢動作を行ひ恰も大

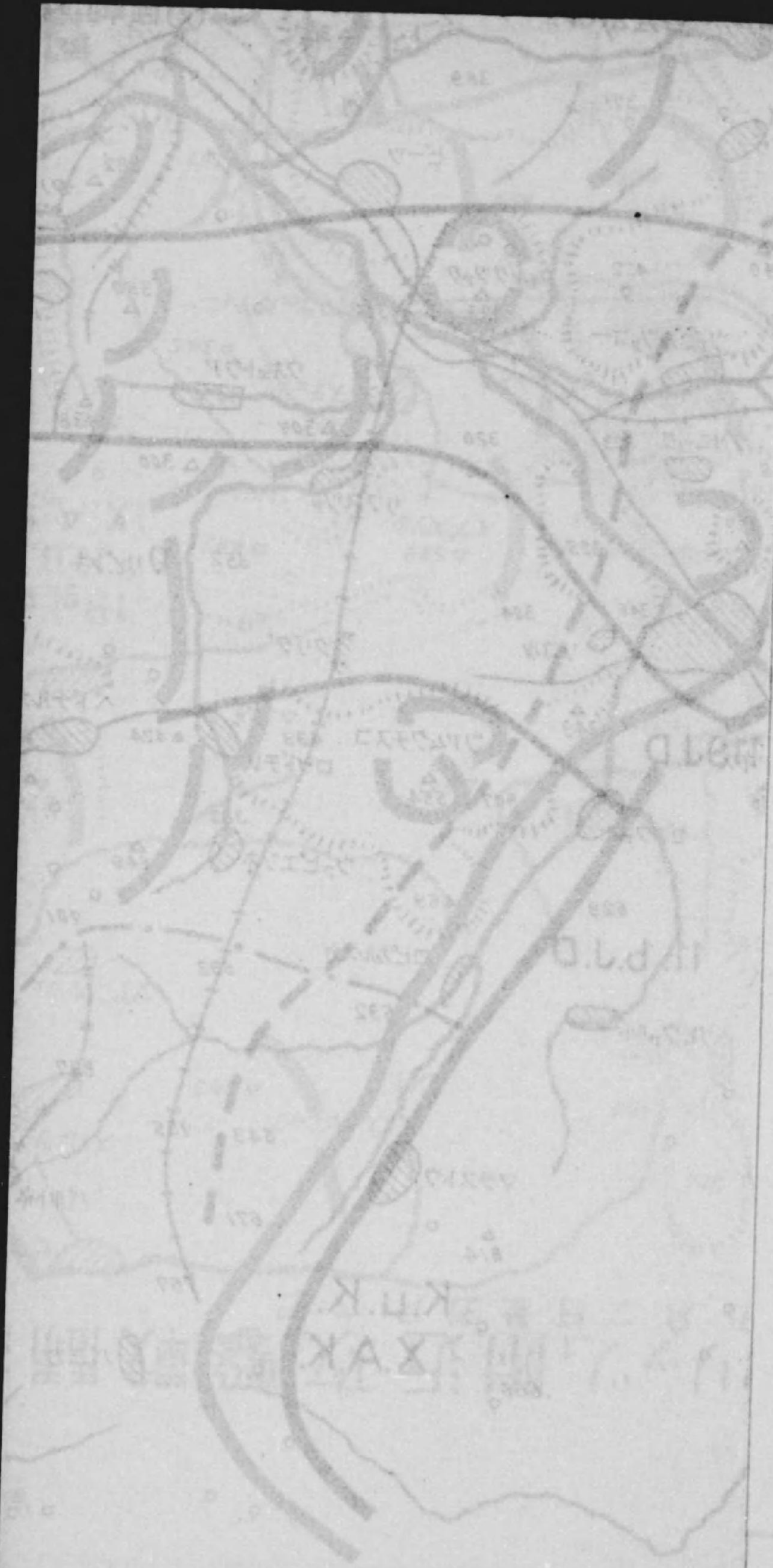
攻勢の前提なるかの如く見せかけ、又は東方軍總司令官ヒンデンブルグ將軍は四月下旬ペロー軍を以てクルランド地方に進入し著しく露軍の注意を該方面に牽制した如き各種の手段を講じて敵の注意を他方面に轉ぜしめ、斯くして五月二日突如としてゴルリッツ突破攻撃が猛烈なる勢を以て開始せられたのである。

へ 攻撃經過の大略

軍は五月一日午後十一時露軍宿营地、陣地、通路等に向つて散布射撃を開始し、豫定に従ひ歩、工兵は突撃陣地の完成に努め、二日午前一時砲火の中止と共に鐵條網破壊の爲歩、工兵は潜行した。

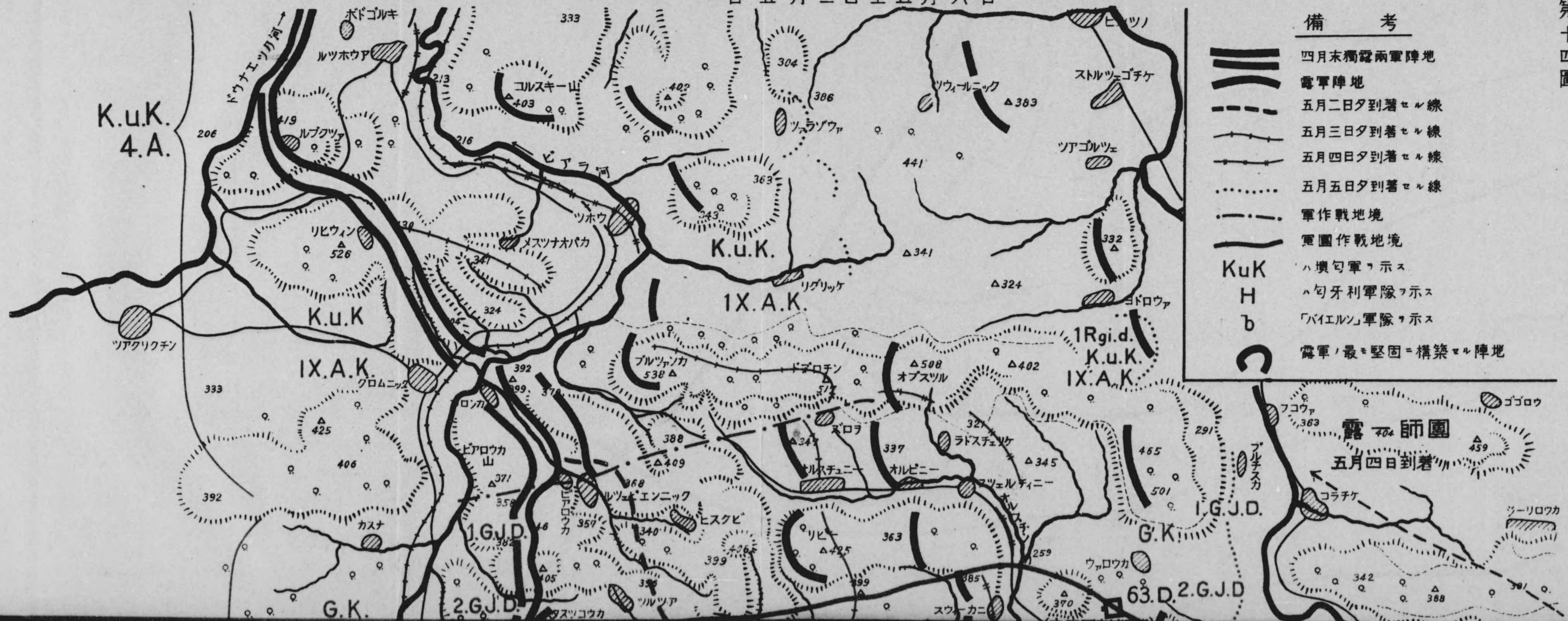
爾後砲兵は、間斷的に射撃を續行し、午前六時を期し一齊に砲撃を開始した。砲撃數時間、午前十時砲火の中止と共に歩兵は攻撃前進を開始し同日夕刻までに概ね露軍の第一線陣地中の前線を奪取し、爾後順調に攻撃を續行して第四日即ち五月五日夕までに逐次露軍陣地を攻略して其第三防禦線をも奪取した。此間露軍は數師團の増援を受けたが及ばず、五月五日より全線退却をなすに至つた。獨軍は翌六日より各方面追撃前進に移り、五月十一日までに露軍をサン河畔に壓迫した。此作戦により露軍は百六十軒の正面に於て突破され百數十軒の縦深を敵に委した。

以上が軍としての大略である。以下、豫備第四十一軍團の突破攻撃を研究する。

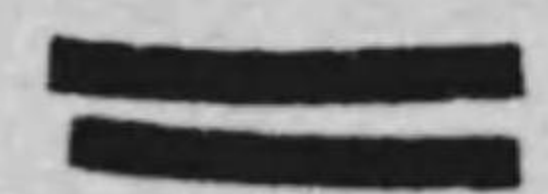






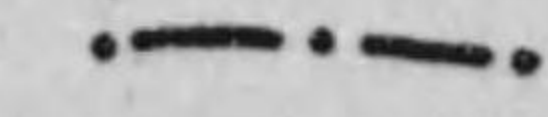

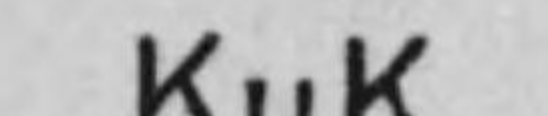

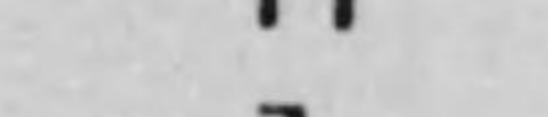


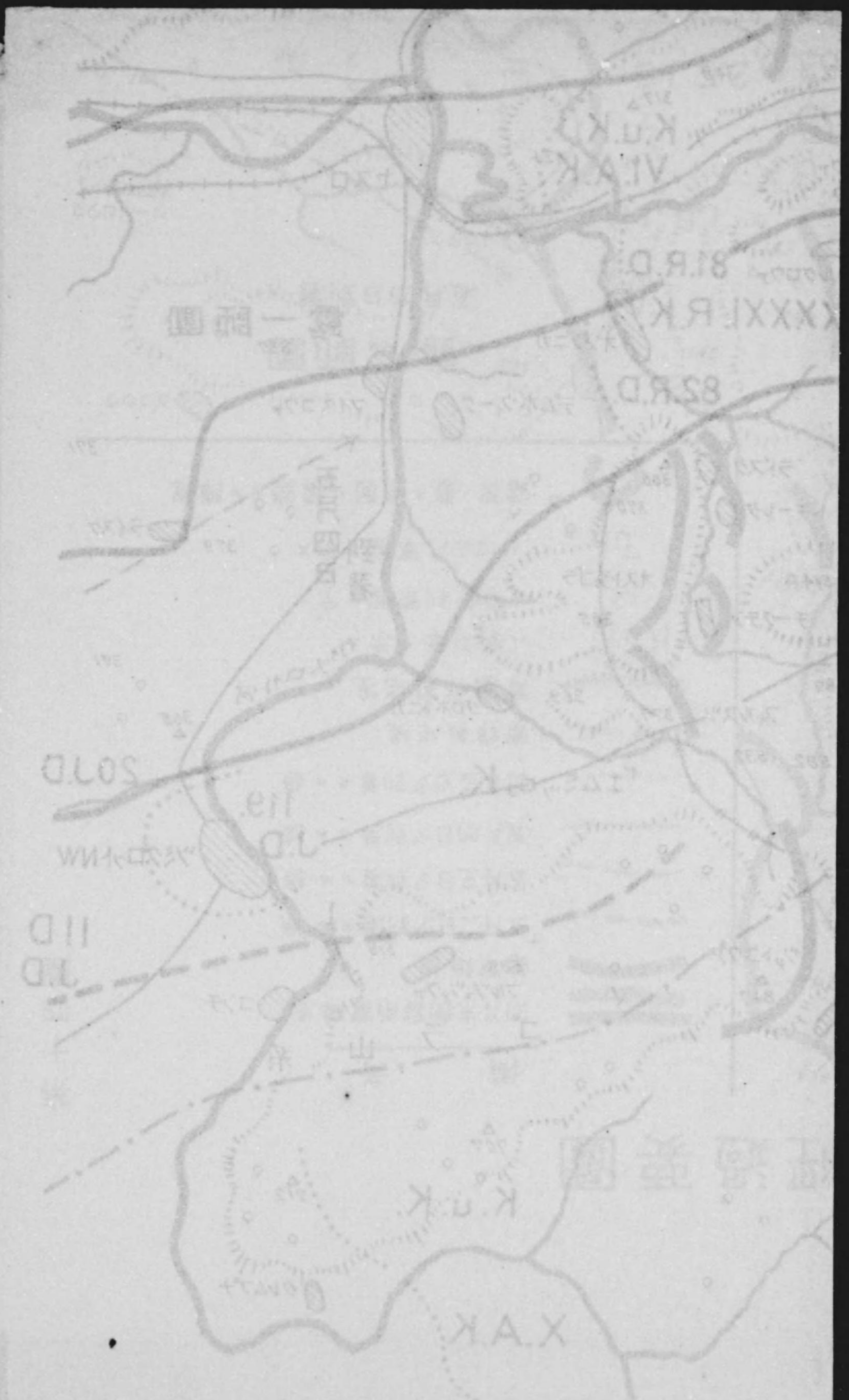
獨第十一軍「ゴルリッツ」附近攻撃戰鬥經過要圖

自五月二日至五月六日



備考

-  四月末獨露兩軍陣地
-  露軍陣地
-  五月二日夕到着セル線
-  五月三日夕到着セル線
-  五月四日夕到着セル線
-  五月五日夕到着セル線
-  軍作戰地境
-  軍團作戰地境
-  ハ横匈軍ヲ示ス
-  ハ匈牙利軍隊ヲ示ス
-  「バイエルン」軍隊ヲ示ス
-  露軍ノ最ニ堅固ニ構築セル陣地



二 獨豫備第四十一軍團の攻撃準備 (第十五圖参照)

イ 陣地攻撃の爲にする軍司令官の訓令

獨第十一軍司令官マッケンゼン大將は、從來の経験に鑑みて、四月二十五日に攻撃命令を下した後、四月二十七日次の要旨の訓令を布達した。

訓令 (要旨)

軍が任務を達成する爲には速に前進するを要す、即ち敵をして後方の陣地に據つて抵抗するの邊なからしむると同時に、其強大なる豫備隊を其の計畫せる通りに増援し得ざらしむるに在り。故に各方面共に、其指示せられたる攻撃地帯に於て絶えず前進に努力せざるべからず。之が爲めには攻撃歩兵を縦長に區分すること及び砲兵威力を迅速に隨伴せしむることの二件に注意するを要す。

軍内に於て攻撃中の軍團及師團の爲めに規定せる日々の目標は、爾後の前進を制肘するの意にあらず、故に決して之に拘泥せざることに注意するを要す。抑、軍の攻撃は常に統一せらるべきものなるも、全正面に於て同等に攻撃の進捗することは豫期するを得ず、先づ東北に面した

る正面より逐次に東方に旋回する必要を生ずべく、従つて左翼方面は迂路を取るを要するならん。

凡そ正面の一部を迅速に前進せしむることは、他の正面に於ける困難を緩解し、一時遲滞せらるる部分の前進を容易ならしむるものなり。又所要の縦長を有する場合に於ては更に自己の成果を隣接正面に波及せしめ得べし。然れども此挺進し得たる部分は其側面を攻撃せらるる危険あり、又迅速なる進出により戦果相伴はざる部隊は反撃を受くる虞あり。是軍としては成るべく到達するを希望する線を規定するの餘儀なきに至る所以にして、之が爲、各部隊を束縛するにあらずして寧ろ更に進捗せしむることは特に希望する所なり。故に軍團及師團隣接部隊は常に連絡を保つを要す。(下略)

小評論

右訓令の要旨を更に約言すれば

- 一 奇襲的に且つ迅速に戦闘を指導すること
- 二 歩兵の縦長區分を大ならしめ且つ砲兵威力の機を失せざる隨伴の必要なること
- 三 第一線軍團及師團の獨斷と果敢なる行動とを要求すると同時に、軍行動を統一規整す

る爲連絡に注意すること

と謂ふに在る。事平凡なるに似て而かも貴重なる經驗なる結果であり、此の戦闘の經過に鑑みても、其の訓令の意味が現はれて居る。之を南山の陣地攻撃の實情に照らし、果して全部此の要求に合しありやに想到するとき、思ひ半ばに過ぐるものがあらう。

□ 攻撃の爲にする軍團命令の要旨

フランツァー軍團長は、軍命令に基いて左の命令を下した。

豫備第四十一軍團命令

四月二十日午後二時
於ピアラニッツニア軍團司令部

一 軍團は H、H、ノブオドウオル、ゴルリツ、二七八、ウルウイスコ、三二五(含まず)、リブスツァ西方二七〇、三〇七、タタロウカ高地の線及ウオルツァンスカ、十字標、三三四、二八七、四四〇、三六五、ビーツ(含まず)、クノウァ南方 M、H の線間の地域内に於ける露軍陣地を突破し東方に向ひ攻撃せんとす

二 混成軍團(巴威里歩兵第十一師團及第百十九師團)は右翼に連繫しセコウァ東方高地に其主攻撃を指向し、塊第六軍團は左翼に連繫しプストキ高地に向ひ攻撃す

三 兩師團の突破攻撃は五月一日午後砲兵の試射を以て開始すべし

但し其以前に射撃を爲すは敵の攻撃に對し防禦を爲すを要する時のみに限る是れ敵に我が重砲の展開を過早に暴露せざらんが爲めなり
五月一日夜に於ける間斷射撃は午後十時まで緩徐なる射撃、午後十時より十一時まで射撃中止、午後十一時より午前一時まで緩徐なる射撃とす而して敵をして散兵壕に據らしめ再び増強せる砲兵の下にあらしむる爲信號彈を以て午前十二時五分より同十五分に至る十分の間隔を置く

午前一時より同三時まで射撃中止、午前三時より同六時まで緩徐なる射撃但し午前五時十五分より同二十五分に至る十分の間隔を置く

午後十時より同十一時まで及午前一時より同三時までの射撃中止間敵の正面障礙物の破壊及其工事の偵察の爲有力なる斥候を派遣すべし

效力射の開始は五月二日朝とす歩兵は之に直接連繫して突撃に前進すべし

此等の時刻は全正面の爲め夕刻前更に命令す其傳達及其他重要な命令の傳達は電話によるを許さず唯時計のみは凡て電話を以て規整すべし

四 突破に次で各所命の攻撃地境内に於て直に攻撃を續行すべし、攻撃を迅速に決行すると、

隣接部隊前進間絶えず協同するとは成果を得る所以にして砲兵射撃を適時推進すること及砲兵中隊の隨伴とは敵後方陣地の攻撃を容易に遂行せしむるものなり

五 兩師團作戦地境を左の如く定む

六九六、四一六、四二七東南森林端、三三五附近森林南端、ロバ河ツアゴルツアニ橋梁東端附近、二八〇、グレボカ南方三五〇

右の線は第八十一師團に屬す

六 第八十二師團はゴルツツ西南端及同部落北方三五七高地に向ひ主攻撃を指向すべし(特種攻撃器材を配當す)

ゴルツツ東方高地よりする敵の側防は軍團直轄砲兵を以て制壓す尙ほ師團は此目的の爲隣接師團と協定するを要す

師團は歩兵三大隊を五月二日午前六時までに軍團豫備として六九六高地南方地區に到らしめ予の直轄たらしむべし豫備隊長は絶えず通信所、六九五高地を守備し電話により其到着を軍團司令部に報告すべし

七 第八十一師團はムスツアンカ及カミニーク森林に向ひ其主攻撃を指向すべし

プストキ及其東方に突出せる高地よりする側防は軍團直轄の砲兵火を以て制壓す師團は左翼に強大なる梯隊を控置し以て北方よりする敵の逆襲を防止し且必要に應じ軍司令部より指示せられたる攻撃方向より脱せざる範圍に於てプストキ東方高地の攻撃を援助し得るの準備に在るべし

混成砲兵大隊(加農二中隊、輕榴彈砲一中隊)を五月二日午前六時ボルナスツアロウア道附近に於て予の使用に供すべし同隊到着せば師團司令部宿營地ボルナの通信所を経て軍團司令部に報告すべし

八 兩師團の工兵中隊は其所屬に復歸すべし

軍團司令部に配屬せられたる第十軍團の工兵中隊は六九六高地南方に於て工兵豫備たるべし兩師團の騎兵は依然其所屬に在らしむべし此騎兵は當初捕虜の輸送に任せしむべし

追撃砲の配屬故の如し

フォンフロットー少佐は副官及自ら選拔せる小隊と共に本夕以後軍團司令部に位置すべし

九 四月二十九日の軍命令第八項は各師團に於て嚴守すべし(筆者曰く、各團隊の到達目標、作戰地境に關する注意的事項である)

共同動作の要求上、次に示す線は各師團の先づ爲し得る限り同時に達すべき線とす但前方にある高地端を有利なる狀況に於て占領するは差支なし

ゴピランカ西北二八八、ウルウイスコ、グリニツク北方三二三、マスツツアンカ小流の線

十 搜索は各戰闘地境内に於て之を實施すべし夜間搜索により敵砲兵陣地を確認する爲には特別の顧慮を拂ふを要す

十一 後方連絡

(省略)

十二 軍團司令部の戰闘位置は七四七高地とす六八六高地を経てピストルチカ東方第八十二師團の戰闘位置及六九六高地附近第八十一師團の戰闘位置と連絡す

軍團砲兵指揮官レッベル大佐及工兵指揮官は軍團司令部に位置すべし

十三 各師團は自己の電線以外左記電線を嚴に監視すべし

(省略)

十四 住民の移送に關しては特別命令に依る

小評論

命令内容の研究に資する爲、略、其全文を掲げた。而して其の内には随分餘計なことも思はれるものもある、例へば「到着したなら電話で報告しろ」などと堂々たる軍團命令中に掲ぐるは如何かと思はれる。然し一般を通ずれば参考になる事も少くない。要するに命令は簡明なるべきであるが、我々は動もすれば簡に過ぎて意を盡さず、或は口で意圖を傳へたり、幕僚が附け加へる説明をしたりする様なことが行はれる。之は一考を要することである。「簡明確切」にて意味は充分であるが、獨逸では此の外に「完全」と言ふ字が用ひられてある。つまり意を盡さざるを戒しめたものである。

ハ 突撃前日(五月一日)の概況

獨軍の突撃陣地は敵陣地前二百米以内に構築し得たので、第一線各部隊は四月三十日の夜から其大部を突撃陣地に進入して居たのである。而して翌五月一日午後一時に砲兵は試射を開始した。此日天氣晴朗にして一點の雲もなく、落達射弾の光景は壯觀を呈した。

既に軍の攻撃の部に於て述べた如く、砲兵は五月一日夜露軍塹壕、宿营地、前進路等に對し散布射撃を實施し、又突撃陣地の尙ほ完成せざる地點では、敵前至近の距離で作業に従事した。午

前五時五十五分砲兵は射撃準備を完了し歩兵は突撃陣地の胸牆に群がつて射撃の模様を陰かに見物すべく發射を待つて居る。

三 軍團の突撃戦闘第一日(五月二日)

イ 軍團の概況

軍團長は全戰場を展望し得る七四七高地に位置して戦闘開始を待つて居る。愈、午前六時六九六高地附近に位置せる十二種加農が信號射撃をなすや七百の全砲兵は一齊に火蓋を切り、破裂爆音凄まじく、土塊、木片、掩蓋等を空中に飛散し、村落は炎々として燃え上る、此間獨軍の榴霰弾に追はれつつ露兵の逃走するの見える。

翻つて露軍側に於ては、其砲兵の應射も振はず何となく元氣がない。其の内に午前九時となつた、新に迫撃砲の破壊射撃が開始され、特異の爆弾は高く揚がつて露軍陣地に落下し、土塊の飛散すること恰も噴水の如く、一層凄觀を増した。胸牆に身を寄せたる獨軍將兵は、此の光景に活氣充溢し、午前十時愈、歩兵は迅速に突進を開始し、午前十一時第八十二師團は猶太墓地の高地及び三五七高地を占領して多數の捕虜を獲た。併し第八十一師團は鐵道堤で行動頓挫し、左翼は

プストキ山から猛烈なる側射を受け攻撃進捗しない。乃ち軍團長は更に重砲を以て該方面を射撃せしむること十五分間に及んだが、尙ほ成功を見ずして正午に及んだ。然るに隣接せる塊軍はプストキ山斜面を登りて露軍陣地に突入した。軍團長は其豫備隊をウォラルアンスカ方向に進め、第一線部隊は更に前進し突撃を反復して遂に敵陣地に突入し、午後一時二十分を以て最も堅固なる露軍最前線陣地を奪取し捕虜一千を獲た。

次で軍團長は六九〇高地に移り午後六時次の要旨の命令を下した。

命令要旨

一 各師團は本日更に目標に向ひ前進すべし
之が爲第八十二師團はグリニツク及同地北方三二三高地を奪取しゴルリツツ市街内に於て分断せられたる露軍を掃蕩し明日彈藥縦列をしてゴルリツツを通過し得しむる如くなすべし
又第八十一師團は主力を以てムスツアンカ地區即ちツアゴルツアニーモスツクツエニカ道に達し其前哨を該地區東方高地に推進すべし

二 左記部隊を兩師團に配属す

第八十二師團 野戦重榴弾砲第五、第八中隊

第八十一師團

野戦重榴弾砲第七中隊

塙十二種中隊及臼砲大隊

三 軍團豫備隊は第八十一師團長の區處を以てムスツアンカに宿營すべし
四 軍團司令部は本タスツアロウアに位置す

兩軍團の戦闘經過大要

右翼歩兵第八十二師團

左の如く三地區に分ちて攻撃した。

右翼隊

第一線 第二百七十二聯隊第一大隊

豫備隊 同 第二大隊 (H、H、ビストルチカ)

中央隊

第一線 第二百七十一聯隊第二大隊

豫備隊 同 第一大隊 (M、H)

同 第三大隊 (ビストラ東方墓地)

左翼隊

第一線 第二百七十聯隊第二大隊

(豫備隊なし、但し要すれば第二百七十一聯隊第一大隊之を援助す)

尙ほ軍團豫備隊として第二百七十聯隊第一、第三大隊、第二百七十二聯隊第三大隊の合計歩兵三大隊は當師團より控除せらる。

右の内、中央隊の戦況を概述して一般を窺ふの資とする。

第一線たる第二大隊は、第一線に三中隊を展開し豫備として一中隊を右翼後に配置し二日午前十時を以て突撃陣地を跳び出すや、ゴルリツツ附近から小銃及機關銃の側射を受けたが、之に屈せず、午前十時三十五分敵陣地に突入し、猶太墓地及三五七高地を占領した。是に於て旅團長は三五七高地に前進し北方からゴルリツツを奪取せしめた。

恰も此の時、師團長は飛行機の報告により約一旅團の露軍が縦隊を以てピョーツよりゴルリツツ方向に前進中なるを知つた。依つて直に十糧加農を以て之を射撃し三五七高地に推進せる野砲も亦之に協力した。其結果該露軍は反轉した。斯くして日没前師團は三二三高地に達し此處に工事をなさしめた。

小評論

右の如く師團が迅速に成果を收め得た所以のものは、露軍の防禦宜しきに叶はなかつた原因もあらうが、主として獨軍歩、砲兵の協力が従来よりの訓練により眞に圓滑迅速に行はれ、敵をして氣息を恢復するを得ざらしめた結果であると謂はれて居る。

左翼歩兵第八十一師團

師團も左の如く三地區に分けた。

右翼隊 第二百六十七聯隊(目標四二七高地より三三五高地に)

中央隊 第二百六十八聯隊第三大隊(兩翼隊の連絡)

左翼隊 第二百六十九聯隊(目標カミニーク森林)

師團豫備 第二百六十八聯隊第一、第二大隊

右の内、左翼隊の行動を概説する。

聯隊は第一線に二大隊を展開し、一度敵陣地に突撃を試みたが、鐵道堤及北方林縁より機關銃の射撃を受けて失敗した。依つて聯隊長は師團司令部に報告し砲兵火の集中を待ち十五分間の重砲射撃の後、再び突撃したが、亦もや失敗した。然るに午後に入り兩側の友軍が敵陣地に突入す

るや、聯隊長は豫備第三大隊を第一線に増加して砲兵の協力の下に三度突撃を敢行して遂に該地を占領した。

ハ 軍團の損害等(第一日)

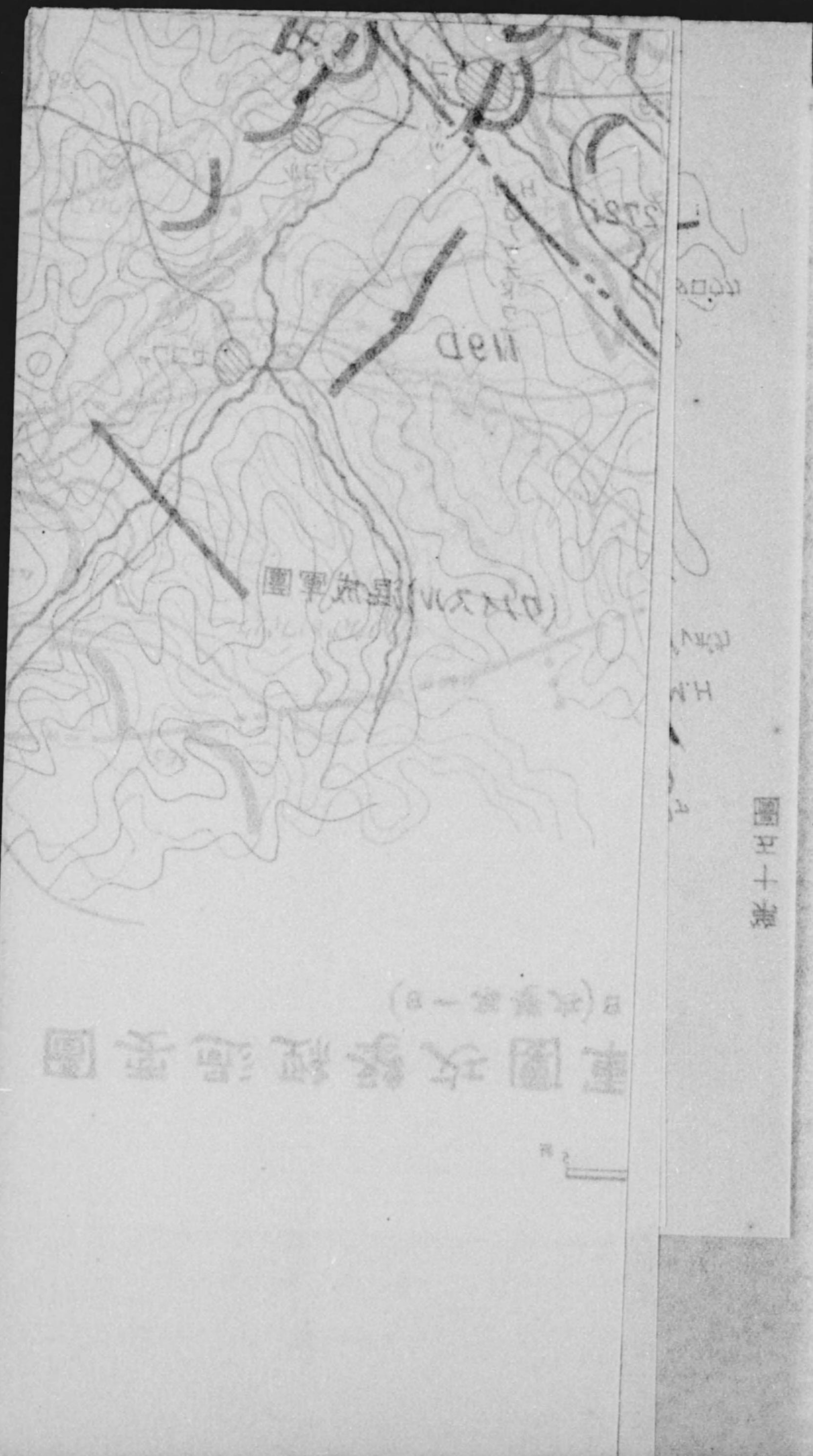
軍團の死傷は

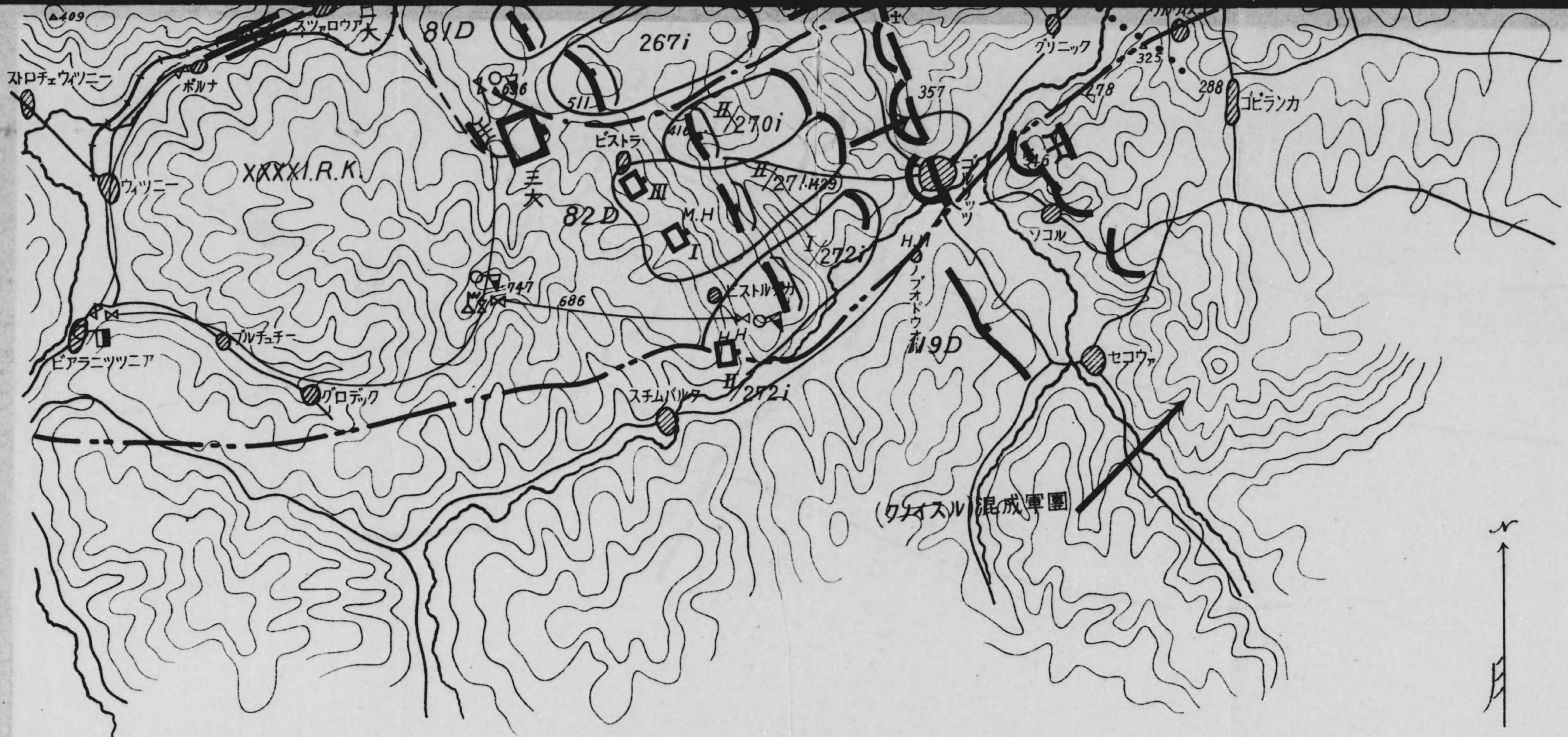
	戦死	負傷
第八十二師團	一四二	三六五
第八十一師團	一六七	五七二
計	一二四五人	

戦利の重なるものは

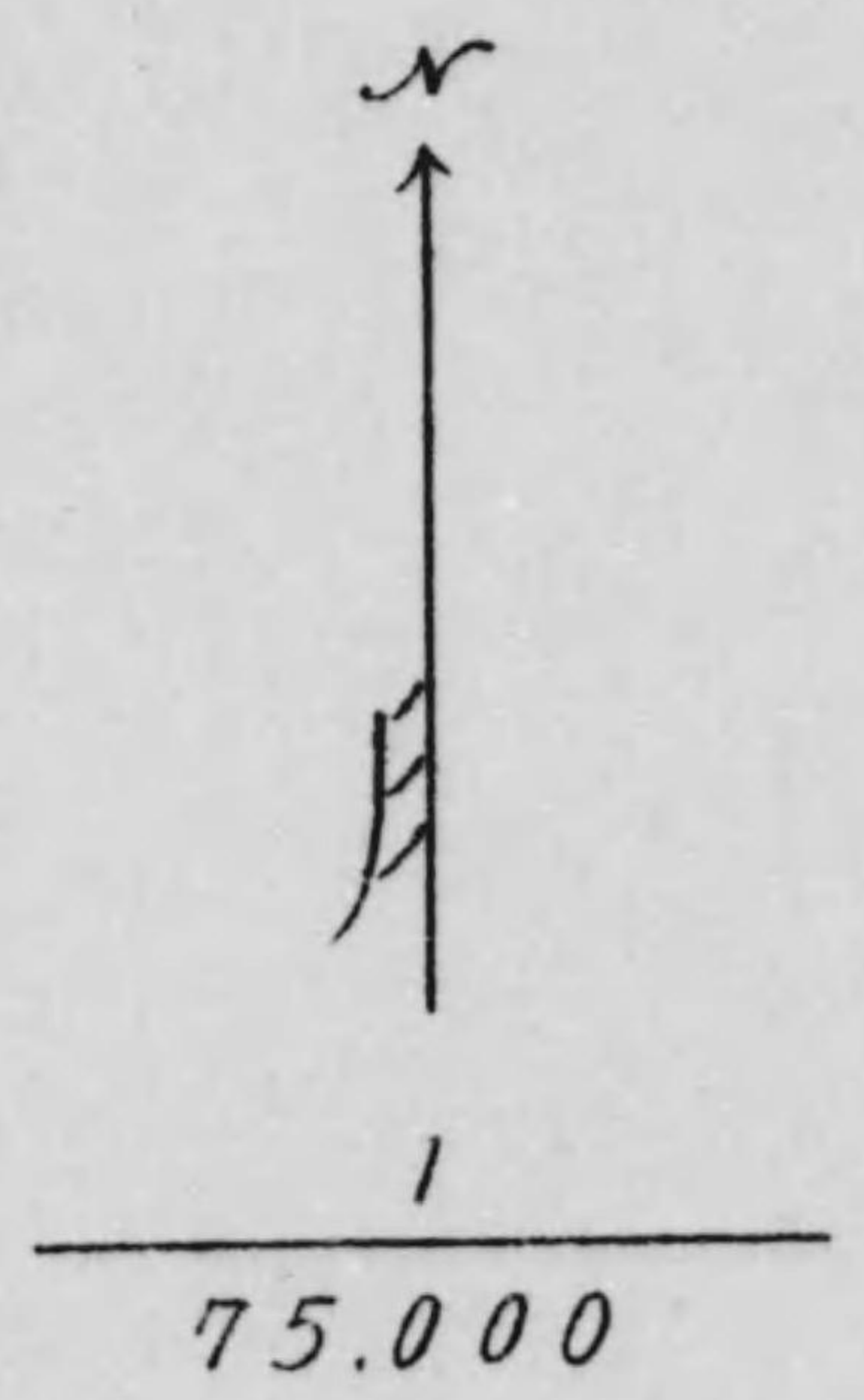
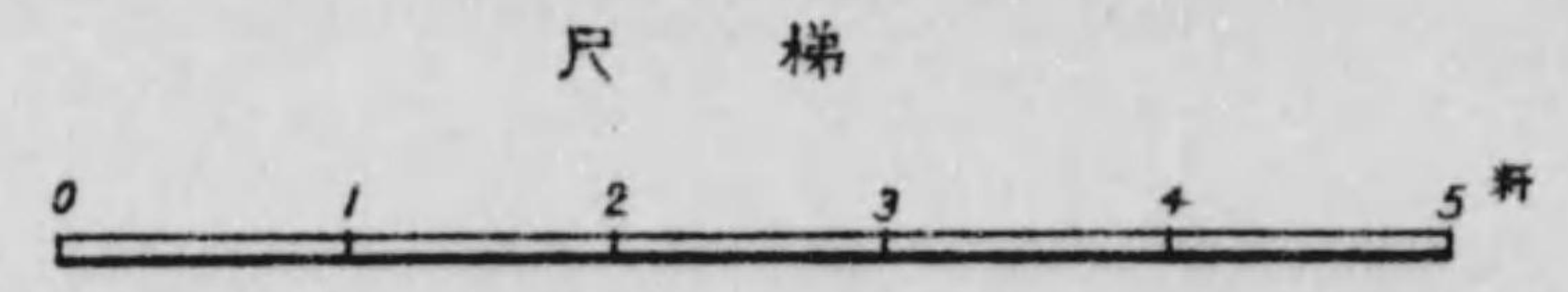
捕虜	計約八千
重砲	二門
機關銃	二〇
多數の材料	

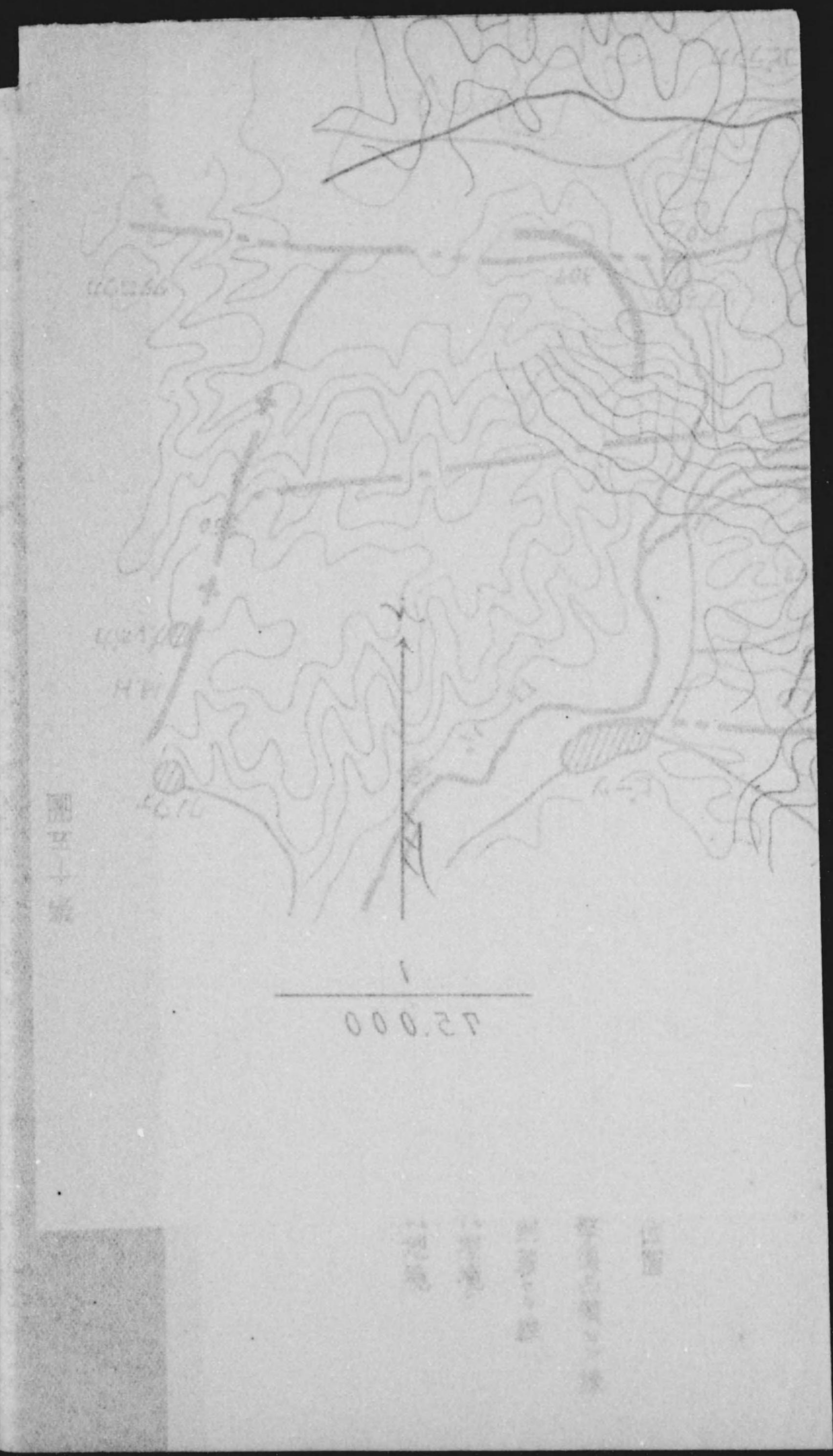
であつた。





- 備考
- 攻撃準備位置
 - |— 五月二日突撃後占領セル線
 - 五月二日夕到着セル線
 - |— 軍團作戦地境
 - |— 師團作戦地境
 - KuK 填幻軍





四 軍團の突撃戦闘第二日乃至第四日 (五月三日乃至五月五日)

イ 突撃戦闘第二日(五月三日) (第十六圖参照)

軍團司令部はスツアロヴァ(第十六圖西端)に於て三日午前零時三十分軍團命令を發し、同日の爲の攻撃を指示した。其要旨は次の通りである。

軍團命令(要旨)

- 一 敵は二日軍全線に互り我が攻撃を受け當軍團各部隊は協力して成果を擧げ捕虜少くも五千、大砲若干、機關銃及武器彈藥の多數を鹵獲せり
 - クノイスル混成軍團は其左翼を以てソコル(第十六圖南端)北方高地に達し、塙第六軍團は二日夕刻其右翼を以てモスツクツエニカ(第十六圖西北端)寺院に向ひ前進せり
 - 二 豫備第四十一軍團は五月二日軍司令官の指示せるグリニツク(ソコル北方三軒)―三二三―グリニツク北側)―モスツクツエニカの線を奪取せり
 - 三 第十一軍は三日攻撃を續行す
- 豫備第四十一軍團の作戰地境左の如し (省略、第十六圖参照)

攻撃前進開始

第八十一師團は午前六時

第八十二師團は午前七時

四 兩師團の作戰地境(省略、第十六圖参照)

兩師團は三日先ブリブスツア(グリニツク東方四籽)東方三〇七—ウイルクツア(リブスツア西北二籽)—ストルツクステン(ウイルクツアク西北二籽)東北二九一の線に到達すべし

五 従來の軍團豫備隊(混成第二百七十聯隊)は第八十二師團に復歸しムスツアンカ(ゴルリツツ西北四籽)に到るべし

又歩兵第二百六十九聯隊は新に軍團豫備隊(工兵第十六大隊第三中隊を含む)として第八十一師團の左翼後一籽を隔て同師團混成砲兵大隊の後方を續行すべし

六 飛行隊及通信隊には別命す

七 軍團司令部の戰闘位置は三日午前六時以後スツアロヴァ東南三籽六九六高地とす

八 兩師團の捕虜集合場はムスツアンカとす

小評論

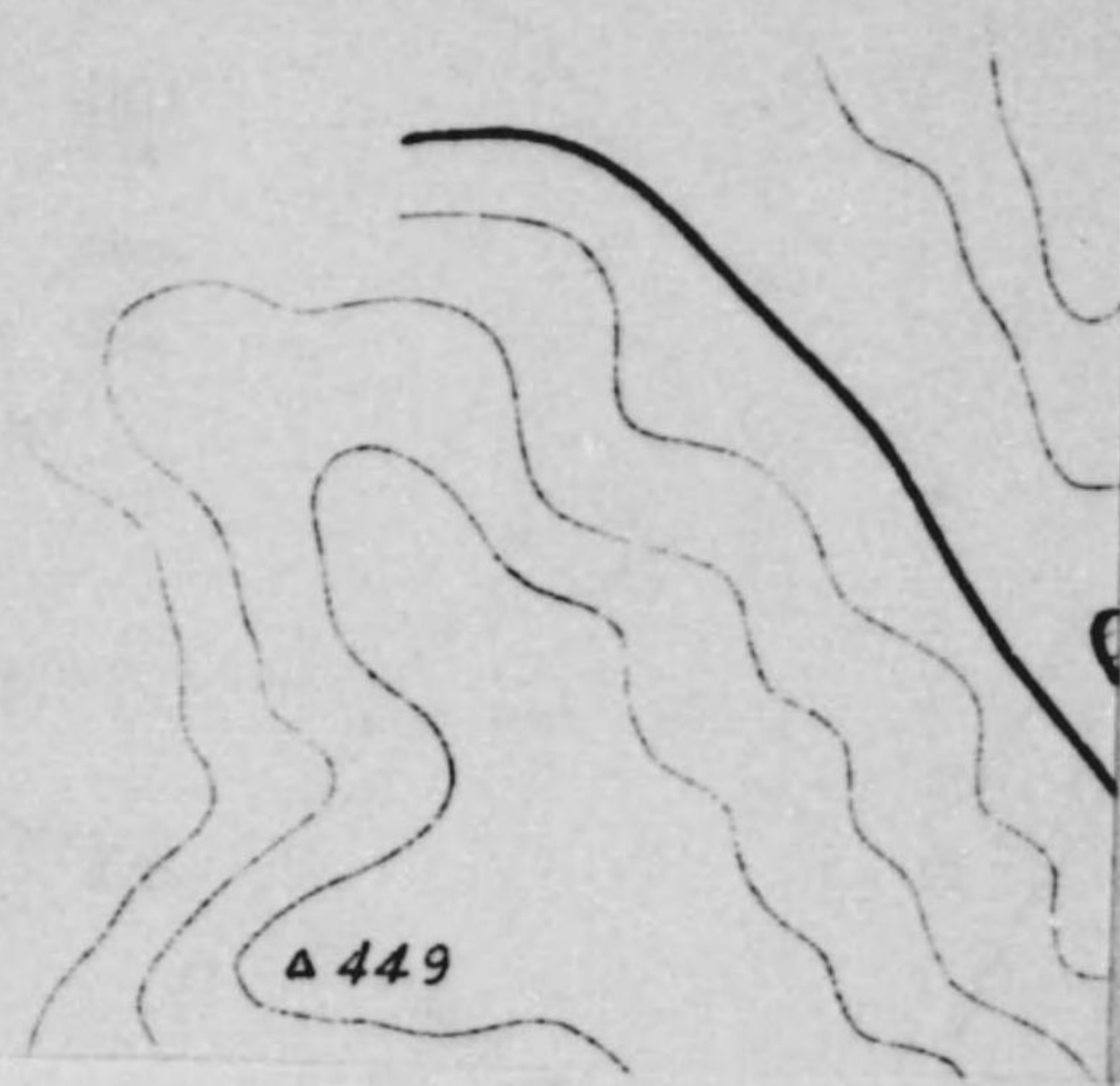
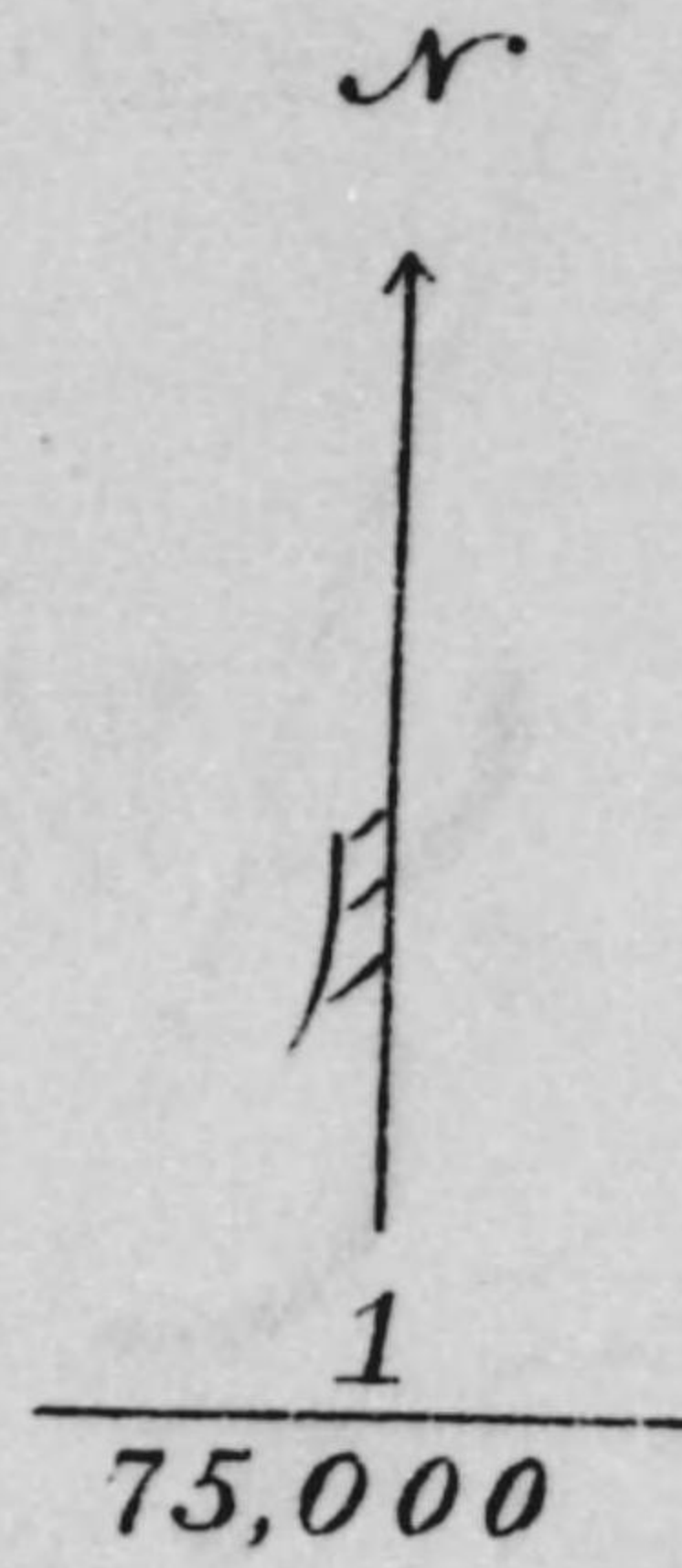
イ 此命令に就ては特に評する事項もないが、飛行隊及通信隊に對して別命すとあるのみで一般に告知すべき大要の任務が掲げられて居らぬ。これは所謂別命なるものを各隊にも交付するのかも知れぬが、若し左様ならば無駄な事である。故に我典令の示せる通り一般に知るを要する大體の任務を示して置くのがよろしい。

ロ 捕虜の集合場を指定したことも、實際の經驗から生じた事項で、毎戦多數の捕虜を獲るを例とする以上、之れは注意すべき事であらう。

兩師團の戰闘經過

軍團の攻撃正面に於ては、ウイルクツアク山(兩師團の作戰地境に跨る)が五條に重層配備をなし多數の機關銃を配置し、野砲、重砲も森林中に遮蔽せられて配備してあつた。

第八十二師團 歩兵第二百七十一聯隊をロバ河の北岸で敵の正面に對せしめ、歩兵第二百七十二聯隊をロバ河南岸をリブスツア方向に對し成るべく南方から包圍攻撃に任せしめ、歩兵第二百七十聯隊を師團豫備隊として第二百七十一聯隊の後方に續行させた。又野砲及重砲は戰闘展開中の歩兵に隨伴し正午頃第八十二師團の砲兵はウイルクツアクに向つて戰闘を始め、次で第八十一師團の砲兵も之に協力した。露軍は前日に比し抵抗頗る頑強で、爲に歩兵第二百七十一聯隊の前



進は困難となり、進捗は遅々たる有様である。然るに獨野戦重榴弾砲隊其他の重砲が其威力を逞うするに及び、露軍は漸く退却を開始した。又歩兵第二百七十二聯隊は歩兵第二百七十一聯隊の正面よりする協力と相俟つてクレツァニー(リブスツァ西北二軒)を占領し續いて三七三高地を登つて突撃前進を試みつつある。

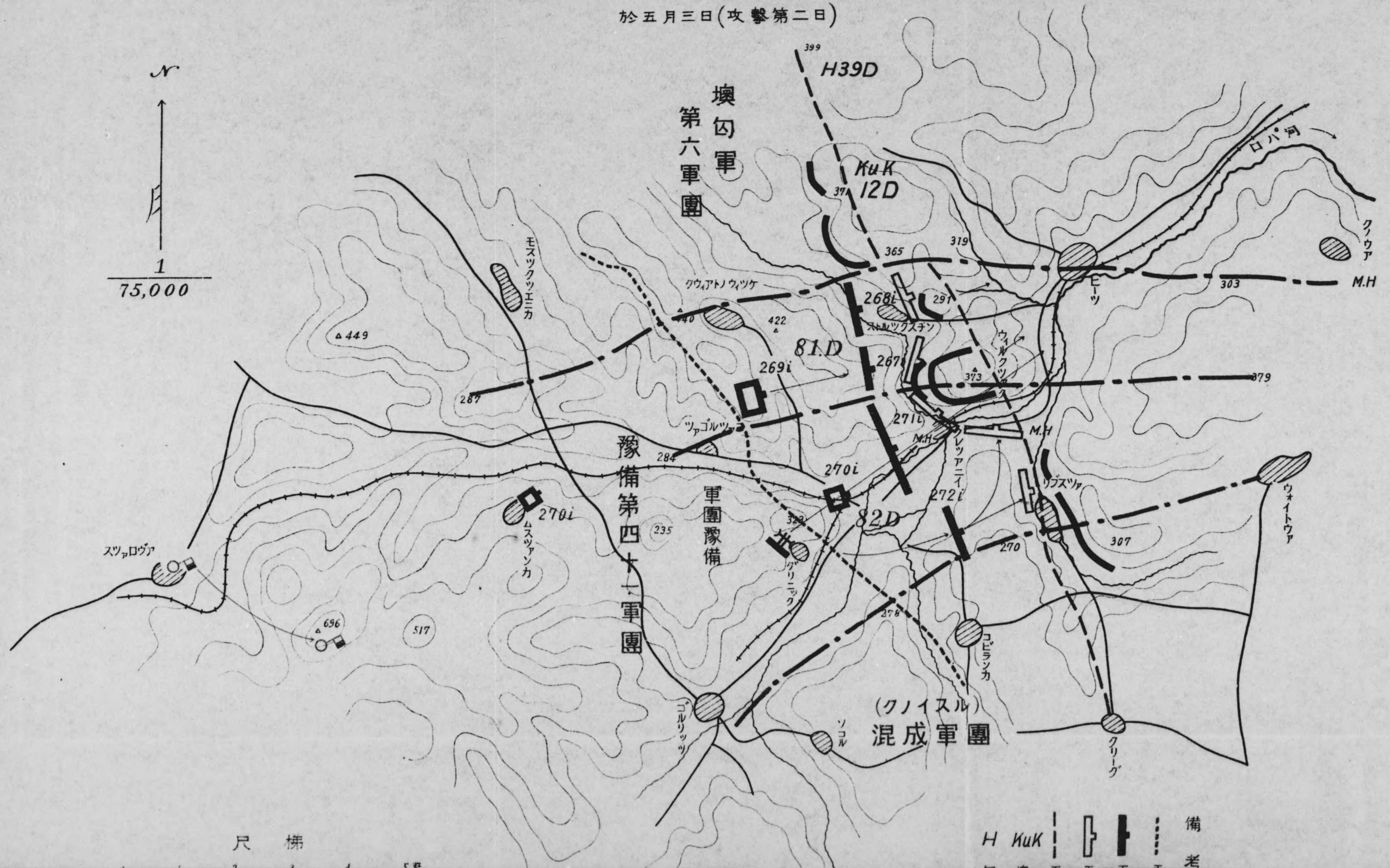
第八十一師團 クウイアトノウイツケ及四二二高地を占領せる師團は、此日歩兵第二百六十七聯隊を右翼とし同第二百六十八聯隊を左翼としてウイルクツァク西北斜面に向つて攻撃前進せしめ、歩兵第二百六十九聯隊は軍團豫備隊として第二線となり、歩兵第二百六十七聯隊の後方を續行せしめた。此師團の突撃も露軍の機關銃火の爲成功困難に見えた。露軍は獨軍砲兵が其陣地を破壊したにも拘はらず、依然として頑強に其位置を維持しつつあつた。午後七時に至り獨第一線各隊は突撃を敢行して露軍陣地に突入し、露軍はピョツに向ひ退却したが、後衛戦は終夜續行せられた。

隣接兵團の概況

左隣接兵團たる塊軍團は圖示の通り苦戦の後三七一高地及三九九高地を占領し又右隣接混成軍團もリブスツァ南方よりクリーグに互る線を占領した。

豫備第四十一軍團攻撃經過要圖

於五月三日(攻撃第二日)



尺 梯

H KuK [Square] [Rectangle] [Dotted] 備考

備考

..... 五月一日夕到着スル線

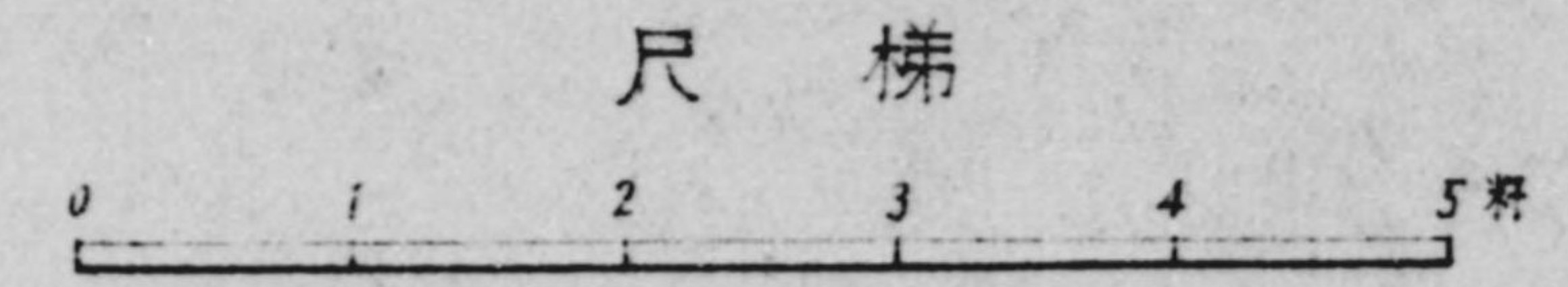
┌ 五月三日攻撃部署

└ 五月三日夕突撃前到着セル線

--- 五月三日夕到着セル線

KuK 奥匈軍ヲ示ス

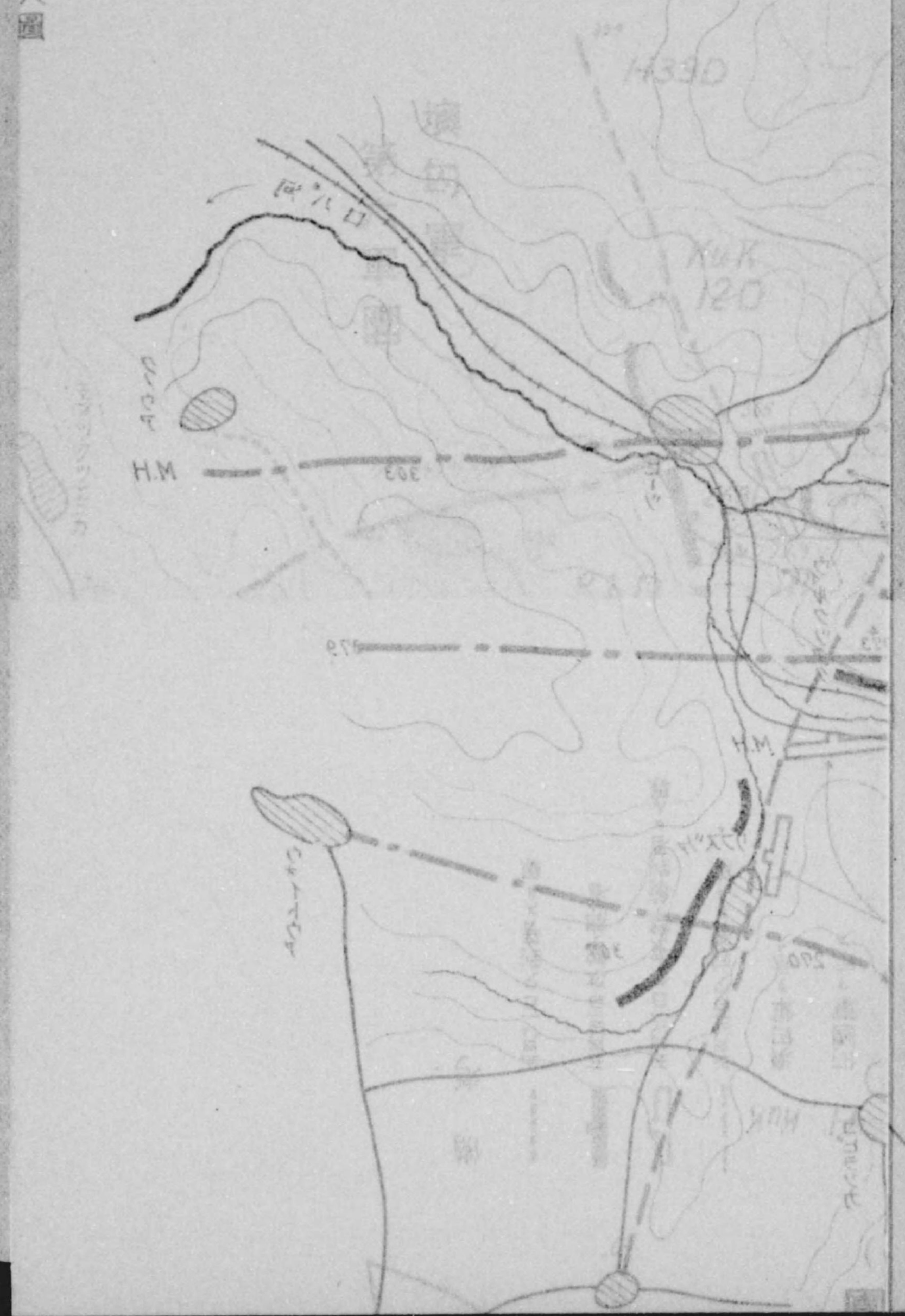
H 匈國軍ヲ示ス



第四十一軍團攻撃圖要

於五月三日(攻撃第二日)

第 十六 圖



突撃戦闘第三日(五月四日) (第十七圖)

五月三日午後五時三十分軍團長フランツァは次の要旨の軍團命令を發し翌五月四日の爲の攻撃の指針を示した。

軍團命令の要旨

- 一 軍司令官は昨日規定せる目標を變更し次の線を以て本日到著すべき線とする旨希望しあり
フオルスツ(第十六圖東南端)―チークリン西方五一四―ボゴレツク(五一四北方四軒半)―ハルクロヴァークノウア―スウイ―カニ―スチコルチニ
- 二 右の線まで兩師團の作戰地境を延伸し各師團をして成るべく前方に進出し休憩に移らしめんとす
但し隣接部隊に顧慮するを要す
- 三 軍團の作戰地境(省略、第十七圖に依り兩側の線を参照)
兩師團の作戰地境(省略、第十七圖参照)
- 四 兩師團司令部はツァゴルツァニイ(第十七圖西端)に宿營す

兩師團司令部の宿營地も軍團司令部と同所とす

五 重砲の配屬本日に同じ

軍團豫備隊(工兵第十大隊第三中隊を含む)は第八十一師團の使用に委す、同師團はピーツ(ツアゴルツァニ)東北七軒半(南方渡河點を成るべく豫め準備せざる材料を以て補修すべし

又兩師團はウイスロカ河(第十七圖東端)の架橋を準備するを要す

六 明四日午前六時攻撃を再興せんとす、兩師團は相並んで前進を開始すべし

兩師團の行動

第八十二師團 ロバ河に架橋を完成するや全力を擧げて之を渡りウオイトウア(渡河點の東南四軒)方向に前進した。而して敵の妨害を受くることなく同地を占領することが出来た。是より先リブスツア(ウオイトウア西方三軒)の露軍は既に早く退却した。

是に於て師團長は歩兵第二百七十二聯隊及第二百七十聯隊を第一線とし第二百七十一聯隊を第二線に控致し三五〇の高地に向ひ攻撃前進せしめた。各隊は午後三時四三八の高地斜面を登り始むるや、露軍は俄然戦闘を開始した。乃ち各隊は直接附屬せられたる野砲兵大隊の援助により午後七時に至り同高地を奪取した。

第八十一師團 主力を以てコルクチナ(主力の渡河點)を経てグレボカ(コルクチナ東方四軒)に

向ひ攻撃前進をしたが、三五〇高地附近は森林地帯であるから、茲に猛烈なる森林戦が惹起せられ、展望を許さざる地形であるから、下級指揮官の獨斷專行に依らなければならず、各隊は繁げれる森林内を樹木の下枝を伐截しつつ通路を開いて前進し、日没頃該高地を占領した。師團は爾後攻撃前進を續けたが、ハルクロウア(三五〇高地東方二軒)には達するを得なかつた。是れ途中北方クノウア附近三三二の高地から側射せられたからである。

此三三二の高地は左隣接の塊第六軍團の作戰地境内であるが、當該方面の攻撃が進捗しない。そこで豫備第四十一軍團としては、該方面が奪取されねば前進困難であるので、第八十一師團は親から之を攻撃するを要すとなし、歩兵一大隊を三五〇高地の南方を迂回し森林に蔭蔽して前進せしめた。然るに森林内で激しき各個戦闘を惹起したので、更に歩兵一大隊をハルクロウア方向に増加した。然し爾後兩方面の情況は混沌として一向に分明でない。そこで師團長は師團の將來を案じ之を統制するの要を感じ、ハルクロウアに向ふ攻撃は之を翌五日に延期した。

隣接兵團の概況

軍團の右方に在るエムミヒ軍團の左翼部隊は頑強なる敵の抵抗を受けたが、苦戦の後夕刻に至

り逐次戦況發展し夜に入りてオストラゴラ(第十七圖東南端附近)に進入した。又左方、埃第六軍團も、夕刻頃クノウア(三五〇高地北方二籽)を奪取したが、續いて其北方三三二の高地を速に攻撃するに努力しなかつたので、第八十一師團の前進を妨害せられたことは、協同動作の見地から適當でない。

小評論

イ 第三日の爲めにする軍團長の部署に就ては特に論評する程のこともない。唯軍が急に其到着目標線を變更して遠く縦深を延長したことは、記事の文面上では其意味が明確でない。單に希望事項であるから大なる問題ではないが、戦闘の進行中に其當日の目標を變更する如きは、動もすれば指揮の統一を害し齟齬を生じ易きものであることを心懸け置くべきである。

ロ 此日の戦闘は多く森林戦であり、殆んど各隊毎に又は各個に戦闘を交へた。従つて各隊の混淆を來たし、動もすれば部隊の掌握困難となり易いと同時に相當に長時間に亘ることを覺悟するを要することを教へて居る。

ハ 突撃戦闘第四日(五月五日) (地名は第十七圖参照)

此第四日はウイスロカ河(第十七圖東端)の地域一帯を攻略すべく、第八十二師團をしてウオラ・デボ・ウイエツカ・ハルクコヴァ東南八籽半)を、又第八十一師團をしてデムプロウイツツ(ウオラ・デボ・ウイエンカ北方二籽半)を各、其目標として攻撃前進せしめた。ところが露軍はハルクロヴァ及オツブニカ(ハルクロヴァ東南三籽)附近の密林中で頑強なる抵抗を爲すべきは之を覺悟せなければならぬ。

兩師團の行動

第八十二師團 タタロウカ山脈の線を通過して前進し、其第二百七十聯隊はボゴレツク(ハルクロヴァ南方二籽半)東方に展開しオツブニカを目標として攻撃前進を敢行した。然し露軍の抵抗を受け前進は意の如くならず。又第二百七十二聯隊も其北翼に連なり第二百七十一聯隊は左翼後に梯隊的に位置しボゴレツク北方で戦闘を惹起した。

此戦闘中隣接第八十一師團の第二百六十九聯隊第一大隊は第二百七十一聯隊と連繫すべき筈なるに之を失し孤立してオツブニカに向つた。該大隊は、同地に露軍在らざるものと思ひ村落に近づくと俄然同村落より露軍の射撃を受け、大なる損害を蒙り、ボゴレツクに向ひ敗退し、第二百七十一聯隊に收容せらるるの失敗を演じた。要するに爾後の歩兵戦闘は攻撃の進捗思はしからず

夜に入るも繼續せられ、遂に夜半近く第二百七十二聯隊及第二百七十聯隊はオソブニカ村落に突入し市街戦の後之を占領した。然し爾後僅かに斥候を以てウイスロカ河畔に向ひ露軍の退却に追尾するに止めた。

此日野砲は戦闘に参加したが、重砲はタタロウカ山脈の通過を許さず已むを得ずロバ河に沿ふ地區に使用したので充分に威力を逞うするを得なかつた。

第八十一師團 正午頃ハルクロヴァに進入したが、各家屋で露軍と爭奪戦を惹起しつつ夕刻となつた。爾後前進を繼續し該地東北高地を占領した。

兩隣接兵團

右方エムミヒ軍團は當面の敵兵が退却したので大なる戦闘を交ゆることなく、遠く東南方に進出し、又左方埃軍團は此日午後に至るも尙ほ三三二の高地及其北方ロバ河左岸三七〇高地を占領し得ず、夕刻に至り露軍の撤退により始めてウイスロカ河の線に達するを得た。

小評論

イ 此日の戦闘も森林戦である。元來ガリシヤの村落は概して四軒に互る長さを持ち各家屋は獨立して五十米乃至百米の間隔があり、樹木、叢林を以て圍まれてある。故に住民地は

一つの據點として防者に有利なる地物である。従つて獨軍の攻撃進捗が如何にも最初の如くなる能はずして遅々たる感があるのも致し方がない。而も露軍にして若し尙ほ秩序的に眞面目に抵抗するの意思が充滿して居つたとすれば、獨軍を更に一層手古摺らせ恰も獨軍八十一師團の歩兵一大隊が嘗めさせられたる失敗の如き事實を各方面に現はし得たであらうと想像する次第である。

五 突破後の追撃戦大略(自五月六日至五月十一日)

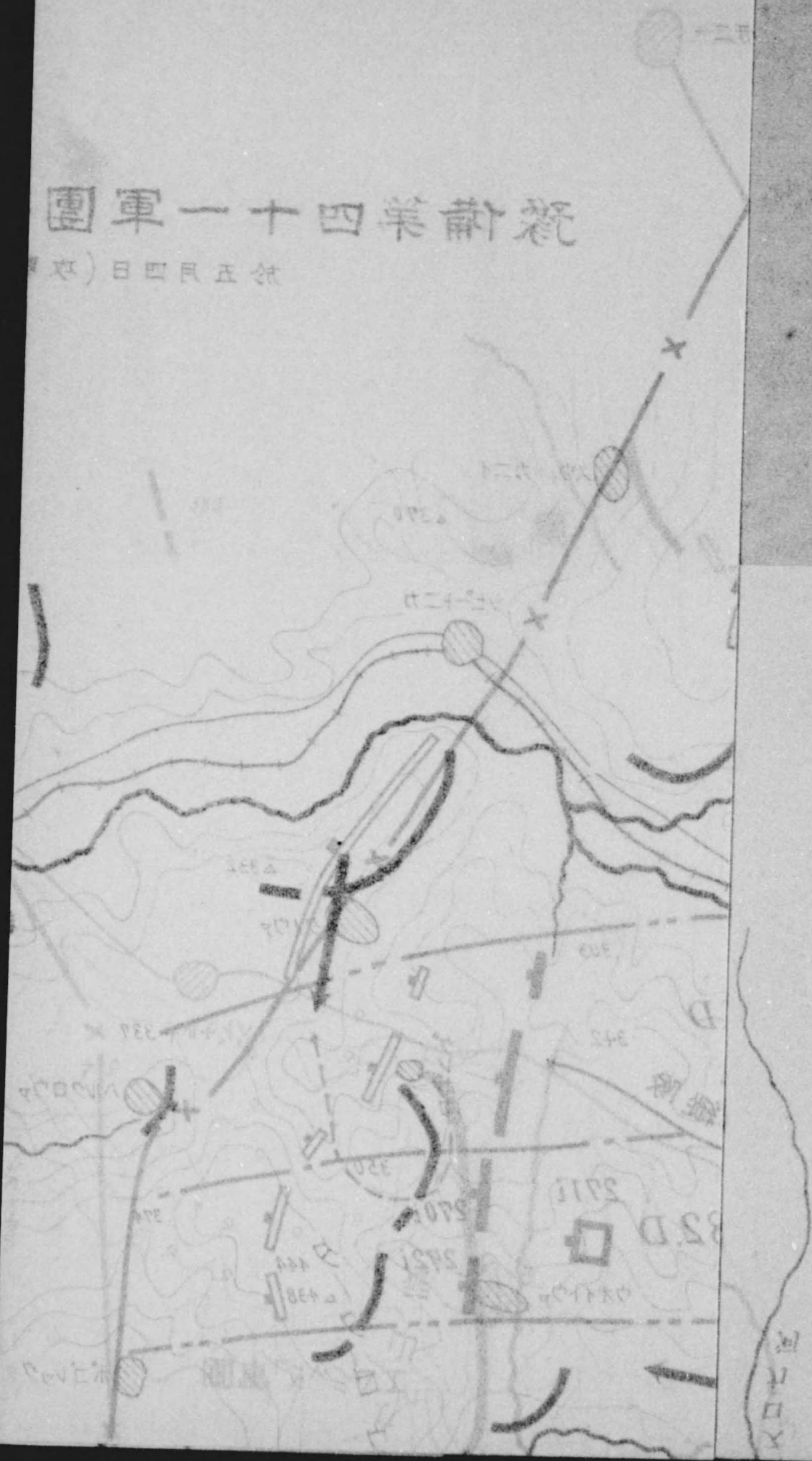
陣地突破戦は五月二日乃至五日即ち四日間を以て終了し六日乃ち第五日以後は追撃戦闘に移つた。

軍團の各部隊は五月六日午前三時から運動を起し全線退却に就ける露軍を追撃した。斯くて此追撃第一日は露軍の抵抗を受くることなく、第八十一師團は第一線としてウイスロカ河を越え同河を距る十六軒に達し、第八十二師團は其第二線としてウイスロカ河右岸地區に停止した。蓋し交通路に乏しき爲めである。

爾後連日追撃を續行し屢々露軍の抵抗を排除しつつ五月十一日サン河の線に達した。此行程は

新第 四十一軍團

五月四日(夜)



追撃戦闘に移りたる五月六日の出發地より直距離約八十軒に及んだ。其追撃戦闘の詳細は之を省略するが、激戦數日に互りたる後も尙ほ更に戰場外の追撃を相當遠く行つたことを注意すべきである。

六 損害、攻撃經過曆

損害 獨軍中豫備第四十一軍團が五月二日乃至六日即ち第一乃至第三陣地を突破したる直後までの損害は次の通りである。

區分	戦死		負傷		計		失綜
	將校	下士官、兵	將校	下士官、兵	將校	下士官、兵	
第八十一師團	一五	三二〇	三四	一、三六〇	四九	一、六八〇	二〇〇
第八十二師團	三	三三五	二二	八四二	二五	一、一七七	
合計	一八	六五五	五六	二、二〇二	七四	二、八五七	二〇〇

豫備第四十一軍團攻撃經過要圖

於五月四日(攻撃第三日)

第十七圖



入ロカ河

ウオラ、デボ、ウイエンカ

オストラゴラ

フォルスツ

54

パドナルカ

カ
エムミツヒ軍團
山脈

シロキ

クリーグ

ゴルリツツ

備考

五月三日夕ノ線

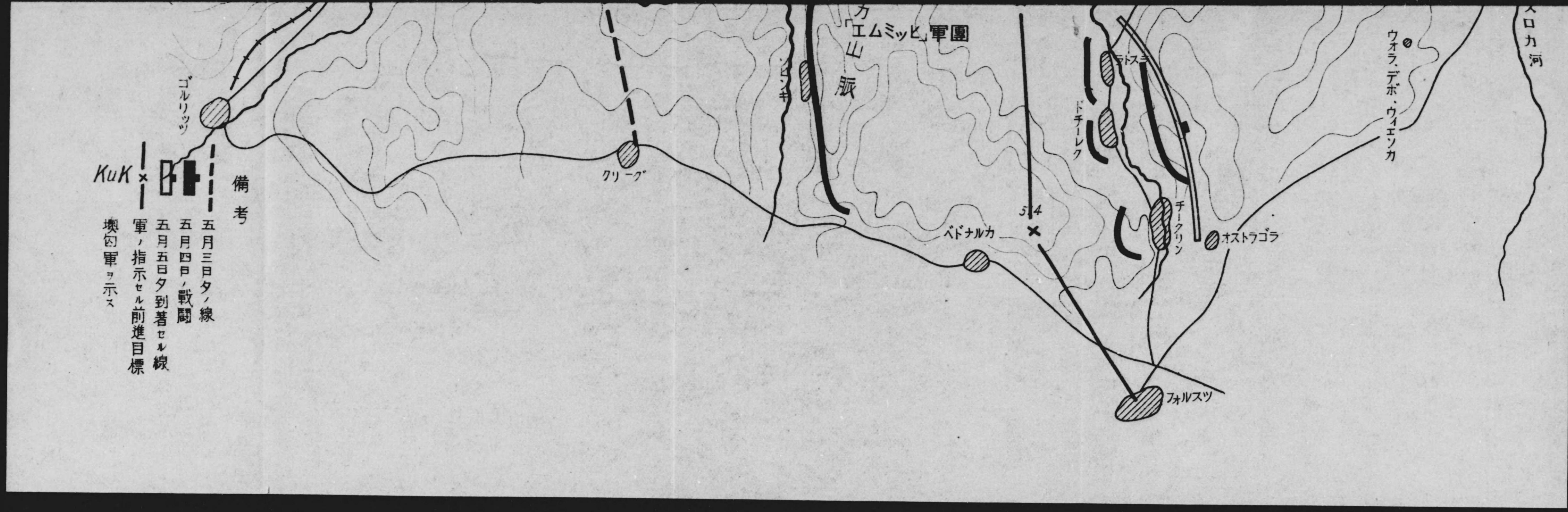
五月四日ノ戦闘

五月五日夕到着セル線

軍ノ指示セル前進目標

KuK

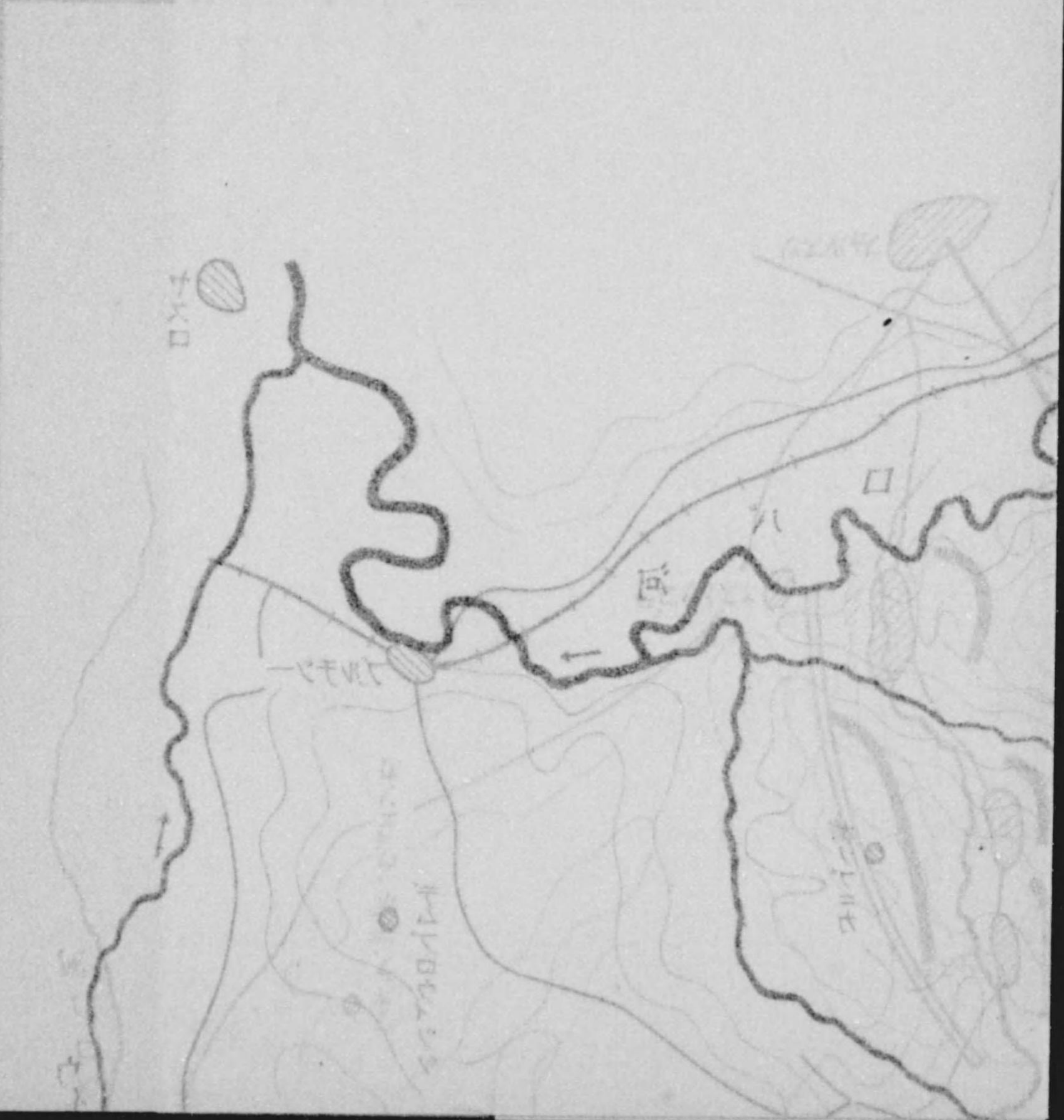
塹壕軍ヲ示ス



文藝雜誌要圖

(日三第)

第十十圖



右の損害は軍團の戦闘總員に對する百分比一三五で、我が南山の損害四千三百八十七は其戦闘總員に對する一二二である。而して南山は一日間の戦闘であり獨軍團の夫れは五日間に互る損害であるから、日本軍の損害が如何に莫大であつたかが判る。

攻撃經過曆

最高統帥部に於ける國內準備	自四月初旬 至四月下旬	約二週間
集中	至四月下旬	約二週間
攻撃準備(第十一軍)		三日間
攻撃第一日 第一線突破	五月二日	一日
同 第二日 第二線突破	同 三日	一日
同 第三日 第三線突破	同 四日	二日間
同 第四日	同 五日	
同 第五日以後、戦果の擴張、追撃	自同六日 至同十一日	六日間

七 評 論

イ 獨軍突破戰が概ね順調に成功したのは、種々の原因を算ふることができる。然し畢竟獨軍が秘密迅速に周到なる準備を整へ露軍をして之に對する充分の對應處置を完了せしめざりしこと即ち不意に而して機先を制したることが重大なる素因として擧げ得るであらう。其の上彼等が突破の實施に幾多の經驗を重ねた事實も看逃がすべからざる要素である。

之を我が南山の陣地攻撃戰闘の跡に顧みると、時代を異にし事情を異にするとは謂へ、攻撃準備の周到、攻撃材料就中重砲の使用、攻撃歩兵と砲兵との眞に緊密なる協同等に就て研究し且練磨を要するもの多くあるを想はざるを得ぬ。

ロ 露軍は元來防禦に長ずとの定評あるも、ゴルリツツの陣地戰に於ては寧ろ其の抵抗力の弱きを感ずる。之れは恐らく獨軍の攻撃威力が周到なる注意を以て充分に發揮せられたること、露軍の準備が出来なかつたこととの相乗せる結果であらう。吾人の將來戰に於て我が敵は、火器の威力に於て、又兵の射撃技能に於て我に比し優るとも劣らざるものあるは、實際視察せる人々の略一致せる感想である。若し之を然りとすれば、吾人は更に層一層、之が整備と訓練とに意を用ひ以て萬遺算なきを期せねばならぬ。

第十五 グンビンネン戰闘より觀たる戰場心理

の考察 (上) (第十七圖参照)

本評論に於て一般戰闘の經過に關し戰略、戰術上の研究が大分續いたから、爾後暫く、部隊内の實情を拾ひ上げ、戰場心理の一斑を窺ひ、實戰の場合に處する自己の修養に資し、指揮統帥上の參考たらしめたいと思ふ。

グンビンネンの戰闘は、歐洲大戰初期東方戰場に起つたもので、獨軍が優勢なる露軍に對し苦戰をなし、其結果第八軍司令官ブリットウキツツ大將が、一擧ワイクセル河の線に退却するに決したところ、最高統帥は斷乎之を排し、新ヒンデンブルグ大將を軍司令官に任命して攻勢に轉ぜしめ、彼の有名なタンネンベルヒの殲滅戰が惹起せられたのである。之が全般の經過に就ては干城堂發行世界大戰史講義録第二卷を参照せられんことを望む。

次に掲ぐるものは、グンビンネン戰闘に参加せる第十七軍團中の一師團又は一聯隊或は一中隊内の實情を述べたもので、大戰終了後獨逸へツセ中尉の著に係るものを摘譯し之に筆者が評を附したものである。

一 戦闘開始の前奏曲

一九一四年八月十九日、夕陽方に西山に没せんとする頃、東プロイセンに於けるアンゲラツプ河を渡つて東方へと進みつつある長蛇の如き一大行軍縦隊があつた。歩兵、砲兵、行李、縦列、人員、馬匹、機械等總てが一箇の運動物の如く、一箇の意思の如く動いて居つた。然し我が獨逸の何人が此の數千の愛兒が將に迎へんとしつある悲惨なる運命の日を豫感したであらう。實は國を擧げて其關心思念は西部戰場に於ける戰士の運命に注がれたのであつた。

リュツチヒヤロトリンゲン方面に於ける戦闘の雷鳴が高く轟き互つて國民の耳朶を奪ひ、從つて國土を露軍の馬蹄から免れしめんとしつある東方の戰士には、國民の精神的援助を缺きたるものと謂ふべきである。將士等も之を感知して居たのは事實である。然し、彼等は極めて困難であり、容易に成功を期し難き任務を甘んじて行き受け、唯一念、燃ゆるが如き熱情を以て其最善を祖國に捧げんと決意したのである。

評 國民の關心が専ら西方戰場に集中せられ、東方が閑却されたことを記述せられてあるが、果して文字通りの程度なりしやば、他の諸事實を綜合するとき某程度の割引を以て觀察せね

ばならぬ、然し此種のこととは戰場に於ける戰士の心理には鋭敏に感ずることであるから、國民の關心乃至後援に就ては、此間の消息を熟慮し、戰士の意氣を旺盛ならしむることに注意すべきである。

開戦と共に獨逸東方國境の防護は第八軍の任務となつた。其軍司令官はブリットウキッツ大將、隸下團隊の主なるものは第一、第十七、第二十、豫備第一の各軍團、豫備第三師團、後備三箇旅團、騎兵第一師團及要塞守備隊等であつた。而して露軍は二方面即ち一は東方ニーマン河方面より、又、他の一は南方ナレフ河方面より何れも優勢なる兵力を以て東普に侵入し來らんとする状態に在つた。従つて其任務達成には困難を伴ふや疑ふの餘地がない。

獨第一軍團は八月十七日東部國境スタルペーネン附近に於て、露のレンネンキャンプ軍（獨第一軍團の三倍）と激戦を交へたが、軍司令官の命によつてグンペンネン附近に退却せしめられた。然るに露軍の前進行動活潑ならざりしに鑑み、第八軍は先づ集合しありたる第一、第十七軍團等を以て攻勢に轉じた。之がグンペンネン戦闘となつたのである。

二 歩兵第三十六師團の夜行軍

歩兵第三十六師團は、第三十五師團と共に第十七軍團の編制内に在るもので、八月十九日夜、師團は軍團の右縦隊としてダルクレーメンよりワルテルケイメンに向ひ前進するの命を受けた。併し各隊では、何故に進軍し、何處に到り、明日何事を爲すや等、何等知る所なく、爲めに縦隊中には種々の流言が盛んに起つた。例へば「露國近衛軍團は前進中である」、「コザック兵は本日午後已にアングラック渡河點に現はれた」、「第一軍團は既に戦闘を開始した、恐らく大激戦となるであらう。」「道路上に地雷が埋設してある」等々、流言の特徴として其傳播が極めて迅速であり、恰も燎原の火の如く全縦隊に傳はつた。之を惹起したのは、人間の胸底に潜める或物の仕業である。或物とは何か、軍人は白晝衆人環視の面前に於て告白するを恥とする、然し暗黒は之を誘ひ出す、所謂恐怖である。

評 流言蜚語は、時の如何によらず、平、戦の何れに論なく、随つて生じ随つて傳はるものであり、之が爲め、或は笑ひ、或は怒り、時に興奮し、時に阻喪し悲觀に陥るものである。小にしては個人の運命を左右し、大にしては國軍を誤ることなしとしない。故に幹部たる者は、常に之に注意して、有害なる影響を未然に防止せなければならぬ。露軍の如きは此種宣傳に巧であり又、自から宣傳に左右せらるる特質があることを記すべきである。

更に行軍氣分を不良ならしめた事柄がある。即ち行進路上の悲惨なる景況である。縦隊の遙か前方より無限に連續して逃走して來る避難民の群れが、軍隊の行進を妨げたことである。彼等は實に哀むべき状態で同情に値する。或は純血の馬を驅るものなり、或は斑点ある家畜を追ふものあり、而かも飢えたる馬は路傍の牧草に嚙りついて動くを肯せず、疲れたる家畜は路上に蹲くまつて歩まうとせず、家財を山積せる車中には號泣せる婦女あり、子供あり、彼等は敵の暴行を受けた者もあらう、免焼金を取られた者もあらう。

評 開戦の際、露軍が東普の國境に進入するや、獨逸の避難民は混亂狼狽して軍の行動を妨害し且つ軍隊の志氣を沮喪せしめた。記事によると、伯林に逃げ込んだ者だけでも數萬に上つたと謂ふ程で、國土の一小部分を敵に踏み込まれたのみで尙ほ且つ其有形、無形の影響は大きいのである。我々は未だ其苦き經驗を知らぬのは大慶である。然し之が爲に、國防思想が眞に徹底を缺く様に感ぜられぬでもない。他國の悲惨なる状態に鑑み、吾人は一步も國土を敵に委せざるの覺悟を要する。が然し將來戦に於ては、空中よりする慘害は、戦争の勝敗に拘はらず必ず見舞はるべきものあることを覺悟しなければならぬ。

轉じて觀察の眼を行軍縦隊の上に放つて見る。彼等戦士は縦隊の中に在つて、一念遠き故郷の

一室に飛んで居る。

燈火は静かに明るく照らす、妻は椅子により、兒は戯るるを夢想しつつあるとき、妻は俄かに物に驚きたる面持で其の仕事をやめた、一通の手紙を受取つて讀み始めた、而して急ぎ紙を取り筆を走らせたと夢幻を續けつつあることは想像し得るであらう。

忽ち號令が響き渡つた「止レ、又メ銃」、夢想者は我にかへつた。然し間もなく前方から家財を運ぶ車が相次いで隊列の邪魔をなし、泣き叫ぶ車上の子供等の悲みを聞くと、思念は再び遠く故郷に飛ぶ。而して再び中隊長の「擔へ銃」の號令が彼等を覺醒せしめるのであつた。

彼等は兩日間に炎熱焼くが如き日に砂塵濛々たる中を意に介せず、砂礫道を困難しつつ三十軒以上を行進した。夜の宿營の爲めに與へらるるものは、藁小屋が上等の部類で、地上の板張り又は路上に横臥するのであつた。加之、夜間降雨に悩まされ、朝起きても一點の火氣もなく、平素最も困難なる勞働に従ふ者すら堪へ難き程の冷氣を感じる。野戦庖厨より支給せらるる食事は毎日不同であり、朝食が正午に與へられたり、夕食が深夜に及ぶこともあつた。

我が行軍縱隊は屢、停止せしめられ、僅かに二時間の前進に十回にも及んだ。之が爲、縦隊の疲勞は却て増大し、號令は殆んど機械的に發せらるるのみであつた。兵等も亦漸く退屈を感じ不

平の聲をすら秘に隨所に洩らすに至つた。はては、今まで同情の眼を以て遇したる避難民に對しても之を叱責するの聲すら起るに至つた。中隊は初めこそ軍歌を高唱したが、次第に減じて僅かに先頭の二分隊のみとなつた。而かも彼等は中隊長の視線が直接彼等の上に注がれるので之が怖さに唱へたのである。

我が擲彈兵は午後五時三十分アングラップ河畔を出發したが、二時間の後尙ほ僅かに五軒隔つるダールケイメンにも達する能はざる有様であつた。之は屢、停止した爲めであつた。黄昏時になつて始めて同所に著いたとき例の如く「止レ」の號令があつた。然し兵等は最早第二の號令を待つことなく鋪道の上に崩れた。日は既に暮れて坐臥すること半時間に及ぶも未だ何等の命令がない。然るに突如として第七中隊の何者かが高く叫んだ、曰く「露軍は我が前衛を襲撃しつつあり」と。同時に遙か前方に銃聲が聞えた。坐臥せる者は一齊に恰も發條の如く躍り立つた。其蒼白の面上に一種異様の恐怖の色が見えた。是に於て將校等は其實情を彼等に説明して其鎮靜を恢復せしむるを要した。

評 初陣に於ける行軍中の實情に就ては能く描寫されてある。思郷の念、不意の敵情に對する恐怖、行軍軍紀の漸次弛緩する有様、不規則的行軍の疲勞等、幹部として注意し置くべき事柄